

Annual Report 2021

Laboratory of Regional Design with Ecology

Hosei University

法政大学エコ地域デザイン研究センター

2021年度報告書

表紙 工事中的お茶の水橋と JR 御茶ノ水駅
裏表紙 交差する神田川と東京メトロ丸の内線
写真 Yusuke SHIMADA / apgm*

はじめに

思えばこの一年も、コロナコロナで一色になってしまった。我がエコ研も昨年度の年度末報告会をオンラインで実施した後も、ついで対面で会合する機会はなかった。

ギリシャ文字でナンバリングされるコロナの変異種名は「 γ (デルタ)」を通過し、「 \omicron (オミクロン)」まで達した。「 ψ (プサイ)」、「 ω (オメガ)」が登場する日も近い。無駄にギリシャ文字の知識だけがが増えていく。

Covid-19 はコウモリを宿主としていたウィルスがヒト型に変異したことで、免疫を持たない人類に爆発的に感染が広まったと言われている。ヒト型に変異するきっかけとなったのは、本来であれば交流がないはずの生物が接触する機会が増えたことが原因とされており、奥地開発の進行や温暖化の影響で生態系が変質したことが大きな要因であることは間違いない。

また、爆発的に感染が広まったのも我々の作り出してきた都市の構造と深く関係がある。都市生活に必要なものは世界中から集められており、サプライチェーンなしには持続が不可能となっている。そしてこの流通網によって同時多発的にパンデミックが巻き起こされた。かつて大ヒットした映画「復活の日」では、スタンドアローンだった南極基地だけが生き残ったが、Covid-19 の感染は南極基地にまで及んでいたという。SFの想像を超えて世界はつながっており、もはや桃源郷は地球上に存在しない。

さらに、消費地と生産地が偏在していることもCovid-19 を加速させたと言われている。感染予防で必要だったマスクの殆どが中国で生産されており、その流通が滞ったことが感染を広げた一因とされている。

ポストコロナの社会では過度なグローバリゼーションの見直しは必須である。いかに都市を自

立させるか、自立のための領域をいかに設定するのが、今後の議論となってくるだろう。

我々が長らく議論してきたテリトリーオはまさにこの議論を先取りしたものであり、広く社会に提供していくタイミングが近づきつつある。必要とされる時に必要とされることができるように備えていきたい。

今年度の不便な状況にも関わらず熱心に活動してくださった兼任研究員、兼任研究員の皆様、学生諸君、エコ研事務局の倉本課長・宮崎様・津久井様、その他学内外からサポートしてくださった皆様に感謝申し上げたい。特に総合資格学院様の継続的なご支援に心より御礼申し上げたい。

今後も皆様のエコ研へのご支援をお願い申し上げます。

2022年2月24日

法政大学エコ地域デザイン研究センター

センター長 岩佐明彦

目次

はじめに	1
1 プロジェクト報告	
<hr/>	
テリトリープロジェクト	
府中玉川プロジェクト	4
潟プロジェクト	6
瀬戸内プロジェクト	8
佐原域学連携プロジェクト	10
東京都心プロジェクト	
外濠市民塾	12
千代田学事業－千代田区における外部空間のニューノーマル－	14
2 関連研究（2020 年度報告会より）	
<hr/>	
Wi-Fi パケットセンサを用いた日比谷公園周辺の交通流動調査	18
道路空間の利活用－コロナ前後の社会実験の比較－	20
玉川上水と近代化－水車動力がもたらすもの－	22
近代化における江戸東京の水車－都市の発展と水路に生まれた生活空間－	24
江戸・明治期における越後平野西部テリトリーオに関する研究	26
狭山丘陵「北川」と市民活動の軌跡－里川保全と里山保全の共時的発展から連環へ－	28
3 テリトリーオの展開「実践者とのクロストーク」（2020 年度報告会第 2 部）	
<hr/>	
尾道の空き家・空き地を活かす	33
あわらテリトリーオ 大地の恵みと女将ネットワークが未来をつくる	39
みなとまち新潟・進化する日和山（12.3m）物語	45
山の暮らしのアップデート	54
ディスカッション	63
4 講演記録「今、真の都市再生とは？－自然・歴史・コモنزの視点から」	
<hr/>	
第 46 回法政大学大学院まちづくり都市政策セミナー基調講演	66
5 研究業績	
<hr/>	
研究業績	86
6 活動報告	
<hr/>	
活動報告	96
法政大学エコ地域デザイン研究センター メンバー	100

1 プロジェクト報告

Project Report

府中・玉川プロジェクト シンポジウム開催報告

Report from Fichu-Tamagawa project

神谷 博*

Hiroshi KAMIYA

キーワード：水都学、府中、武蔵国、玉川、中世、源流

2021年8月28日(土)、シンポジウム「玉川をめぐる名水と歴史と景観」～『中世武蔵国絵図』の読み解き～を開催いたしました。リモート開催とし、2部構成にして、第1部は事前配信し、第2部をシンポジウムとパネルディスカッションとしました。事前申込者は140名(8月2日時点)で、当日第2部参加の最大数は97名でした。

このシンポジウムは、2020年11月11日に「サバイバルエコロジー」と題して、神谷博法政大学退任記念「環境生態学」特別講義を行いました。その続編にあたるものです。時間がとり切れずに歴史部分をカットしたため、それを今回フォローしました。また、シンポジウムは、2019年3月23日に実施した江戸の基層シンポジウム「古代・中世の府中から武蔵国を探る」を継承するものとしても位置付けていました。「中世武蔵国絵図」については、申込時に希望者に郵送を行いました。用意した100部がはけ、ほぼ残部はなくなりました。

主催は、法政大学江戸東京研究センター及び法政大学エコ地域デザイン研究センターですが、共催として国分寺名水と歴史的景観を守る会が加わり、後援に多摩川流域懇談会、野川流域連絡会、みずとみどり研究会、多摩川センターの4団体が加わりました。

【プログラム】

第1部<事前配信>「中世武蔵国絵図」の解説

(神谷博特別講義続編：YouTube 動画限定公開)

名水と歴史的景観の保全をめぐる／中世武蔵国絵図の解説／玉川源流の伝承：畠山重忠と玉姫の物語／玉姫神楽公演

第2部<ライブ配信>シンポジウム・パネルディス

カッション (8月28日(土)14:00～16:00)

テーマ：「中世武蔵国における玉川と国府・国分寺」～歴史的景観と伝承めぐって

登壇者：小野一之(大東文化大学非常勤講師)「古代と中世/多摩川と玉川」／依田亮一(国分寺市教育委員会)「恋ヶ窪の中世遺跡と畠山重忠伝承」／神谷 博(法政大学江戸東京研究センター客員研究員)「武蔵野景観考」

コメンテーター：陣内秀信(法政大学名誉教授)

まとめ

参加者も多く、絵図にも高い関心が寄せられ、パネルディスカッションもよい意見交換ができました。府中や国分寺に残る中世の伝承について掘り下げた議論ができたことで、「伝承」の持つ現代的価値を再認識する機会となりました。反省点としては、リモート開催のネット環境が不十分だったことで、パネルディスカッションの内容が聞きづらかったとの反応がありました。成果としては、EToSの水都プロジェクトの一環である江戸基層研究と、エコ地域デザイン研究センターの府中玉川プロジェクトに跨る研究企画として継続できたこと、及び地域の自治体及び市民団体との連携を深めることができました。中世江戸基層研究としては、今後の課題として関八州を視野に入れた取り組みを継続し、深める必要があると感じました。

法政大学エコ地域デザイン研究センター客員研究員*



Youtube 事前配信「名水と歴史的景観の保全をめぐる」



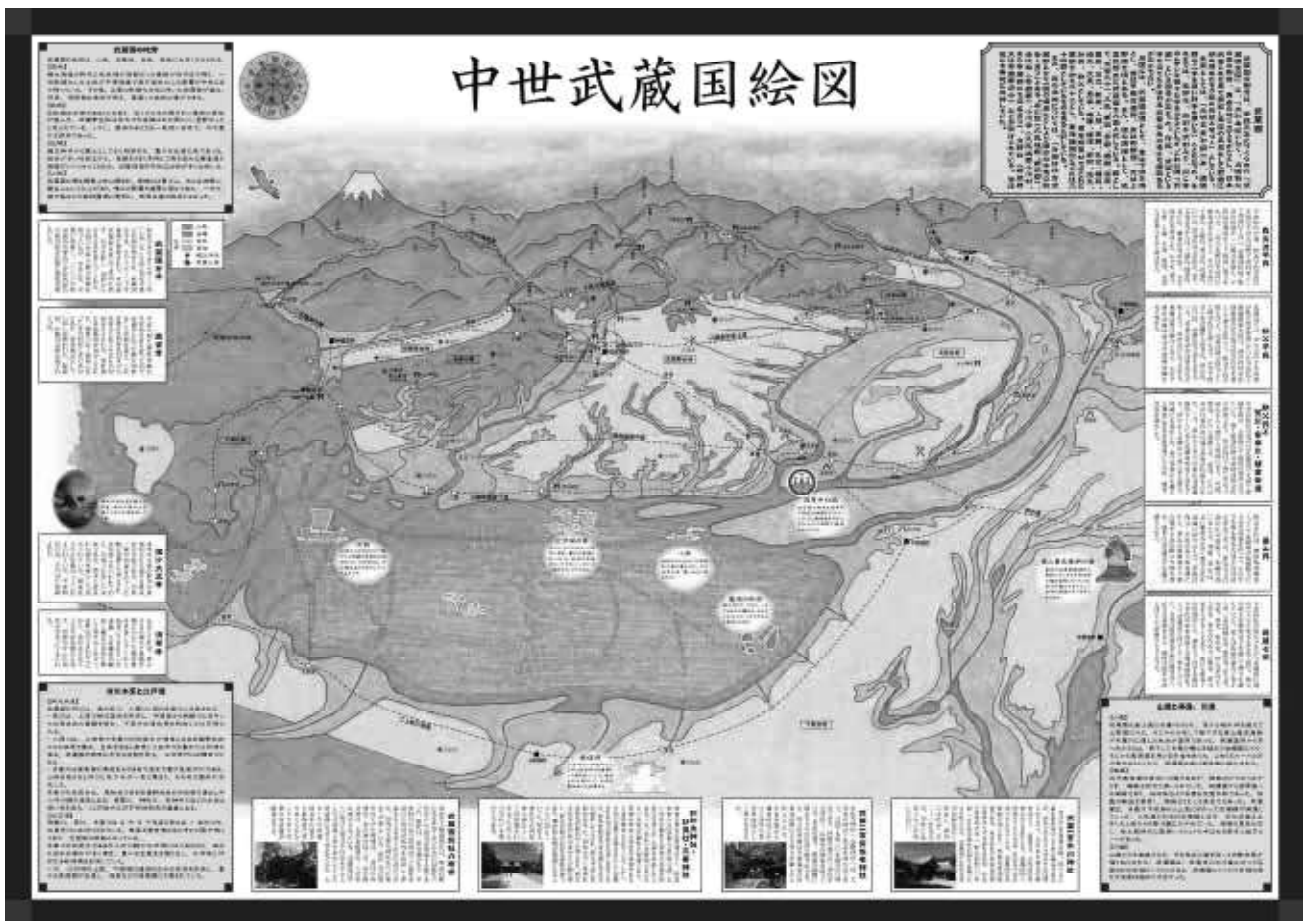
Youtube 事前配信「中世武蔵国絵図解説」



Youtube 事前配信「玉川源流の伝承」



Youtube 事前配信「玉姫神楽・池の平」



潟プロジェクト

Research project about lagoons and ponds in Echigo plain

福井 恒明*

Tsuneaki FUKUI

メンバー： 福井恒明、岩佐明彦*¹、堀越義人、相澤航平、加計幸陽、志村遥奈、萩原隆太、齋藤浩志郎*²、三木歩嵩*³

キーワード： 潟、環境、治水、生業、テリトリー

1. はじめに

新潟市は市域に対する湿地面積比率が約 44%を占めており、2019 年度には「田園地域と市街地の豊かな価値を循環させながら、都市全体が調和ある発展を遂げる『田園型環境都市』を目指し、これを世界に発信するため、『ラムサール条約の湿地自治体認証』に申請し、国内初の候補都市」となった。

新潟市を含む越後平野には潟と呼ばれる湖沼が数多く存在し、明治期には約 120 の潟がみられた。そのほとんどは干拓によって農地化され、現在は大小 16 箇所程度の潟が残っている。ラムサール条約登録湿地である佐潟や、鳥屋野潟、福島潟、そして信濃川や阿賀野川といった河川は、越後平野の水循環や環境にとって重要な存在である。

新潟市潟環境研究所（2014 年度～18 年度設置、現在では環境部環境政策課に統合）では、大熊孝・新潟大学名誉教授（河川工学）の指導のもと、潟の環境についての保全計画策定や普及啓発を行ってきた。

潟に関連する活動は、地域住民による環境改善・維持管理、野鳥観察や植物育成、歴史文化に普及啓発などが数多く存在し、地元の新潟国際情報大学の研究グループも関わるなど、精力的かつ継続的に行なわれている。

2. 潟プロジェクトの経過

エコ研と潟との関わりは、2017 年度から始まった。新潟市潟環境研究所が越後平野全域の潟環境のありかたの構想と表現に関する研究を NPO 法人 GS デザイン会議に委託し、東京大学（中井祐教

授）・早稲田大学（佐々木葉教授）・法政大学（福井）の合同チームが学生主体で取り組んだ。

新潟市の委託研究は単年度であったが、早稲田大学と法政大学のチームは、2018 年度以降も自主的に潟研究を継続した。法政大学チームはラムサール条約登録湿地である佐潟を利用・管理してきた赤塚集落を対象としてヒアリングや文献調査を実施し、集落と潟との関係についての研究を実施したり、第 4 期佐潟周辺自然環境保全計画（2019 年 4 月改定）のための住民ワークショップへの参加・協力を行ってきた。

2020 年度以降は新型コロナウイルス感染症拡大のため、現地調査やヒアリングは大きく制約を受ける中で、福島潟・鳥屋野潟・佐潟の現状確認、新設される福島潟水門の景観デザインに関する協議参画、福島潟治水計画の過去資料閲覧と県担当者との意見交換を行った。2020 年度には文献調査をもとに佐潟のある西蒲原地域を対象に近世の地域構造の概要とその変化を地図上に表現し西蒲原テリトリーと位置づけた。

エコ研の潟プロジェクト全体としては、越後平野の個別の潟や越後平野全体に着目し、テリトリー概念を導入することによって、自然・社会環境と潟の関係を把握・表現し、潟を中心とする水系の意義や価値を明らかにすることを目的としている。

3. 佐潟における市民活動の把握

2021 年度も新型コロナウイルス感染症が収まらず、当初予定していた現地調査と市民活動の担い手に対するヒアリングを実施することができな

かった。そのため佐潟に関する市民活動について、ウェブサイトやSNS 上での情報発信を収集し、市民活動の種類や担い手などについての基礎的情報を収集した。

主な活動主体として、「佐潟と歩む赤塚の会」「赤塚商工会」「赤塚観光協会」「コミュニティ佐潟」「新潟砂丘遊々会」「里潟ネットワーク会議」などがあり、それぞれ多様な活動を実施している。これらは活動内容によって共催などにより協力する関係を形成している。

「佐潟と歩む赤塚の会」が関係する活動は特に多様である。たとえば佐潟水鳥・湿地センターと協力する活動には「潟舟体験(かつて佐潟で多く使われていた潟舟に乗れるイベント、図1)」「ナイトハイク(月明かりの中で佐潟周辺を歩く)」「凧つくり凧あげ大会」がある。さらに規模の大きな活動である「佐潟ラムサールフェスティバル」の実行組織の中心を務め、「佐潟まつり」「佐潟鯉まつり」などにも協力している。かつて佐潟は、漁労やハス・レンコン収穫などの生業の場であったが、そうした生



図1 佐潟の潟舟 (2018年撮影)



図2 新潟砂丘遊々会が整備した見晴らしの丘 (2020年撮影)

業が失われ、水門や水路が近代化されたことによって水質や底質が悪化した。定期的な清掃により潟の状態を改善する「潟普請」が地域主体で実施されており、佐潟と歩む赤塚の会はその事務局を担っている。

また、「佐潟砂丘遊々会」は佐潟周辺の砂丘の魅力を周知し、ウォーキングイベントを実施するとともに、DIYによる展望台整備(図2)や景観上アクセントとなる樹木周辺の環境整備を行っている。

「佐潟水鳥・湿地センター」は鳥類や湿地の保全に関する普及啓発等を行う施設であるが、その目的の範囲を超えて「佐潟まつり」への協力や演奏会の場を提供するなど、地域活動の拠点として機能している。

我々が着目しているのは、活動主体それぞれの興味の対象や趣旨が異なっているものの、それらが少しずつ重なり合うことによって一体的な活動を形成しているように見えることである。地域をテリトリーオとしてとらえ再構築する上で、これらの活動主体の存在とその連携は重要な役割を果たすと考えられる。

4. 今後に向けて

本来の計画では、ここまで調査した活動主体の関係性をヒアリング等によってより明確にした上で、それらが佐潟を含む西蒲原地域の水系をベースにした現代のテリトリーオとしてどのように持続し発展しうるのか、現地関係者との意見交換を交えて実施する予定であった。

引き続き、地元での調査・意見交換を進め、文献調査の追加等によりテリトリーオとしての地域構造の記述の解像度を高めて行く予定である。

法政大学デザイン工学部教授*1
法政大学大学院デザイン工学研究科修士課程*2
法政大学デザイン工学部4年*3

瀬戸内テリトリーオに関する研究 遠賀川流域の石炭産業と銀山街道を事例として

A Study on the Setouchi Territory

A Case of The coal industry along the Onga River Basin And the Ginzan Kaido

樋渡彩*1、陣内秀信*2

Aya HIWATASHI, Hidenobu JINNAI

メンバー：樋渡彩・陣内秀信・太田結貴・野市将太

キーワード：瀬戸内、テリトリーオ、遠賀川流域、銀山街道、石炭産業

1.はじめに

本研究は瀬戸内海を中心とした地域構造を考察するものである。本稿では瀬戸内に供給される石炭の産地である福岡県の遠賀川流域と、島根県に位置する石見銀山から尾道（広島県）と笠岡（岡山県）に銀を運ぶ道である銀山街道の2つのテリトリーオに着目する。

2. 遠賀川流域の石炭産業で形成された地域構造の変遷

石炭は瀬戸内の一大産業だった製塩業や船の動力として重要な資源である。

石炭産業に関する研究は、近代産業遺産の遺跡調査が主である。飯塚市の石灰製造窯跡や三菱飯塚炭鉱巻き上げ台座などの跡を現在も見ることができる。各町の郷土史や産業史については、直方市石炭記念館、飯塚市歴史資料館などの博物館の展示資料から、各地における石炭産業が活発だった当時の姿を知ることができる。本稿では、これらをつなぎ合わせて、石炭産業で形成された地域を描いた。

また、石炭産業に関する研究は、「筑豊」地方の視点から鉄道敷設後の経済発展を扱うものが多い。しかし、鉄道敷設以前から川を利用して舟で石炭が運ばれていた。石炭産業と結びついた地域の全体像を把握するためには、舟運で形成された地域を描く必要がある。そこで本稿は、遠賀川と結びついて発展した石炭産業の地域像を明らかにした。

考察の結果は次の通りである。

遠賀川流域では石炭産業が興る以前から人が住んでおり、初期は拠点はいくつか点在する分散型であった。

中世には遠賀川を軸とした舟運があり、内陸部と河口の芦屋を結ぶ線型の地域構造があ

ったことが明らかとなった。この時、拠点は芦屋である。江戸時代になると街道も整備され、陸側にも線状の地域構造が形成された。

18世紀に石炭産業が興り、19世紀後半には、石炭産業と河川交通による面的な広がりのある地域構造に変化したことを確認した。この時の拠点は若松である。大船の寄港地が芦屋から若松に移転したことで、若松が拠点になるきっかけとなり、堀川開削が新たな航路をもたらし、若松はますます重要な港町になった。

そして1891年に鉄道開通後、鉄道がいくつも敷設され、石炭産業と鉄道が結びついた面的な地域構造に変化したことを述べた。

3. 銀山街道「石見路」で形成された地域構造

次に取り上げるテリトリーオは、銀山街道である。

石見銀山は、1526年に本格的に開発が始められ、1600年に石見銀山は徳川幕府の支配下になり、開発が進められた。約400年間にわたって採掘された。戦国時代、石見銀山が毛利氏の支配下に入ると、毛利元就は温泉津を拠点に銀山開発を行うようになった。1607～08年頃以後、新たに石見銀山から広島県尾道市までの街道が整備された。大森から粕淵、九日市、酒谷、赤名をへて尾道に至る街道は江戸時代を通じて銀の輸送路となり、銀山街道と呼ばれるようになったという。

石見銀山で産出し、精錬された銀は約40kgが木箱に収められ、菰包みにしたものを2箱ずつ馬に負わせて尾道まで運ばれた。江戸時代には街道沿いに置かれた宿場ごとに銀を荷継するのに、1つの宿場が用意した馬が250頭、人夫が400人という記録も残っている。

瀬戸内海に抜けるルートは2つあり、1つは大田市大森町から尾道に通じるルートで、灰吹銀の輸送で主に使われていた。その道程は約130kmで、3泊4日かけて人馬が往来した。尾道に到着した灰吹銀は、瀬戸内海を船で兵庫県室津まで運ばれ、大坂に輸送された。

もう1つのルートは、吉舎町から上下町を経由して、笠岡（岡山県）まで運ぶルートである。年貢銀が往来していたと言われている。

街道の脇には、石造の道標もあり、目的地までの距離などが示されている。街道の分岐点や、街道から社寺や名所への分岐点などに設置された。

現地調査は、三次、吉舎、甲山、上下を訪れ、資料収集およびヒアリング調査を行った。

研究のまとめとしては以下の通りである。

三次は江戸時代に新たに整備した城下町であったが、吉舎や甲山では、中世以前からすでにあった街道が利用されたことを把握した。すでにあった街道ではあったが、銀山街道として整備されたことで交通量が増え、発展していったことが確認できた。そこには陣屋、御銀蔵、籠屋、茶屋、番所など都市機能が設置された。

江戸の絵図や地籍図から街道沿いは町人地であったことを確かめた。街道沿いには、卯建のある建物の並ぶ景観が形成されていたことがわかった。街道沿いの木造建築は洋風なモダン建築に建て替えられた場合もあったが、これは明治、大正時代もなお街道が使われ続けていたことの現れである。これらの町の街道沿いでは、現在、空き家になっているだけでなく、駐車場や空き地として建物がない場所も多く存在する。かつては商家の並ぶ特徴のある景観が各地に存在したことがわかった。

4. おわりに

遠賀川流域の地域構造は長い時間軸のなかで、点から線、そして産業と結びつくことで面的に広がっていったことが明らかとなった（図1）。そこにはインフラの変化による地域の変容も確認できた。このように産業から地域構造の変化を捉えていくことで、新たな地域の見方を示唆できると考えられる。

銀山街道では、この特徴的な町と町を人や馬が活発に往来する広域の地域が形成されて

いたことが確認できた（図2）。このように、石見路は現在の島根県と広島県、岡山県を結ぶ重要な街道であることが明らかとなった。街道を軸に地域を捉え直すことで、かつて育まれていたその場所本来の地域の枠組みを浮かび上がらせることができると考えられる。

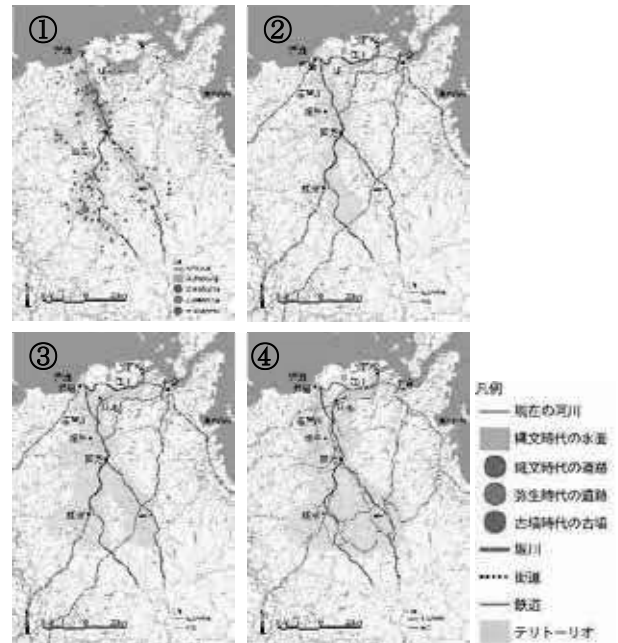


図1 遠賀川流域の地域構造の変遷
①点・分散 ②線・舟運 ③面・舟運と結びついた地域 ④面・鉄道と結びついた地域



図2 銀山街道の位置
日本海側：大森から温泉津、大森から鞆ヶ浦
瀬戸内海側：大森から尾道、大森から笠岡

法政大学エコ地域デザイン研究センター客員研究員*1
法政大学特任教授*2

佐原の歴史的な文脈とテリトリーのアプローチ－佐原域学連携プロジェクト 2021

The historical context of Sawara, and the approach of “ Territories”
Cooperation Project with the Sawara area in 2021

小島 聡*

Satoshi KOJIMA

キーワード： 水都、佐原テリトリー、古層・基層、近世自治都市の先行条件、
危機とレジリエンス、環境改変

1.はじめに

2021 年度から千葉県香取市佐原地区との域学連携プロジェクトがスタートした。ただし、COVID-19 の第 5 波の影響もあり、キックオフ・ミーティングと佐原の古代に関する講義の合計 2 回の研究会を実施するに止まり、夏期の現地調査も延期せざるをえなかった。そこで、このプロジェクトのスタートに至る経過とともに、2 回の研究会から見えてきた今後の方向性について、以下で確認しておきたい。

2. 域学連携プロジェクトに至る経過

佐原との関係性は、2014 年の法政大学人間環境学部による現地実習を経て、2017 年に NPO 法人佐原アカデミアと同学部のインターンシップ・プログラム(キャリアチャレンジ)から本格化した。その後、2019 年 3 月には、北総四都市江戸紀行活用協議会と法政大学江戸東京研究センターの共催による第 1 回佐原「江戸優り」フォーラムが開催され、田中優子前総長が「『江戸はネットワーク』再論」と題する基調講演を行った。翌 2020 年 3 月も第 2 回佐原「江戸優り」フォーラムが企画され、陣内秀信特任教授が、「『水都』の歴史から考える世界と日本」について基調講演を行い、パネルディスカッションでは、「『水都』佐原を読み解く～テリトリーとまちづくり～」について議論し、域学連携プロジェクトをスタートさせる予定であった。しかし、COVID-19 が始まり、第 2 回フォーラムは延期となり、やむをえず少人数で現地視察を兼ねながら、域学連携プロジェクトについて協議を行った。

3. 2021 年度の研究会

①第 1 回研究会

その際の議論を整理し、翌 2021 年 3 月 26 日にエコ地域デザイン研究センター(以下、「エコ研」と表記)と NPO 法人佐原アカデミアは、オンラインによるキックオフ・ミーティングを行った。まず、2020 年の現地視察の際の議論を整理し、エコ研からは、いくつかの共同研究の視点を提示した。第 1 に、佐原の「水都」の軌跡について、近世自治都市の先行条件として中世も視野に入れ、近現代までの 500 年以上の時間軸でとらえ、かつ未来についても展望するという方向性である。なお、キックオフ・ミーティングでは、先行条件について、古代まで遡る必要性が指摘され、都市史の時間軸をさらに伸ばすことが合意された。

第 2 に、「水都」とともに、エコ研にとって研究上の中核的な概念である「テリトリー」を軸として、都市の成長・衰退・再生の軌跡と重なるであろう「佐原テリトリー」の形成・持続・変容について検討するアプローチの採用である。これにより、エコ研の研究ストックを活かした歴史的な文脈の探究が可能であり、また比較都市史へと視野を広げることが可能になる。

さらにいえば、テリトリーを軸とした場合、江戸の自然災害と飢饉、戦災、東日本大震災、COVID-19 への佐原の対応からも、〈危機とレジリエンスの都市史〉を補助線として引くことが可能であり、それは自治・コミュニティの社会史でもある。関連して佐原アカデミアからは、テリトリーと政治・行政の関係性について問題提起がなされ、佐原という都市の多面的な権力構造や江戸との対抗的相補性とも呼べるデュアルな構造など、「権力」(Power)という視点についても議論が行われた。

第 3 が、歴史的町並み保全の現代史から未来を

展望するに際し、21世紀における空間価値の転換（水辺の喪失→復権）を意識することである。たとえば、オランダの運河の利活用などから類推した小野川の価値の再考など、国内に限らず世界的な視野で、佐原の「水都」性をとらえるアイデアが提案された。

第4に、そのためにも、またエコ研のこれまでの専門性を活かすためにも、空間履歴を把握することである。たとえば、造り酒屋の分布をはじめ集積した建築物の用途・タイプの履歴など、年代ごとの土地利用の変化を検証することが提案された。これに対して、NPO法人佐原アカデミアからは、人文科学や社会科学の視点をふまえ、物理的空間だけではなく公共空間・社会空間としてとらえる必要性が指摘された。

最後に第5として、テリトリーを軸とするならば、小野川沿いだけではなく、佐原の後背地（ヒンターランド）との関係性という広域的視点が提案された。

以上、エコ研から提示した共同研究の視点に基づく議論のほか、キックオフ・ミーティングでは、成果物に関するイメージとして、エコ研の過去の域学連携の成果物である『水の郷 日野 農のある風景の価値とその継承』（鹿島出版会、2010年）も参考にしながら、①佐原の郷土史研究（伊能忠敬の地域経営等）のストックの活用、②エコ研の研究資源とのミックスによる新たな佐原の都市像の探究、③学際的なアプローチ、④これまでの都市史の刊行物にもみられるビジュアルなアトラス（通史・写真・図）、⑤回顧と展望の2つの側面を有する社会への訴求力（サステナブルな佐原＝「懐かしい」未来像の提示）などについて提案された。

②第2回研究会

7月23日に、オンラインで第2回研究会が行われた。第1回のキックオフ・ミーティングにおいて、近世自治都市の先行条件として古代まで遡る必要性が指摘されたため、NPO法人佐原アカデミアの小笠原永隆理事が、「佐原テリトリーの古層・基層～考古学的視点から」をテーマとして講義を行った。小笠原理事による講義の概要は以下

のとおりである。縄文海進の頃の香取海が利根川東遷により陸地化したという環境変動があった。古墳時代後期（6世紀頃）の大和朝廷による地方統治では、香取海周辺は海上交通の拠点が多かったため国造を分立させ、砂丘や自然堤防には古墳が残された。また、多くの「津」と「海夫」（漁民）による地域社会が生まれた。さらに香取海は、外海につながる東北への軍事的な要衝であったため、6～7世紀には鹿島神宮とともに香取神宮が置かれ、7世紀後半から8世紀には周辺集落を「神戸」として組織化していった。このように、大和朝廷による香取海の海上交通＝物流を抑える地方豪族の地方統治への編成という政治権力と、東国進出のための香取神宮という宗教権力の複合的な支配構造が形成され、そこに「神戸」として組織化された砂州上の海夫（漁＋物流）の集落による地域社会の原型が成立した。これが小笠原理事による佐原の古層・基層に関する仮説である。

質疑応答と議論においても、歴史的な文脈に関する2つの仮説を共有した。第1に、佐原テリトリーの古層・基層には、豊かな内海であった香取海を舞台とする先進文化圏が存在したのではないかと。第2に、その後、利根川東遷による大規模な環境変化により、地形構造・生態系・テリトリーの変容が起き、並行して佐原が江戸に組み込まれながらも近世自治都市が成立したということである。

第2回研究会では、最後に、生態学の視点も入れた香取海から利根川流域への環境変動・テリトリーの変容や、近世自治都市の起源といわれる中世末期の佐原像について、香取神宮という宗教権力の勢力拡大とともに見ていく必要性を確認した。

その後、エコ研内部では、縄文時代からの利根川文化圏に関する資料の所在についても議論を行い、2022年度は、COVID-19の状況を見ながら研究を進める予定である。

法政大学人間環境学部教授*

外濠市民塾

Sotobori School for Citizen Project

福井 恒明

Tsuneaki FUKUI

メンバー：陣内秀信*1, 福井恒明*2, 高道昌志, 小松妙子*3

キーワード：外濠、住民参画、企業市民、地域連携、ワークショップ、外濠再生憲章

1. はじめに

活動名称に「市民塾」を掲げる外濠市民塾が市民と直接向き合う活動ができなくなって久しい。概ね月に一度開催しているオンライン幹事会は、法政大学・東京理科大学・東京都立大学・日本大学・大日本印刷・四谷図書館・電通 tempo ほかの方々に参加して下さるが、コロナ禍以降に参加したメンバーは、人によっては対面であったことがないというケースもある。2020年度、市民塾としての対外的活動は一度（第11回外濠市民塾）しかなく、それも運営スタッフと三輪田学園の生徒さんに限定したイベントだった。コロナ禍が容易に収まらないなかで、今年度はウェブサイトでの情報発信と3回のオンラインレクチャーの実施により対外的活動を復活させ、その一方で学生スタッフだけでも感染対策を講じながら外濠の空間を使うための準備を進めた。

2. 活動報告

(1)外濠市民塾ウェブサイトの構築と継続的情報掲載

外濠市民塾に関する情報発信は、エコ研ならびに法政大学江戸東京研究センターのウェブサイトに掲載してきた。これらは活動報告の蓄積として意義があるが、外濠市民塾の日常的な活動の情報発信や関連イベントの告知には向いていなかった。そこで2021年1月より外濠市民塾独自のウェブサイトを構築・公開した。外濠市民塾の活動告知や報告だけでなく、幹事会において学生が持ち回りで実施している外濠に関する話題提供の内容をまとめて掲載する形式をとった（図1）。電通 tempo から参加されている田崎氏のアドバイスを受け、2021年8月からGoogle Analytics でアクセス解析を行っている。月

間訪問ユーザー数は8月の150程度から1月には350程度に増加しているが、ほとんどは検索サイトからの流入で、継続的に訪問しているユーザーは全体の10%強にとどまっている。外濠に興味のある方が継続的に見ていただける情報発信を行うことが目標である。

(2)オンラインレクチャー

2021年度は3回のオンラインレクチャーを実施した。それぞれ終了後1ヶ月程度は録画した映像を公開した。

●第12回外濠市民塾オンラインレクチャー

「濠」で囲まれた日本の都市…外濠の原風景を探る」（2021年5月21日）

初のオンラインイベントは伊藤裕久教授（東京理科大学）にご講演いただいた。ヨーロッパや中国の都市を題材に城壁で囲まれた都市と濠で囲まれた都市を比較し、濠に囲まれた城下町由来のものが多く日本の都市のルーツを古代から紹介していただいた。



図1 外濠市民塾ウェブサイト
<https://sotobori.ws.hosei.ac.jp>

近世城下町では、武家地・町人地・寺社地など各々が独立した都市的存在を、都市全体を囲む外濠が統合したと考えられること、特に江戸城外濠は中と外を隔てるだけでなく、それらを繋ぐことも想定された、「分節」空間であったと考えられることなどをご紹介いただいた。参加者は主催者側を含めて最大89名であった。

●第13回外濠市民塾オンラインレクチャー

「外濠 150年—未完の都市計画公園としての外濠変遷—」(2021年7月21日)

小藤田正夫氏(元千代田区役所職員・NPO法人神田学会理事)にご講演いただいた。小藤田氏は千代田区に関する膨大な古写真、古地図、図面、絵はがき等を収集されている。今回はその中から外濠に関する資料をご紹介いただいた。幕末から昭和戦前期を中心に、明治初期の外濠の状況、外濠を利用して甲武鉄道(現JR中央線)が敷設されていく様子、東京市(当時)による外濠公園計画の貴重な図面などを解説いただいた。参加者は主催者側を含めて最大56名であった。

●第14回外濠市民塾オンラインレクチャー

「タイムトリップ江戸から東京へ—千代田と江戸城外堀の風景」(2021年10月27日)

後藤宏樹氏(元千代田区立日比谷図書文化館学芸員、早稲田大学人間総合研究センター研究員)にご講演いただいた。後藤氏は江戸城の歴史について大変造詣が深く、千代田区立日比谷図書文化館で開催されている「日比谷図書文化館開館10周年記念特別展



図2 現地イベント用のサイン

タイムトリップ 江戸から東京へ ~資料で綴る千代田の風景~」(会期2021年10月22日~12月19日)を監修されている。今回は、江戸城外堀跡とはどのような史跡かを図面や写真と共にわかりやすくご紹介いただいたのち、千代田区・新宿区・港区が作成した「史跡 江戸城外堀跡保存管理計画(平成20年3月)」に記載されている外濠および周辺地域の価値と将来像、さらに外濠に関する遺構について解説いただいた。講演の最後には江戸城の全体の価値を伝えることの重要性和、そのために取り組んでいる活動についてもご紹介いただいた。参加者は主催者側を含めて最大48名であった。

(3)外濠周辺空間利用の準備

昨年度、外濠公園の柵に設置する小型の家具「おぼんカウンター」を12台制作した。当初はこれを設置して利用者に飲み物などを提供し、あるいは近傍の飲食店等から食べ物を購入して持参することで、外濠を眺めながら時間を過ごす体験をしてもらい外濠周辺の使い方を発信しようとして企画していた。残念ながら感染症予防の観点からこのような活動が実施できない状況であるが、今後何らかの方法で実現した折りに「おぼんカウンター」の使い方や外濠市民塾の内容を周知するために柵に設置するサインを作成し(図2)、配布用のポストカードを印刷した。

3. 今後の課題

今年度の活動では、幹事会やイベントのオンライン化などで、比較的負担感が少ない運営となった。その一方で外濠という具体的な空間を対象としているにも関わらず、実空間での活動ができなかったことは残念としか言いようがない。ウィズコロナの社会では屋内よりも感染リスクが少ないオープンスペースをうまく使っていくことが求められており、その点で外濠周辺には大きな可能性があると考えられる。具体的な使い方の提案や実践を今後の課題としたい。

法政大学特任教授*1

法政大学デザイン工学部教授*2

法政大学エコ地域デザイン研究センター客員研究員*3

千代田学事業 -千代田区における外部空間のニューノーマル-

Chiyodagaku Regional Study

The New Normal of Outdoor Space in Chiyoda Ward

岩佐明彦

Akihiko IWASA

メンバー：岩佐明彦・福井恒明・今井龍一*1・金子俊之*2

キーワード：千代田区、公園、ニューノーマル、デザインワークショップ

1. 研究の背景・目的

新型コロナウイルス流行後、公共空間における滞在の様態には大きな変化が求められている。いままでは「多くの人が集うこと」が公共空間の価値判断基準の一つであったが、感染予防の観点から密な接触を回避することが必要で、ある程度の間断性を持ちながら緩やかに人が集うしくみや設えが求められている。特に昼間流入人口が大きい千代田区では、オフィスワーカーや観光来訪者の利用する外部公共空間を時間的・空間的にどう棲み分け分散的な利用を促すべきかを検討していく必要がある。

本研究では現有する千代田区の外部公共空間（公園や街路など）を再検証し、公共空間利用のニューノーマル（新しい様態）を示すことで、新しい生活様式に対応した都市計画・都市政策の策定に資する資料の提供を行うことをめざす。

2. 研究対象・研究方法概要



図1 調査対象

本研究では千代田区内の全公園（「児童遊園」と「広場」を含む）63ヶ所を対象とした（図1）。調査は法政大学大学院デザイン工学研究科の大学院デザインスタジオ（2021年9月～22年1月）と連携し、デザインワークショップ形式で行った（表1）。

表1 ワークショップ概要

- **ミッション1「千代田区の公園全踏破」**
千代田区の公園を手分けして全踏破する（データシートの作成）
- **ミッション2「公園や周辺を評価するためのパラメータ設定」**
リサーチシートの作成
- **ミッション3「パラメータに基づくリサーチ、評価」**
リサーチシートを用いて評価
- **ミッション4「千代田区公園ミシュランの作成」**
リサーチシートをビジュアル化

3. 千代田区の公園全踏破

デザインスタジオではまず全ての実地に訪問し、そこで滞在することで得られた情報を1公園ずつ1枚のシートにまとめることで千代田区内の全公園の実態把握を行うワークシ



図2 スタジオ風景

4. 公園と周辺を評価するためのパラメータ設定とパラメータに基づくリサーチ

ワークショップにおいて、観察で得られた内容を共有し、都市の公園として必要とされる価値についてディスカッションし、その価値を評価するパラメータを設定し測定した。調査では「千代田区公園ビックデータ」と称し、計測可能と考えられるありとあらゆるデータを収集することとした。データは公園の物理的な形状に関するデータに加えて、インターネットの SNS などから抽出できるデータ、現地に滞在することで得られるデータ、地図上にマッピングすることができる周辺のデータに分けることができる。現地でデータを収集する際にはスマートフォンのアプリとして提供されているパノラマ撮影、騒音、日影(太陽の軌跡)なども活用した(表2)。

表2 公園の評価パラメータ

<p>○公園の物理的の形状 面積・入口の数と形態・園内の通り抜け・地面の種類(舗装、土など) 付帯設備(トイレ、自販機、災害倉庫、ベンチ(形状)、遊具、樹木) 隣接要素(公園に接する道路数、サブで接続する道路数) 一番近い公園までの直線距離</p> <p>○SNS(ネット)での収集 インスタグラムにおける投稿内容(投稿件数、視対象、視点場、コメント) 代表的な公園での居場所(着座位置)の抽出</p> <p>○公園および周辺の観察 通過した人で一番多かった属性 公園の前道路を一分間に通過した人数</p> <p>○着座位置(視点場)の居心地評価 視点場からのパノラマ写真の撮影 視点場に座った時の開放性 通路との位置関係、隣のベンチとの距離 フリーwifiなどの電波状況 パソコンや飲み物など置けるスペースの有無 視点場の日陰時間 騒音、音</p> <p>○周辺要素のマッピング(半径 150m内) 道路形状(歩道の有無、道路幅員) 建雄用途(商業、教育、住宅、公共…)</p>

5. 「千代田公園ミシュラン」の作成

デザインスタジオでは、ポストコロナのニューノーマル社会における外部空間の新しい利用形態を見据え、それぞれのスタジオ参加者が新しい公園の利用形態を提案した。そのうえで、その利用形態において検討が必要と考えられる評価項目を先の「千代田区公園ビックデータ」より引用し、そのパラメータで公園を評価づけ(「千代田公園ミシュラン」)を行った。

スタジオ参加者からは「買い食い」(周辺飲食店からのテイクアウト)、「眺める場」、「隠れ場」、「生物多様性」、「オフィスワーク」、「クリエイティブメデイテーション」、「マンウォッチング」、「まちなかシネマ」といった利用形態が示され、それぞれの利用形態における利便性に基づいて千代田区内の公園のランク付けを行った(図3)。



図3 千代田公園ミシュラン(一部)

6. まとめに向けて

デザインスタジオではここまでのワークショップの成果を踏まえ、ニューノーマル時代の外部空間の利用について、具体的なデザイン提案にまとめたいと考えている。

本研究の詳細については千代田区ウェブサイトに掲載される千代田学事業報告書を参照いただきたい。

法政大学デザイン工学部教授*1
法政大学エコ地域デザイン研究センター客員研究員*2

2 関連研究(2020年度報告会より)

Related Research

Wi-Fi パケットセンサを用いた日比谷公園周辺の交通流動調査

齊藤悠太 (法政大学デザイン工学部 都市環境デザイン工学科 今井龍一研究室)

道路空間の利活用—コロナ前後の社会実験の比較—

田中麗子 (法政大学デザイン工学部 建築学科 岩佐明彦研究室)

玉川上水と近代化—水車動力がもたらしたもの—

武内洸樹 (法政大学デザイン工学部 建築学科 高村雅彦研究室)

近代化における江戸東京の水車—都市の発展と水路に生まれた生活空間—

中釜英里香 (法政大学デザイン工学部 建築学科 高村雅彦研究室)

江戸・明治期における越後平野西部テリトリーに関する研究

齋藤浩志郎 (法政大学デザイン工学部 都市環境デザイン工学科 福井恒明研究室)

狭山丘陵「北川」と市民活動の軌跡

清水淳 (法政大学エコ地域デザイン研究センター 客員研究員)

Wi-Fi パケットセンサを用いた日比谷公園周辺の交通流動調査

17N2028 齊藤悠太

1. はじめに

近年、交通流動の計測手段の一つとして Wi-Fi パケットセンサを用いた交通流動調査に関する研究が広まりつつある。一方、プローブリクエストを発信する携帯電話やスマートフォン等の通信機器の個人情報保護機能も高度化しつつある。一部の通信機器では、プローブリクエストに含まれる端末固有の ID である MAC アドレスがランダム化される機能が搭載され、交通流動の把握に影響を与えている¹⁾。今後はこのような状況を踏まえた上で、交通流動を把握する必要がある。しかし、現在、Wi-Fi パケットセンサによって取得されたデータから滞留および交通流動を集計・処理する手法は確立されていない。

そこで、本研究の目的は、Wi-Fi パケットセンサによって取得されたデータを用いた滞留人口および流動人口の算出手法の考案・体系化とした。

2. 研究方法

本研究では、まず、Wi-Fi パケットセンサの基本特性を調査する。次に、Wi-Fi パケットセンサを用いた交通流動調査の実験計画を立案し、実験を実施する。そして、Wi-Fi パケットセンサの取得データを用いて滞留人口および流動人口の算出手法を考案し、考案した手法を用いて滞留人口および流動人口を分析する。

3. Wi-Fi パケットセンサの特性調査

本研究では、Wi-Fi パケットセンサの基本特性を調査した。

3.1 Wi-Fi パケットセンサの概要

本研究で用いた Wi-Fi パケットセンサは Raspberry Pi や Micro SD カード等で構成されており、ソフトウェアは Kali Linux を用いた。本体の大きさは 9×6×3cm 程度である (図-1 参照)。Wi-Fi パケットセンサは、センサの取得範囲内における Wi-Fi が有効になっている電子機器から時刻および匿名化された固有の識別番号等を取得できる。センサの取得範囲は、センサの性能実験の結果から、センサから約 50m 圏内を取得できる可能性が高いことが確認された。

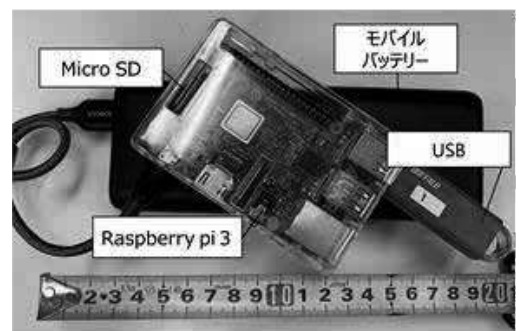


図-1 Wi-Fi パケットセンサ

3.2 MAC アドレスのランダム化に関する特性調査

本研究では、MAC アドレスのランダム化の仕組みを明らかにするために複数の計測実験を実施した。実験結果より、端末が Wi-Fi に接続している場合は端末固有の MAC アドレスが発信されていること、1つの端末にランダム化された MAC アドレスが複数存在する可能性および MAC アドレスがランダム化される機能の仕様は端末によって異なることが明らかになった。

4. Wi-Fi パケットセンサを用いた交通流動計測実験の立案

本研究では、東京都千代田区の内濠地区および日比谷公園にて、Wi-Fi パケットセンサを用いた交通流動調査を実施した。

4.1 計測実験の概要

本研究では、東京都千代田区の内濠地区および日比谷公園を対象とし、Wi-Fi パケットセンサを千代田区の内濠地区に 4 台、日比谷公園に 28 台設置した。センサの設置箇所を図-2 に示す。設置期間は、千代田区の内濠地区では令和 2 年 11 月 20 日から 12 月 25 日の 36 日間、日比谷公園では令和 2 年 11 月 26 日の 1 日間である。



図-2 センサの設置箇所

4.2 滞留人口の算出手法の考案

本研究では、各地点間の徒歩による移動時間²⁾を基に滞留を定義し、滞留人口の算出手法を考案した。まず、同地点での滞留時間が3分以上の場合は滞留とし、3分未満の場合は通過交通の可能性と判定する。滞留と判定された端末の中で、同地点で同一アドレスからのプローブリクエストが12分間隔で連続して観測されている場合は滞留とし、12分間隔で観測されていない場合は滞留ではないと判定する。

4.3 流動人口の算出手法の考案

本研究では、特定のセンサで最後に観測された次に、異なるセンサで観測されるまでの時間を移動時間とした。センサは、移動時間が長い30分以上の端末も一定数観測している。これらの端末は、あるセンサで観測されてから別の場所へ移動して次のセンサで観測されている可能性が高いと考えられる。そこで、今回は単純な移動と単純な移動ではない端末とで区別し、それぞれの端末を抽出するために各地点間の徒歩による移動時間²⁾を基に移動時間を定義した。

5. Wi-Fi パケットセンサを用いた交通流動計測実験の結果

5.1 センサの滞留時間

本研究では、考案した滞留人口の算出手法を用いて、センサにおける滞留時間を分析した。内濠地区の楠公レストハウスに設置したセンサの滞留時間の分析結果の一部を図-3に示す。その結果、0~5分の通過交通と考えられる端末の観測数が多いことが確認された。以上より、考案手法を用いることで、滞留端末と通過交通と考えられる端末とに区別して把握できる可能性が高いと考えられる。

5.2 センサ間の移動量

本研究では、考案した流動人口の算出手法を用いて、時間帯毎のセンサ間の移動量を分析した。日比谷公園の単純な移動と判別された端末におけるセンサ間の移動量の分析結果を図-4に示す。その結果、時間帯毎のセンサ間の移動量の分布を確認できた。以上より、考案手法を用いることで、単純な移動における流動の実態を把握できる可能性が高いと考えられる。

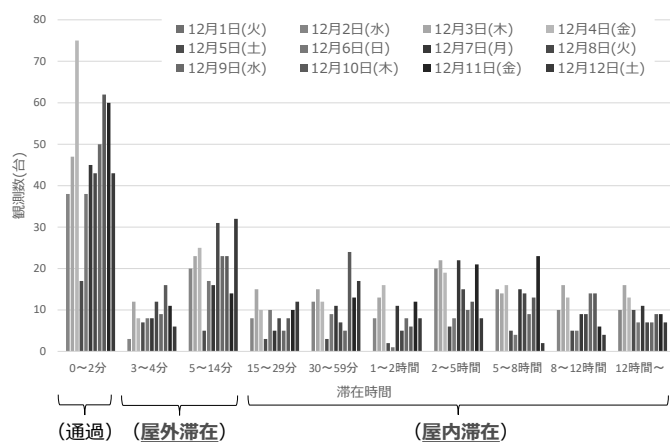


図-3 楠公レストハウスにおける滞留時間



図-4 日比谷公園の12時における単純な移動と判別された端末のセンサ間の移動量の可視化

6. おわりに

本研究では、交通流動の把握に影響を与えているランダム化MACアドレスに関する特性調査を実施した。また、交通流動計測実験にてWi-Fiパケットセンサによって取得されたデータを用いて滞留人口および流動人口の算出手法の考案した。考案した手法により、滞留および流動の実態を把握できる可能性を示せた。今後は、考案した手法の様々な調査対象地への適用可能性、精度の検証および精度を向上させる手法を考案する。

参考文献

- 1) 西田純二, 宇野伸宏, 倉内文孝, 中川義也, 望月祐洋: Wi-Fi パケット観測の精度と個人情報保護, 土木計画学研究・論文集, Vol.57, No.02-09, 2018.
- 2) 阿久津邦男: 歩行の科学, 不昧堂, pp.56-57, 1975.

道路空間の利活用

コロナ前後の社会実験の比較

田中 麗子

1. はじめに

道路空間の有効活用やニーズの高まりにより段階的な道路の民間経済活動への利活用が進んでいた。しかし、2020年6月2日に“コロナによる道路占用の許可基準緩和の緊急措置”が講じられることにより急激に道路でのオープンカフェが増加した。これらは、本当に“居心地の良い”空間なのか。以前の社会実験との相違点はどこか、そして今後の道路空間の利活用について考察することを研究目的とする。

2. 道路占有許可の現状

2.1 段階的な公共空間の開放

段階的な国の施策や条例の設置により、公共空間利用の規制が緩和され道路の民間活動への利活用への意識が徐々に高まりつつあった。2011年「都市再生特別措置法の改正」「道路占有許可の特例制度の創出」以降、全国的に道路空間利用を目的とした社会実験が多く見られ、段階的な道路空間の利活用が進んでいた。

2.2 コロナによる道路占有の許可基準緩和の緊急措置

本研究で取り扱う道路占有の許可基準緩和とは新型コロナウイルス感染症によって講じられることとなった緊急措置についてである。2020年に全世界に広まった新型コロナウイルスの集団感染を防ぐために多くの飲食店で一時休業を行うこととなったが、そのような飲食店事業者への支援として国土交通省から、6月2日に道路占有の許可基準緩和の緊急措置が講じられた。要件を満たせば道路占有料が免除され、飲食店でのオープンカフェ営業やテラス席設置が可能になるというものである。



写真1 「おおみやストリートテラス@一番街」の様子

3. 社会実験の実態の比較

3.1 調査目的

コロナによる道路占有の許可基準緩和の緊急措置が講じられたことにより、2ヶ月程度という短い期間のうちに全国各地でテラス席の設置などの社会実験が行われたということは類稀なる事態だということは明らかである。急激におこった社会実験というのは、以前の段階的な国の施策や条例による緩やかな道路空間の利活用・社会実験と何が異なるのか。社会実験の事業の実態を比較し、コロナによる緊急措置によって取り組まれた社会実験の特徴を探る。

3.2 調査対象

緊急措置より前に行われた社会実験15事例と、この緊急措置を活用しオープンカフェ設置を行った社会実験22事例を調査対象とし、データシートを作成する。



図1 コロナ以降の社会実験データシート No. 9

3.3 比較方法

3.3.1 事業の幅調査

比較方法の1つ目として、社会実験によって取り組まれた事業範囲と収益性・公共性の関係を比較する。そのために、縦軸に収益性、横軸に公共性の高さを示したグラフに、社会実験で用いられた具体例をプロットし、類する手法を5つに分ける。

- A 道路の民間活用
- B 歩行空間の創造
- C 人に優しい公共交通の促進
- D シンボルロードの整備
- E 道路の公園化

この5分類の中でどの手法が取り入れられているかを事例ごとに調査する。そして、収益性・公共性のグラフに当てはめ、分布図から収益性・公共性の偏りを見る。

3.3.2 テラス席の特徴調査

比較方法の2つ目として、利用者の視点からテラス席の特徴を比較する。「道路との位置関係」「利用者の範囲」「机の形」の3項目で分析し、利用しづらいと感じるか、誰でも気軽に利用できるのかといった視点から、分類する。

3.4 結果

3.4.1 事業の幅調査

以前の社会実験に比べ、コロナ以降の社会実験では、オープンカフェ以外で取り入れられた手法は少なく左上に偏っている。また収益性の視点が大きく、自治体独自の取り組みや地域の特異性が見受けられない結果となった。



図2 事業の幅調査結果

3.4.2 テラス席の特徴調査

コロナ以降の社会実験ではオープンテラス型が半分以上を占める結果となった。また、飲食店利用者のみの利用に限られている事例が多く、飲食店関係者の目の届く範囲で管理しやすいテラス席が増加した。

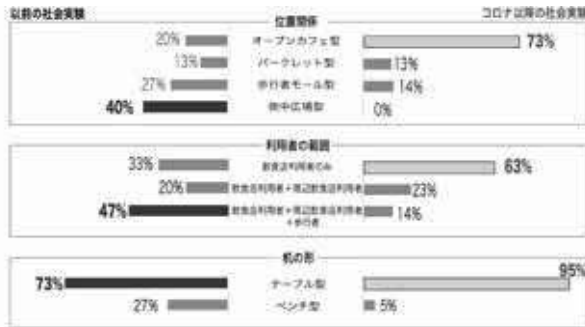


図3 テラス席の特徴調査結果

3.5 考察

3.5.1 社会実験目的の変化

以前の社会実験では、まちづくりを目的とし、公共空間を利用して「歩きやすい道」や「街の魅力向上」など課題の解決が取り組まれており、オープンカフェもその課題解決の一つの手段として用いられてきた。しかし、コロナ以降の社会実験では経済活動の支援を目的としているため、飲食店経営者目線での道路空間の利用になり、簡易的なテラス席の設置しか見られず、結果としての賑わいが作られているが、同時に歩きにくく危険な道も生まれている。

3.5.2 収益性と公共性という2つの視点

社会実験の目的の変化に伴い、実施における視点の変化が生じている。「コロナ以降の社会実験」のように飲食店経営者視点でのテラス席の設置ではなく、「以前の社会実験」のように「まちづくり・賑わいづくりのために」道路や交通など包括的に働きかけることで、道路空間の人々の居心地の良さや地域全体のまちづくりに繋がっているのではないかと。そして、今後道路空間の利用がより増える中、居心地の良い道路空間を作るには、収益性という視点のみでなく「まちづくり・賑わいのため」という公共性の視点が重要になる。

4. 社会実験後の方向性

4.1 調査目的

「以前の社会実験」の実験後の動向に着目し、「以前の社会実験」が長期事業化に至るまでの経緯を追うことで、「コロナ以降の社会実験」での今後の道路空間利活用の方角性を考えることができると考え、社会実験事例のケーススタディを行う。

4.2 以前の社会実験ケーススタディより

社会実験終了後において長期事業化の至ったものは、計画的段階を踏んで取り組まれていた。

- ①課題への共通認識の形成
- ②社会実験を行いながらの意見交換
- ③協議会や推進協議会の結成
- ④持続可能な事業に向けて

このような4つの手順を踏んでいたからこそ、社会実験で終わることなく長期的・恒常的な事業化が進んでいた。

4.3 コロナ以降の社会実験ケーススタディより

4.3.1 課題

コロナ以降の社会実験は緊急措置により、その長期事業化に向けた第一段目である課題への共通認識の形成を飛ばして始まったと考えられる。そのため、店舗ごとのちいさ

な違い・地区全体の意識の不一致などのデメリットが発生している。そしてこのまま地区間の連携や意識共有が行われていない状態であると、市町村と商店街の連携がとりづらいことや、将来像を見据えた取り組みを行うことができないという不具合が生じるのではないかと。かつ、社会実験の結果やアンケート収集などの今後の地区課題解決に繋がる取り組みを行うことが難しいと考える。

4.3.2 可能性

今まで社会実験が難しかった地区での道路空間利用が積極的に行われたというメリットもあると考えられる。中野区では、関係者全員の合意が取れないと社会実験実施に至るのも難しかったが、今回の緊急措置により一店舗の要望であってもテラス席の利用を実現することが出来たという事例もある。言い換えれば、誰もが道路の利用者であり、誰もが道路という公共空間を活用でき、店舗の小さな声が地区の賑わいの向上に発展することも可能であるということだ。

5 結論

5.1 道路空間利活用の方向性

コロナ禍で急激に進んだ道路空間の利活用だが、課題と可能性の両方が存在している。収益性・公共性の2つの視点を兼ね備え、行政との連携を測り計画的な社会実験から、道路空間の利活用を考えるべきか。それとも、市民の小さな声・行動から課題抽出などのサイクルを回しながら、道路空間の利活用を考えるべきか。というように、道路空間の今後の方向性は一つではない。このようにコロナ禍で急激に広がった道路空間の利活用は、今後の道路空間を考える分岐点になったに違いない。

5.2 まとめ

道路空間の利活用の方向性は一つではないからこそ、これから先も道路空間は変化していく。この道路空間の変化とともに、人々の道路空間への当事者意識が育つことを期待したい。そして、新しい生活様式への対応として公共空間に注目が集まる今、道路空間を利用し活用していくことができるのは、行政でも市町村でもなく、地域に住まう市民の小さな声だろう。そして、この緊急措置が一時的規制緩和に終わることなく、今後の道路利活用について考えるきっかけになるべきである。

参考文献

- 1) ヤン・ゲール著 北川理雄訳:建物のあいだのアクティビティ、鹿島出版会、2011
- 2) 出口敦、三浦詩乃、中野卓 編著;中村文彦[ほか]著:ストリートデザイン・マネジメント 公共空間を活用する制度・組織・プロセス、学芸出版社、2019
- 3) “地域づくりを支える道路空間再編の手引き(案)” 国土技術政策総合研究所、<http://www.nilim.go.jp/lab/bcg/siryou/tnn/tnn1009.htm> (参照 2020/09)
- 4) “まちなかにおける道路空間再編のデザインガイド” 国土技術政策総合研究所、<http://www.nilim.go.jp/lab/bcg/siryou/tnn/tnn1026.htm> (参照 2020/09)
- 5) 国土交通省 “道路占用” <https://www.mlit.go.jp/road/sisaku/senyo/senyo.html> (参照:2020/09)
- 6) 国土交通省 “道を活用した地域活動の円滑化のためのガイドライン 改訂版” <https://www.mlit.go.jp/road/sisaku/senyo/pdf/280331guide.pdf> (参照 2020/09)
- 7) ソトノバ “パブリックスペース特化型ウェブマガジン” <https://sotonoba.place/> (参照:2020/10)

玉川上水と近代化

水車動力がもたらしたもの

武内 洗樹

1. 序章

1.1 研究背景・目的

主に飲み水や農業用水として利用された玉川上水には多くの水車が掛けられていた。利用目的などに関する研究は数多く行われているが、水車動力についての調査はあまり行われていない。本研究では玉川上水を中心に動力水車について水や地理的要因も含めて考えることで、近代化において重要な役割を果たしていたことを明らかにする。

1.2 玉川上水について

玉川上水は承応 3(1654)年に羽村の堰から四谷大木戸までひかれた全長約 43 kmの人工水路だ。江戸の人口増加に対して起きた水不足を解決するために開削され、33 もの分水路がひかれた。分水には資金が必要であり、水不足の問題が起きるなど水を求める争いがあった。しかし水道整備や機械動力の導入によって使われなくなり、現在では多くの部分が暗渠となっている。



図1 玉川上水主要分水路図 (注1)

2. 水利用と水車

2.1 玉川上水・各分水の水利用

2.1.1 玉川上水

玉川上水は江戸市中だけでなく広い地域で飲用水として利用されていた。また新田開発や灌漑用水などにも利用され、人々の生活の中で必要不可欠なものだった。水車利用という点で考えると製粉業を行っている場所が非常に多く、水車を中心に生活をしてきた。

2.1.2 野火止用水

野火止用水は最も多くの水量を持っていた分水で、承応 7年(1655)年に開削された用水である。全長約 25 kmにも及び、主に飲料水として利用されていた。水車産業としては製粉業から工業的な利用になっていくケースが多く、朝霞市周辺では伸銅業が地場産業として発展していった。

2.1.3 千川上水

千川上水は元禄 9(1696)年に開削された上水路で、浅草寺などに水をひくために開削された。給水をメインにしていたため、ほかの分水や用水に比べて水車の数はあまり多くなかった。本流の水車は基本的に製粉を行っていたのだが、王子への分水では水車動力を工業的に利用されていた。

2.1.4 三田用水

三田用水は細川用水と三田上水を一筋にして享保 10(1725)年に完成したものだ。白金台地の上を通り、目黒川と渋谷川との高低差を利用して多くの分水がひかれて動力水車が利用されていた。

2.2 水車の種類と用途

2.2.1 水車の種類

水車は用途で大きく分けると 2 種類ある。1 つ目は水をくみ上げる揚水水車で 2 つ目は動力水車だ。また、水車への水の掛け方によっても大きく 3 つに分類できる。1 つ目が下掛け式の水車、2 つ目は胸掛け式の水車で、3 つ目が上掛け式の水車だ。

2.2.2 水車の用途

水車が利用され始めたころには水車動力は精米や製粉業などでの利用が主だった。動力として本格的に利用されるようになると火薬製造や印刷業など非常に様々な用途で水車の動力は使われた。火薬が必要となれば水車で火薬製造を行い、江戸時代には市中で大量に消費された粉を作るために水車製粉が広まるなど、用途も時代によってさまざまだった。

3. 地域ごとの水車利用

3.1 玉川上水上流域

3.1.1 田村酒造場

多摩地域には酒造業を行っている蔵元が数多く存在していて、精米をするための動力として水車を用いていた酒造所もあった。その一つが文政 5 年(1822 年)に酒造業を興した田村酒造所だ。個人出資などをして屋敷内を通した分水を利用して水車を回していた。水車は長く使われ、現在では国の登録文化財に指定されている。

3.1.2 森田製糸場

明治 24 年の東京府の工場数の約 10%の 326 工場が三多摩地域にあった。その中で水車動力を利用していたのは 28 工場あり、その一つが森田製糸場だ。森田製糸場は明治 6 年に創業された東京府で最初の製糸工場で、製糸業の発展とともにその規模を拡大していった。当時 400 人規模で最大規模の工場だった。また、この地域には他にいくつもの製糸工場が存在していて、水車動力で始まった製糸業がこの地域の地場産業として根付いていた。

3.2 玉川上水中流域

3.2.1 製粉業

武蔵野地域では台地上に位置しているため水が乏しく高低差も少ない。そのため動力を得る工夫をしながら水車を回していたが、その用途はほとんどが製粉水車だった。砂川にあったタマグルマでは回し堀という方法で堀を長くとることによって高い位置まで水を上げていた。同じように回し堀を用いていた小川のシングルマのあった場所では高い位置に作られた堀の跡が現在でも残っている。

3.2.2 火薬製造所

多くが製粉水車だった中で江戸時代に火薬製造を行っていた水車がある。爆発事故が起こり期間はわずかだったが、製粉用だったものを幕府が買い上げ火薬製造用に改築して利用した。この場所が選ばれた要因として石神井川の水が使えたことと高低差のある地形だったことがあげられる。実際に水車があったと思われる場所では約 5mの高低差が確認できた。工業的に利用するためにはより強い動力が得られるように地形が重要だったと考えられる。

3.3 野火止用水流域

3.3.1 製粉業

武蔵野地域同様に台地の上だったため水車利用は製粉が多かった。この地域では穴車という方法で動力を得る工夫

をしながら水車を利用していた。穴車とは水輪の位置を掘り下げることによって高い位置に水をかける方法を指し、精米店などで長く利用された。

3.3.2 伸銅業

朝霞市膝折町から始まった水車伸銅は黒目川流域で広がり、朝霞市の地場産業として発展した。この地域で発展した要因として低地を流れる黒目川の水量が豊富で安定していたことが最も大きい。それに加えて膝折宿の存在や新河岸川の舟運も要因だった。自然環境や周辺地域との関係性の中で発展し軍需工場としての役割も果たした。

3.4 千川上水流域

3.4.1 鹿島紡績所

滝野川村(現・北区王子)にあった大砲製造用の反射炉跡地に1872年に建てられた紡績工場で、始祖三紡績と呼ばれるものの1つだ。ここでは直径2丈5寸(約6m20cm)の大きなイギリス製の水車を用いていた。水路に直接水車が掛けられていたのだが、その場所の地形を見ると約5mの高低差が確認できた。このことから大きな動力を得るためには地形が重要だったということがわかる。

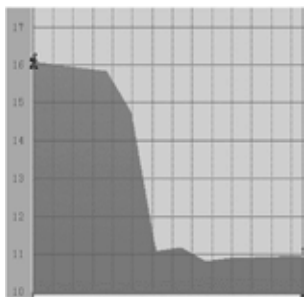


図2 鹿島紡績所断面図(注2)

3.4.2 印局抄紙部

明治8(1875)年に大蔵省印刷局に作られた抄紙部ではすかしを入れた紙幣を製造するために水車動力を用いていた。工場では蒸気機関をメインとしながら水車動力や人力を用いていたことから、必要な強さに合わせて動力を使い分けていたと考えられる。

3.5 三田用水流域

3.5.1 目黒火薬製造所

目黒火薬製造所は1857(安政4)年に幕府が水車を建設した場所にできた。敷地中央に三田用水が通っていて、そこからの分水で水車を回していたと考えられる。また、敷地は目黒川にかけての斜面地となっていて、約12mもの高低差が確認できる。このように火薬製造を行っていた場所は高低差のある場所が多いことがわかった。

3.5.2 エビスビール

現在のサッポロビールの前身である大日本麦酒の恵比寿のビール工場は水車動力を利用していたわけではないが、三田用水と深い関係があるため取り上げる。貯水池が二つあり多くの水を取水していて、濾水室もあったことからビールの原料としても利用されていたと考えられる。そのように利用していた恵比寿工場では三田用水が止まるまで用水の水を利用していた。

3.6 図絵で描かれた水車

3.6.1 角谷製綿工場

川から引いた桶が図の左下に描かれている。このようにして上からかけることで動力を得ていたことがわかる。

3.6.2 隠田の水車

富嶽三十六景で描かれている隠田の水車では穀物を運ぶ男性や洗いをする女性など当時の人々の水車を中心とした生活が描かれている。



図3 隠田の水車 (富嶽三十六景より)

3.6.3 広尾水車

江戸名所図会で描かれていて、取水するために堰を設けていることがわかる。取水堰から水車小屋へ水がひかれ、敷地内には大きな屋敷がある。

3.6.4 淀橋水車

広尾水車と同じく江戸名所図会で描かれている淀橋水車は町の中に水車がある。ほかの絵図とは少し違って街に溶け込んだ形で生活の一部となっている。

4. 考察

4.1 水車利用と地域形成

地域ごとに水車の利用が異なっていたように水車が地域に与えた影響も地域によって様々だ。例えば水車動力が伸銅業で利用されていた朝霞市などでは、その地域での代表的な産業であった。また、武蔵野地域では製粉業を生業として新田開発から現在に至るまでの基盤を築き上げた。このように地域形成の基盤を動力水車は築いたといえる。

4.2 水車によって生まれた商工業

機械化とともに水車動力は淘汰されたが、それは機械化するには莫大な資金と設備が必要だったからだ。水車も資金は必要だったものの、水のある場所では比較的始めやすい産業だったといえる。特に江戸時代に水車でを行った火薬製造や朝霞の伸銅業などは水車動力がなければ行うことは難しかったのではないだろうか。そのため水車があったからこそ生まれた産業といえるのではないだろうか。

4.3 水車と地理的要因

水車で強い動力を得るには上掛けが最も効率がいい。地形に注目すると鹿島紡績所や目黒火薬製造所など多くの場所で高低差が見られた。また、軍需工場はそのほとんどが高低差のある地形であることがわかった。台地上では製粉業が多かったことも考えると、水車動力と地形には大きな関係があったといえる。

5. 結論

水車動力は商工業や地域形成など様々なことに関わっていた。都市が形成されていく中で水は非常に重要なものであった。ただ、それと同時に水車動力というものも近代化においては大きな役割を果たしていたということを本研究では改めて示すことができたのではないだろうか。

注

注1) 高村雅彦編 (2020年度) 法政大学大学院 建築史概論 授業成果より 一部改変

注2) カシミール3Dより作成

参考文献

- 1) 小坂克信: 近代化を支えた多摩川の水, とうきゅう環境財団, 2012
- 2) 伊藤好一: 武蔵野と水車屋-江戸近郊製粉事情-, クオリ, 1984
- 3) 鈴木芳行: 近代東京の水車-明治大正期における多摩川流域の水車分布-, とうきゅう環境浄化財団研究助成, 141号, 542P, 1992

近代化における江戸東京の水車

- 都市の発展と水路に生まれた生活空間 -

中釜 英里香

1. はじめに

今の東京には復元された水車がほとんどで都市やくらしにどのような影響を及ぼしたのか知られていない。

そこで本研究は江戸東京の水車を対象に、近代化に用いられた水車の形態・形式とその空間を分析し、歴史的観点から現在の都市との比較を行うことにより、水車動力が生み出した都市と空間の近代化を明白にすることを目的とする。

2. 近代化における水車

2.1 地形と近代化

水車動力は、ペリー来航により大砲製造や火薬製造が急がれた時期と文明開化の時期に大量生産が必要となり発達した。これらの動力の確保が急がれた際、利用された水車には水車と地形において特徴がみられた。

2.1.1 起伏の激しい地形にみられる特徴

関口村では、江戸中期から神田上水と神田川の高低差を利用した上掛け水車が利用され、幕末には大砲製造の動力に転用された。

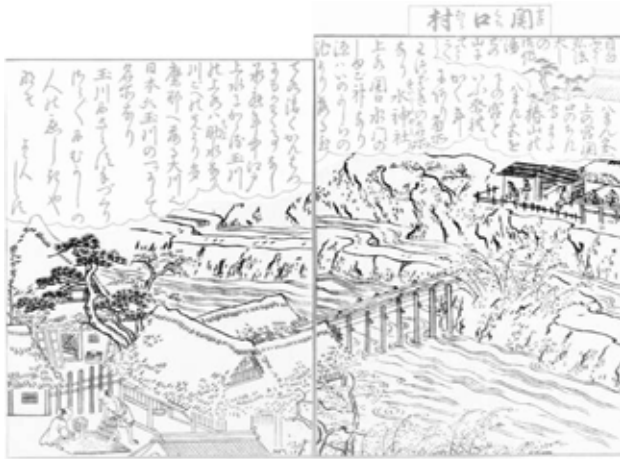


図1 関口村の水車 (注1)

また渋谷では複雑な地形に水車が集中し、その中でも高低差が大きい場所では、明治に製造工場が上掛け水車動力を利用していた。明治中期になると製造工場の動力には水車の他に、蒸気機関が併用して用いられ、やがて動力の移行により水車は姿を消すこととなった。

以上から近代化において水車動力が活発に利用され、高低差のある地形がより多くの水車動力を得るには必要であったことから、近代化を進める上で地形は重要な要素であったことが明らかになった。

2.1.2 広大な敷地にみられる特徴

敷地が広大であると水路沿いに水車を増やすことで、得られる動力を増加させていた。

内藤新宿では在来水車のくるま堀にさらにくるま堀を掘削することで新たな水車を設置しており、千駄ヶ谷では水車を増やす過程で、水車小屋を仕切ることによって新たな水車を設置する分車していたことが配置図からわかった。

2.1.3 水車の近代化

水車自体も時代とともに変化しており、明治になると工場や研究所で鉄製水車の利用が各所でみられ、その内2ヶ所で鉄製縦軸水車が利用されていた。

2.2 都市形成

石神井川では江戸時代から水車が各所で見られた。その内加賀藩下屋敷で利用されていた水車が、ペリー来航をきっかけに大砲製造の動力として利用され、これをきっかけに江戸末期には滝野川計画が進められ、水量が足りなかったため各所で分水が行われた。この計画は大政奉還とともに頓挫した。

明治に入ると分水では民間初の紡績工場である鹿島紡績を筆頭に産業の動力として水車が利用されていた。さらに工場が設立されたことで、明治初期に畑であった場所に労働者が住み始め、鉄道や軌道などのインフラが拡充し、都市が形成されていった。しかし、動力が水車から蒸気機関へと近代化すると水車は姿を消し、環境問題も相まって水路も姿を消した。

現在では水車を利用していた工場の痕跡がみられるものの水路はほとんどが姿を消した。



図2 王子・滝野川・板橋の水車と工場 (注2)

3. 水路に生まれた生活空間

3.1 拝島村

拝島村では製糸業が盛んに営まれ、その動力には水車が利用されていた。

3.1.1 九ヶ村用水

九ヶ村用水ではまわし堀に水車が掛けられていた。中村家では、用水とまわし堀を隔てる石垣から九ヶ村用水で洗濯をしており、用水が動力としても生活用水としても利用されていたことがわかった。

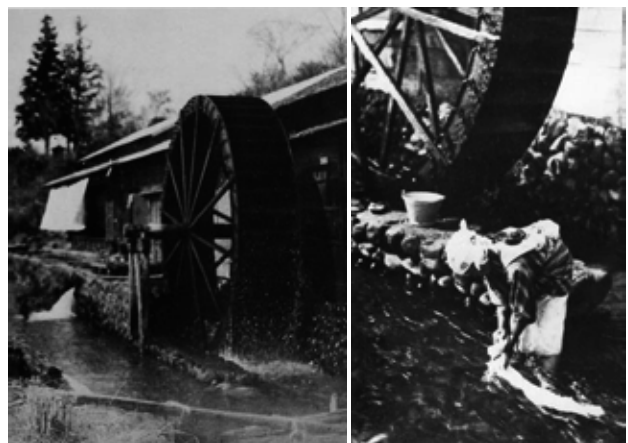


写真1 中島家の水車 (注3)

写真2 水車と洗濯 (注3)

3.1.2 拝島分水

一方で、玉川上水から分水された拝島分水は五日市街道沿いを流れ、直接分水に水車が掛けられた。水車は電気を発電し、地下に埋められたシャフトを通して捺糸工場の動力となっていた。また水車の側には街灯もあり、人々の生活または街の近代化に影響を与えていたと言える。



写真3 拝島分水の水車 (注3)

3.2 福生村

3.2.1 田村分水

田村分水は田村酒造が精米用の水車を設置する目的で分水された。田村酒造には現在でも水車小屋が残っており、田村分水も開渠となっていた。



写真4 田村酒造の水車小屋 (著者撮影)

また田村酒造の水車小屋から上車が掛かっていた地点までが開渠となっており、5カ所で洗い場の痕跡がみられた。洗い場はすべて個人の敷地内にあり、民家の間を縫うように分水が設置されたと言える。



写真5 洗い場 (注4)

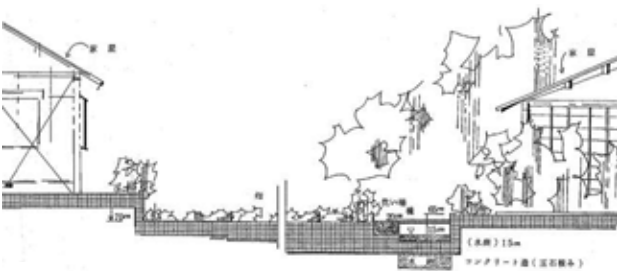


図3 田村分水の洗い場断面図 (注5)

3.2.2 熊川分水

熊川分水はすでに創業していた森田製糸場、熊川神社、石川酒造、に水車が設置されており、その内東京府初の製糸場である森田製糸場は約10年もの間動力として利用された。現在森田製糸場は廃業しているが、その周辺には分水を利用した生活痕跡が残っていた。



写真6 熊川分水周辺の生活空間 (著者撮影)

また、熊川分水にも洗い場が残っており、個人の敷地に設置されているものもみられたが、道路沿いにも洗い場が特徴としてみられた。



図4 熊川分水の洗い場断面図 (注5)

4. 結論

水車によって近代化が進み、都市が発展した。水車動力は地形と密接な関係にあり、起伏の激しい場所に水車が集中していた。一方で起伏が小さい場所でも、動力をさらに得るために水車を増やす方法と水車を鉄製縦軸水車へと形態を変える方法があったことがわかった。

また水車の数に歯止めが利かなくなった場所では工場が集中した結果、インフラの拡充に加え環境問題もあり、工場撤退とともに多くの水路が姿を消した。現在は水車を利用していた工場が一部残っている。一方で水車設置をきっかけに分水された田村分水と熊川分水には水路沿いに生活空間が生まれ、現在でも痕跡が残っているという違いがあることが明らかになった。

注

注1) 鈴木春信画: 絵本続江戸土産. 下, 米山堂, 1922, 国立国会図書館デジタルコレクション所蔵

注2) 北豊島郡王子町全図・北豊島郡瀧野川村全図・北豊島郡板橋町全図, 人文社, 1911/鈴木芳行著: 近代東京の水車-『水車台帳』集成-, 岩田書院, 1994より著者作成

注3) 昭島市民秘蔵写真集発行委員会編: 昭島市民秘蔵写真集, 昭島市民会館文化事業協会, 1993

注4) 小坂克信著: 玉川上水の分水の沿革と概要, 9. 幕末の分水口をめぐる動向, 公益財団法人とうきゅう環境財団, 2014

注5) 渡部一二著: 玉川上水系に関わる用水路網の環境調査-16 水路の利用形態と断面特性の研究-, 003 熊川分水, 1980

参考文献

1) 東京都渋谷区教育委員会: 渋谷の水車業史, 白眉堂, 1986

2) 北区飛鳥山博物館編: 近代工業化のルーツ・滝野川反射炉展, 東京都北区教育委員会, 2016

3) 芳賀善次郎: 新宿の散歩道, 三交社, 1972

江戸・明治期における越後平野西部テリトリーオに関する研究

17N2027 齋藤 浩志郎

1. 背景・研究目的

新潟県越後平野には“潟”と呼ばれる湖沼があり、農業の用排水や漁業、狩猟の場として利用され、生業や生活になくってはならないものであると同時に、周辺の生態系の維持にも重要な役割を果たしていた。昭和期の干拓事業の進行によって潟は減少し、潟と社会との関係が希薄化した。ところが、2020年（令和2年）に新潟市が「ラムサール条約の湿地自治体認証」の候補となったことで、越後平野全体で潟の保全・利用を進める機運が高まり、潟と共存する持続可能な社会の形成が求められている。これを実現するには、人びとと潟の結びつきが強かった時代における社会経済の関係について改めて確認する必要がある。そこで本研究は、都市と周辺領域を包括的に捉える“テリトリーオ”の概念を参照し、地形・地質や水系などの自然条件と経済・文化の蓄積から越後平野テリトリーオの構造や特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 対象範囲・調査年代

越後平野西部の西蒲原を対象範囲とする。西蒲原にはラムサール条約湿地に登録されている佐潟があるほか、かつては鰐潟をはじめとする大小の潟が多く存在していた。大規模な干拓が進行する昭和期以前の状態を確認でき、史料・文献から調査が可能な江戸～明治時代を調査年代とした。

3. 研究方法・調査結果

ベース図として、標高 DEM データや表層地質に関する GIS データを用いて「地形・地質図」を作成する。次に、古絵図の水系表現と明治期の地形図の潟・河道跡の照らし合わせにより復元図を作成し、江戸時代の水域の位置を推定する。さらに史料・文献から収集した、用排水に関する集落内外の取決めや囲い土手などに関する情報を復元図上にプロットし、水系図としてまとめた（図-1）。

また、国絵図や石高帳に記載されている集落名をもとに明治期の地形図を用いて集落位置を推定し、成立年代で分類した（図-2）。

街道や舟運の航路の位置については国絵図・史料の情報から推定した（図-3）。史料でどの藩が集落を支配しているか確認できた場合はその情報を付記した。

集落が特定の潟を利用していたことが史料・文献からわかるものについて地図上に生業圏として表現した（図-4）。

作成した各図をレイヤーとして重ね合わせ、江戸時代初期～中期（1600～1750年ころ）と江戸時代後期～明治時代（1750～1900年ころ）の2年代で地形・地質、水系と集落の関係、生業圏から地域の構造やその変化を広域的に確認し、テリトリーオとしての特徴を考察する。

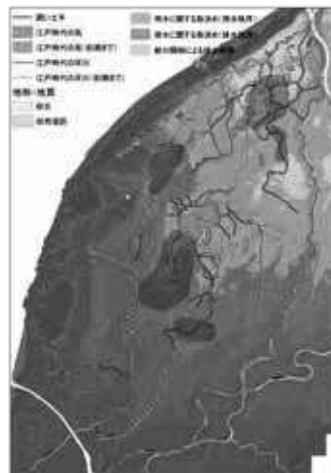


図-1 越後平野西部の水系図 (江戸期)

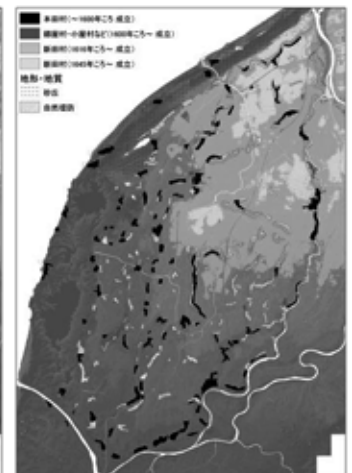


図-2 越後平野西部の集落位置推定図 (江戸期)

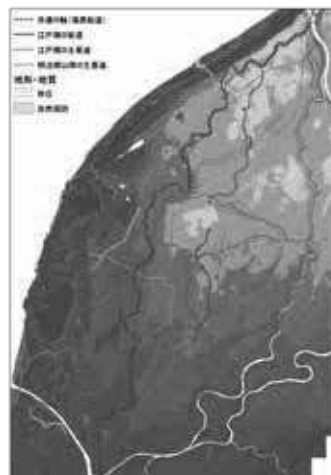


図-3 越後平野西部の舟運・街道網 (江戸期と明治期)



図-4 越後平野西部の潟の生業圏 (江戸期)

狭山丘陵「北川」と市民活動の軌跡 —里川保全と里山保全の共時的発展から連環へ—

The relation between Kitagawa River of Sayamakyuryo Hill and traces of citizen's movements

清水 淳*

Atsushi SHIMIZU

キーワード：社会化された自然、里川保全、河川の自然再生、共時的発展

1. はじめに

狭山丘陵では、廣井敏男（植物生態学者）の「社会化された自然を保全していくことが重要」という環境思想が生成され、市民運動が実践され、啓発と制度化がなされ、里山の保全につながっていた（エコ研 2019 年度報告会で報告）。

狭山丘陵の東麓に位置する「北川」の里川保全運動（注）では、廣井らの里山保全運動と人的なつながりがほとんどなかったが、果たして社会化された自然の価値の捉え方が、里山保全運動と比較してどうだったのか、共時的な発展はあったのかどうか考察していくこととした。

（注）地域の人が生活の場として愛着を持ち守っている身近な川や水路、湧水、池、湿地等を「里川」と定義

2. 考察結果

北川流域の里川保全運動は 1990 年代のはじめに発生した。里川保全運動は 2 期に分けられる。第 1 期は開発から逃れた公園（水田や湿地、水路、池が主体の市立北山公園）の社会化された自然を守るための運動だった。市は水田や湿地等をつぶして人工的な水路や溪流、芝生広場などからなる公園の再生計画を基に工事を強行しようとしたが、1990 年に市民の反対運動が起きた。市民側は、水田や湿地、池等はそのまま保全すべきと主張し、結果的には工事は一部、実施されたものの多くの水田や湿地等が残って里川の景観が保全された。

ほぼ同じ時期に北山公園に隣接する都立八国山緑地では、都が示した整備計画案（雑木林を大

幅に伐採して展望台や展望広場等を整備）に対して、1989 年に市民の反対運動が起きた。市民側は、雑木林は伐採せずにそのまま残す形にすることを主張し、結果的には雑木林が全面的に保全されて里山の景観が保全された。

両運動とも、失われそうになった社会化された自然を守るための運動だった。また、両運動の共時的発展を認めることができる。

第 2 期は、社会化された自然の再生を目指す運動だった。1995 年に市民団体（北川かっぱの会）が誕生し、北川の清流復活等を目標に、北川の自然護岸の復元や堰（落差工）の撤去を目指した。会では、市民環境科学による調査、ワークショップ等による検討を経て、1998 年に北川復元プラ



図 1 北川復元プラン 未来の川へ

ン（図 1）をまとめ、市に提言した。提言が契機となり、2000 年から市民団体や市民、市が参加する協議体で内容が検討され、2004 年に北川のコンクリート護岸が剥がされて親水広場が、2005 年に北川の堰が除去されて魚道が完成し、社会化された自然が再生した。

廣井の言う社会化された自然の価値としては、

人間が利用するから価値があること、個々の生物や生態系にも価値があることが挙げられるが、里川保全運動でも同様の価値の捉え方を行っていたことを認めることができる（図2）。

3. おわりに

今後は、里川保全と里山保全の連環をベースに、自然環境、社会環境、歴史を考慮した持続可能な地域づくりを目指していくことが重要と思われる。

研究上の課題としては、これらの連環の模索を基にテリトリー研究との接点を探っていくこと、狭山丘陵全体の里山保全運動や北川の里川保全運動も含めた大局的な見地からの狭山丘陵の歴史社会的な保全史をまとめていくことが挙げられる。

法政大学エコ地域デザイン研究センター客員研究員*

社会化された自然の価値(廣井)	北川の保全運動	狭山丘陵全体の保全運動
「人間と自然との調和的な自然観」に基づいた価値	川や水路、水田、湿地、池等の社会化された自然	雑木林等の社会化された自然
1. 人間が利用するから価値がある	稲作の水調達の場として、昔の人の生きた証の文化財として、現代人のレクリエーション的な利用などとして再生、保全していく価値	薪炭や堆肥の原料調達の間として、昔の人の生きた証の文化財として、現代人のレクリエーション的な利用などとして保全していく価値
2. 個々の生物や生態系にも価値がある →人間にも生態系の一員として節度ある振る舞いが必要	魚類や両生類、鳥類、植物など川や水田、湿地等に生きる生物が生息、生育できる場としていく価値	昆虫類や鳥類、植物など雑木林等の環境に生きる生物が生息、生育できる場としていく価値

図2 社会化された自然の価値の捉え方の比較

3 テリトリーオの展開 実践者とのクロストーク

(2020年度報告会より)

テリトリーオの展開「実践者とのクロストーク」 (2020年度報告会 第2部)

エコ地域デザイン研究センター2020年度報告会 開催概要

日時：2021年2月25日(木) 第1部 13:00～, 第2部 15:45～

会場：オンライン形式

主催：エコ地域デザイン研究センター

後援：総合資格学院

第2部発表者

豊田雅子（尾道空き家再生プロジェクト）「尾道の空き家・空き地を活かす」

藤田彩加（小堀哲夫建築設計事務所）「光風湯圃の宿」

野内隆裕（新潟日和山五合目館長）「みなとまち新潟・進化する日和山（12.3m）物語」

大滝ジュンコ（アーティスト、山熊田在住）「山の暮らしのアップデート」

コメンテーター

陣内秀信（法政大学特任教授）

福井恒明（法政大学デザイン工学部教授）

司会

岩佐明彦（法政大学デザイン工学部教授，エコ地域デザイン研究センター長）

各発表者のトーク，発表後のディスカッションの様子をできるだけ「話し言葉」のまま記録しています。
一部読みにくい部分があるかもしれませんがご容赦ください。

「尾道の空き家・空き地を活かす」

豊田雅子（NPO 法人尾道空き家再生プロジェクト代表理事）

尾道は、広島県の東、瀬戸内に面した小さな港町です。尾道市も平成の大合併で南北に広がって、北は山間部、南は離島もあり、気候風土も、同じ市内でもだいぶ違っていています。その中でも中心市街地で、みなさんが映画や CM で見てイメージする尾道の町並みのところで活動しています。駅から約 3 キロ圏内ぐらいの狭いエリアで、尾道三山と呼ばれる小高い山と、向島（むかいしま）という島と尾道水道、山と海に挟まれた猫の額ほどのエリアで活動をしているのがわたしたちの団体です。



もともとは平安時代の荘園の積出港としてスタートして、江戸時代は北前船の寄港地として繁栄して、去年で開港 850 周年、港町として非常に長い歴史を持つ町です。鉄道が入って、車中心の社会に変わることによって、沿岸部とか車の入るところの町の風景が変わって行って、古い港町としての風情はどんどんなくなっているような状況です。それでも商店街を歩いて路地をのぞくと懐かしいような風景がたくさん残っておりますし、線路をくぐって北側の斜面地に行くと山手地区ではべったりと家がへばりつくように戦前の古い建物が密集してたくさん残っています。

私は、坂とか路地の風景とか、そのコミュニティーや人の近い暮らしがすごく好きで、尾道の自慢でもあります。そういう場所は実は空き家問題の中心地です。駅から 2 キロ圏内、町の中心で観光の中心でもあり、観光マップを開いたらど真ん中にある便利などころではありますが、500 軒以上の空き家が点在するというひどい状態にあります。



空き家といっても不動産に出せる物件は少なく、廃屋、廃墟みたいなものの、管理されていない空き家がたくさん残っています。

状況を見かねてなんとかしたいと思いはじめて 6 年ほどは自分自身のための空き家探しをしていました。その間に色々なつながり、町内会長さんや地主さんなどの知り合いができたり、同世代の若い子が空き家を使って暮らし始めたり、お店を始めたりというメンバーが少しずつ出てきました。

そして一軒の空き家との出会いがありました。通称ガウディハウスと呼ばれている、駅のすぐ裏の坂の途中にある木造 2 階建ての建物です。その大家さんにお会いしたところ解体するとおっしゃって、「ちょっと待った」と、わたしが、どういう形でもいいので管理させてくださいとお願いして、個人的に買い取ったところから、今の活動が始まっています。

当時はブログが流行し始めていたので、「尾道の空き家、再生します。」というタイトルで、毎日この家の再生状況や尾道の空き家の状態を発信し続けました。この活動を始める前、前職は大阪で海外旅行の添乗員の仕事をしていたので、ヨーロッパに行って古い町の小さなコミュニティーの中のまちづくりをたくさん見てきたので、尾道でもできるのではないかと感じていました。そういった思いもブログに綴っていったら 1 年で 100 人ぐらいの方が「尾道に移住したいんですけど」「他にいい空き家ないですか」と相談が来るようになりました。

仲間も増えてきていたので、個人でやるよりも団体のほうがいいということで、2007 年に「尾道空き家再生プロジェクト」という団体を立ち上げました。私自身は建築やまちづくりの専門家でもなく、当時主婦で子育て

での真っ最中でした。尾道の空き家に興味がある方、尾道が好きの方が関わりやすいように、色々な視点から空き家を見ることで、アイデア、活用法、直し方も色々あると考えて、敷居をなるべく下げて、尾道のために関わりたい人が参加しやすい団体になるようにして発足しました。翌 2008 年に NPO 法人化して、現在は認定 NPO になり、約 200 人の会員さんと一緒に活動をしている状況です。空き家の再生に関わることはなんでも、がむしゃらに続けて現在で約 13 年が経ちました。

最初はお金もなく、場所さえあればできることとして、空き家に関係する方、移住者の方などを呼んで、作戦会議をするように月 1 回「空き家談義」を始めました。当初はガウディハウスしか拠点がなかったので、チャリティイベントや季節折々のイベントをして集まって、「ピフォア」の状態を見てもらったり、古民家の良さ、また空き家に興味ある方たち同士の交流の場を続けました。

尾道の空き家の特徴として、家財道具が全てそのまま、時間が止まったように残ったまま空き家になって 5 年や 10 年が経っている家がたくさんあります。尾道の地形のために車が横づけできない家がほとんどなので、家財道具や遺品整理をしないままになっている家が非常に多いです。ごみの分別も厳しくなって物を捨てにくくなっていますし、お年寄りの方が最後にお一人で亡くられたり、施設に入られたりという事情もあります。

昔の方は非常に物持ちが良く、法事なども自宅で全部されていたので物がたくさん残っています。捨てるのがもったいない物もたくさんあるので、その家の中で「チャリティ蚤の市」を開いて、欲しい方にはその家まで取りに来てもらい、好きな物を好きなだけ持って帰ってもらって、適当に投げ銭をしてもらうというような仕組みです。持って下りる労力だけでもすごく大変で、まだ使える物を他の場所で生き返らせて使ってほしい、という思いから続けています。

また、毎年 1 回、今年も 3 月に「まちづくり発表会」を行います。学生さんの発表を聞かせてもらって町にフィードバックしたり、移住者の方の提案や感じたことを発表する場を持っています。

ほかには、「尾道建築塾」を開いていて、建築とか町づくりのプロの方もメンバーにいらっしゃいますので、そういう方に講師になっていただいて、町歩きの「たてもの探訪編」を毎年 3 コースで開催しています。2 時間ほど、車の入らない坂の町を練



り歩いて、いろんな時代のいろんな様式のもものがたくさん残っているので、なめるように尾道の建築を見て歩いています。参加者の感想で多いのは、普段見慣れた風景でただのボロい空き家だと思っていたら 1 級建築士さんなどが「この瓦の産地はどこでサイズはこう」「壁の仕上げはこういう材料で、左官さんがこういう風にして仕上げる」といった専門知識を教えてくれて、それだけで今までボロ家に見えていた建物がすごい宝物のように見えてきました、というようなことです。町の再発見につながるようにまち歩きをしています。

また、空き家の再生の過程の中で一緒にできる部分、建築士さんとかに教えてもらいながら、壁を塗ったり床を張ったりを大工さん、左官さんとかに教えてもらいながらワークショップを何回も行ってきました。

それから、空き家だけでなく空き地も尾道にはたくさんあります。というのも、今の建築基準法では、一回壊してしまうと、もう建て替えができないような狭い路地沿いにたくさん建物があるので、今の建物を壊してしまうと、もう二度と建てられないところがほとんどです。そういう二度と建てられなくなってしまったただの空き地みたいなところが、たくさん尾道にはありまして。無駄に日当たりもいいので草がぼうぼうになりますし、いまだに野良犬とかいて、野良犬のたまり場や不法投棄される場所になったり、近所の人迷惑しているような空き地もたくさんあり、そういった空き地の活用も考えています。

このエリアは、移住者の方、特に若い方が増えて、しかも赤ちゃんがどんどん毎年生まれて、ベビーブームになっているエリアなんですけれども。町中になかなか公園らしい公園がないので、お母さんたちが、ちょっと子どもの手を引いて山手に公園みたいところがあつたらいいのにな、という話で、空き地はいっぱいあるからみんなで作ろうやということになりました。尾道市さんのほうの補助金が取れたのもあって、一緒にみんなで空き地再生をして、手作りの公園づくりを10年前ぐらいからすすめています。



今も、毎月1回「空き地再生ピクニック」ということで、空き地を徐々にバージョンアップしていきながら、みんなでメンテナンスをして維持管理していくという形で進めています。若い方たちは忙しかったり、「草刈りするから来て」と言っても、なんか嫌だなと思われてしまう感じがするんですけれども、「空き地でピクニックしよう」というイベント仕立てにすることで集まってもらいやすく、親子の交流になっています。夏はプールを出したり、近所にいろんな果樹園などがあるのでゆず狩りとかレモン狩りをさせてもらってレモネードを作ったり、ゆずこしょうを作るワークショップも季節折々で取り組んでいます。

このエリアは、本当にすごく先進的な事例で、今、お年寄りの方よりも若い方の人数のほうが増えて、もう若い方に町内会長を頼みたいという話があつて。町内会長は誰も嫌なので、若い人は。若い中でくじ引きでやることになって、でも、本当に20代の若い子とかがくじでなっちゃうんですけれども、それを支えるための執行部というのを、15人ぐらいで若い人で作って、毎月、ちゃんと町内会の寄り合いをして、いろいろ改革したりしながら、もっと住みやすい町、そして安全安心というので考えながらやっています。何か月か前に消防士さんと呼んで消火栓の使い方をみんなで教えてもらったり、炊き出しの練習を試してみたり、普段からそういった形でコミュニティーを取りながら、何かあつたときにも備えられるようなエリアになりつつあるような感じなんです。それから、地元の企業さんとかの協力を得て、こういった「土囊（どのお）の会」という社会貢献したいなのもしてもらったりというのもあつたりします。

尾道には大学が1校しかなく、若い人が少なく、人手がいつも足りないんで、夏休みとか春休みになると全国の大学生に募集して来ていただいて、泊まりがけで空き家の再生を手伝ってもらってきました。毎日職人さんに教えてもらいながら現場を進め、町歩きをしたりワークショップをしたり、非常に濃い内容の合宿を行っています。

一度に20人ぐらい参加があり、遠く、都会のほうからも若い学生さんが来て手伝ってくださって非常に助かります。建築やまちづくりの学生さんが多いですが、現場で自分の手を動かして汗をかく機会が、都会にいたるとなかなかないと思います。いい機会になったり、職人さんといろいろ話ができ役に立ったり、就職とかで役に立って、自分の故郷に戻って町づくりとかをしていられちゃうという方もいらっしゃいます。参加者の中で移住してきてくれた子も3人ぐらいいたり、これをきっかけに尾道にしょっちゅう来てくれる子もいます。大学の先生になって、今度は学生さんたちをたくさん連れて独自で合宿に来てくれたりとか、後々の付き合いが続いているのも非常に大きな収穫の一つです。ワークショップやミニコンペなど、ほかにも思い付くことはなんでもやってきました。

実際の空き家の再生ですが、これが最初に私が買い取った尾道ガウディハウスと呼ばれているおうちです。昭和8年、1933年生まれの木造2階建ての建物で、25年空き家になっていました。お金持ちの方の別荘として建てられた建物ですけれども、こんな状態でほこりをかぶって、いろいろ壊れて、物がたくさんありました。

まずはゴミ出しで、尾道大学の学生さん、先生も一緒に手伝ってくれてゴミを出して、私の旦那が大工なので、まず応急処置をして、みんなで掃除をして。ここで



もいっぱい物があったので蚤の市をして、古本とか古着とか茶碗を持って帰ってもらって。その後、AIR Onomichi さんって、アーティスト・イン・レジデンスをされている別団体があるんですけども、そこに場所を提供して、これは山本基さんという、塩で作品を作る作家さんの作品の、もう家中を全部使って仕上げました。これがこけら落としになりました。

それから、また第一期工事をして、まだ直っていない部屋もあるけれども、使える部屋でイベントとか会議、談義とかやったりして、2009 年は 0 円ハウスの坂口恭平くんが襖絵（ふすまえ）の作品をインストールしてくれて発表しました。それから、その後も職人さんを中心に、時間があるときにちょこちょこ進めていまして、去年の今頃、やっと 10 年がかりでほぼ完成というところまでこぎつけて。移住してこられたいろいろな作家さんに備品なんかもデザインしてもらったりしてという形です。一応、よし完成、これから、というときだったんですけども、コロナがまん延しまして、ちょっとストップという感じで。一棟貸しの宿泊とか貸しスペースとして、みんな共有財産として活用していく予定にはしていたんですけども、ちょっと止まってしまっていて、この春ぐらいからまた再始動できるかなというふうに考えています。



2 軒目がこの北村洋品店です。戦後の昭和 30 年代のもので、全然いい建物ではありません。歴史的にも建築的にもいいものではないんですけども、洋品店としての記憶を大事にしたいということで再生しました。ここもたくさんの荷物で、ぼろぼろでした。まずは、どこもゴミ出し。最初に必ず専門家の方に見てもらって、屋根とライフラインと構造はしっかり職人さんに直してもらって、建築士さんのほうのアドバイスのもとでできる限りの耐震補強をおこなってから、DIY の工事をして、一般の方もオッケーにしてから建築塾でワークショップ形式でやって、という感じです。ここは 10 回ぐらいやりました。そして最後に、移住してきたアーティストさんに、何ヶ所か仕上げてもらったりもして、完成しています。子連れのお母さんが

来られる場所と、団体の事務所に使っています。

すぐ裏の路地裏にある「三軒家アパートメント」も、昭和 30 年代の木造 2 階建て、トイレ共同、風呂なしという古いアパートで、2 棟で全部で 10 室あります。これも全部空き家になっていて、ものづくりの拠点、若手アーティストさんの場所として活用しています。ちょうど去年 10 周年になり、全部屋が満室になりました。



同時進行で、2009 年から尾道市さんと一緒に空き家バンクというものもやっております。また、サポートメニューという移住をサポートする体制を作って、この 10 年でたくさんの方が移住してきてくださいました。ちょっと前のデータになるんですけども、成約件数が今 130 軒ぐらいになります。そういった移住者の方も含めて、空き家を再生して住んでくれたり、お店にしたり、アトリエにしたりという、一つ一つは小さいですが、素敵な空間が尾道の古い建物を使って毎年どんどん生まれてきている状況です。そういうのを見て歩くのが面白い町みたいになりつつあるのかな、という感じです。これが島嶼部や山間部のほうにも流れて、今いろんなものが再生されて活用してということが起きています。

そして、大型の空き家や移住してきてくれるのはいいんだけど、若い人の仕事、商店街の空き店舗をどうするかなど、いろいろ課題があります。解決策のひとつが、商店街のど真ん中に作った「あなごのねどこ」という明治時代の町屋を改修したゲストハウスと複合施設です。奥行が 40 メートルあります。最後はメガネ屋さんだったんですけども、5 年ほど空き家になっていて、移住してこられた漫画家さんのデザインで、みんなで作り込んで、去年で 8 周年を迎えました。ベッドもシャワー室も全部手作り、DIY です。商店街の中に素泊まりの宿ができることによって、若い人が非常に増えて、海外の方もすごく増えました。お食事は、商店

街や近所に食べに行ってくれたりするので、町の中を回遊して、いろんなところにお金を落とすとしてくれて非常にありがたいです。一緒にお祭りを盛り上げたりもしています。

他に見えてきた課題としては、文化財級の良質な建物の空き家をどうするかというのがあります。これは「みはらし亭」という、千光寺という有名なお寺のすぐ下にある、今年でちょうど築 100 年になった別荘建築です。尾道では、別荘建築のことを「茶園」と呼び、こちらも大正 10 年に建てられた茶園です。

空き家になっていたところを登録文化財にしたり、クラウドファンディングもしました。文化財として職人さんを中心に 1 年半かけてじっくり直しました。上からも下からも石段しかないところで、何をするのも本当に大変でした。合宿も 2 回開くなどしながら、5 年前の 2016 年に完成しています。こちらもゲストハウスとカフェになっています。両方 3,000 円前後で泊まることができます。ライターズ・イン・レジデンスや、お茶会をして、坂の町の拠点として再生していますし、いろんなボランティアさんとか支援があって、官民連携の協働のまちづくりになったかなという感じです。



他にもシェアハウスを 2 軒ほどやったり、きょう、発表しているのが、元旅館の松翠園という駅裏の旅館の宴会場です。60 畳あります。いま見えている天井は、1 マス 5 万円の協賛を地元の企業さんをお願いしたり、市の補助金も使っています。天井画は尾道大学の日本画の学生さんが仕上げられています。いろいろワークショップをして照明を作ったり、看板を作ったり、全部手作りです。合宿もしました。泊まることもできる貸しスペースです。こうして、いろいろなタイプの建物を再生活用している段階で、まだまだ空き家はたくさんあります。空き家というところか負の遺産のような感じがするかもしれませんが、われわれとしては「いろいろな可能性を秘めた宝箱」のようなイメージで、大変ですが楽しんで活用、活動しています。

コメント&質疑

陣内：豊田さんご自身が、世界のさまざまな魅力的な都市をツアーコンダクターとして回られて、地元に戻ったら自分のところのほうがもっと素敵じゃないかと気が付いた。またヨーロッパの都市は歴史的な建物を上手に生かして魅力的にしているということも体感された。グローバルな視点をもって開かれたダイナミックな立場や目で地元を見直して個々の活動やリノベーションをしているのが大きなことだと思う。もう一つ面白いのが、斜面都市である尾道。江戸時代から建物が、住宅や別荘が多くあったのかと思っていたが、意外にも近世までは、お寺など宗教施設がコアとしてあって、むしろ明治、大正、昭和に別荘とか、住まいがだんだん合成してできていって、時代がいろいろ重なっている。

今日、ご紹介のあったガウディ邸が昭和 8 年で、質の高い、近代のしゃれた要素が入っている木造の素敵なところですし、大正 10 年のモニュメント的な建物もある面白さがある。昭和の戦前までは、非常にポジティブに景観とか場所のダイナミズムを楽しみながらまちを作ってきたけれども、その後、車の時代になって、合理主義や機能主義、そして経済主義になり、海岸沿いや低地に開発を進めた。尾道の方々は気がつくのが早く、高さ制限などで町を守ったけれども、歴史的に集積した近來も近世もある肝心の場所をよみがえらせるときに、豊田さんを中心とした活動が入ってきたのだと思います。

お話の中で興味深いのは、いっぺん壊してしまうと、建築基準法のために、そこにはもう建物を建てられない。逆転の発想でいうと、ある意味では大変なメリットですよ。大きな、変なものには作れない、結果的に守られている。それをどうやって自分たちの論理と方法と情熱でよみがえらせるかというところで、いろんな勝負ができる。多様な人たちの知恵、アイデア、スキルがどんどん発揮されて、アーティストなどさまざまな職能の人が来てよみがえりつつある場所は、若い人にとって一番やりがいがある場所なので、夏の合宿に来たり、

いろんな活動に参加していただく機会を、実にうまく作り出したなと感心します。

もうひとつ重要なのは、今まで日本の歴史的町並みの保存とかをやっているところには、あまり宿泊空間がなかったことです。特にガウディ邸も、アーティスト・イン・レジデンスを最初に入れている。宿泊できて夜までずっと、町と一緒に呼吸しながら体感できるのは、外来者にとっても一番いいことだと思います。新しい試みがいっぱいあり、モデルになる、他でも応用できる普遍的な活動と魅力を作り出してくださっているということで、本当に感謝申し上げます。

福井：私も、尾道は大好きな町の一つです、特に港と一体になっているところ。尾道水道のあの水道の幅と、水の空間のスケール感が本当に素晴らしいと思います。別荘地としてそれを眺めながら暮らす、楽しむというのは、本当にぜいたくな場所だと思います。港とか水との関係で活動されていらっしゃることがありましたら教えていただけますか。

豊田：対岸の向島という島があって、泳いでも渡ろうと思えば渡れる、2、300メートルぐらい離れている島ですけれども、かつては9箇所ぐらい渡し舟があったらしいんです。フェリーを渡し船と呼ぶんですが、今は3箇所になっています。年々、水路がなくなって車中心になっていて、もったいないというのはあります。また、尾道で「フェリーズ」というアイドルグループを作って、フェリーをこよなく愛するアイドルを応援する活動をしている知人がいます。

私たちは、古くていい建物を触ることが多いですけれども、それは海運の時代に港町として成功した当時のものがほとんどです。昔、尾道にあった遊郭の名残であるとか、港町としての歴史を感じるものがたくさんあります。でも、港は平地で車も入ることができるので、平地が少ない尾道にとっては希少価値が高く、地価も高いエリアで、われわれのような団体には手出しができないことはあります。何軒か古い蔵があって、蔵めぐりツアーを行っていますが、いいと思う、残してほしいという蔵も、3年前でしょうか、豪雨災害でちょっと崩れただけで、何百年、200年ぐらい、非常に長い間生きてきているにもかかわらず、ちょっと壊れたぐらいで、「もう危ないから」と、大家さんが壊してしまったことがありました。

コロナの前のオリンピック景気のように、地方でも無謀な観光開発のようなことが、尾道でも平地のほうで起きています。商店街なのに、古いまちを壊して駐車場にしたり、目先の損得だけで、簡単に100年以上の歴史的なものを壊してしまっています。あのエリアは、尾道市でも景観地区になっています。高さ制限とか色制限がありますが、古いものを壊してはいけないという条例はないので、本当にこの5年ぐらいで「えっ、それが？」というようなものが簡単に、しかも平地ですからすぐ一日で重機で壊されるわけです。斜面地は車が入らないので、壊すのに時間もお金もかかり、なかなか壊されない。平地は逆に、壊すときは本当に早いですし、それなりの土地の価値があるので、時代の流れによって左右されてしまう港町の宿命ということは強く感じます。

これはどうにかしたいとは思ってはいて、もったいないよという反対運動的なこととしてはいるんですけど、「それなら買い取れるんですか？」と言われても、価格が何千万になってしまうので、もどかしさは感じています。こういうことに対しても、いろいろな意見を言えるような団体になりたいです。また、尾道市立大学には建築やまちづくりの科がありません。大学組織で、地元で研究して、どういうものが大事かとか、これからどういう建物やまちづくりをめざすのかということまで、口を出せるような研究機関が地元で欲しいと、常日頃から市長には言っています。

ニシカワ：明日から尾道映画祭です。今年亡くなられた大林監督の映画は山手だけじゃなくて、郊外だったり島々だったり、周辺の竹原だったり福山だったり、今回のテーマのテリトリーみたいだと思う。それがつながっている、一番いい「関係」が映像になっているのが監督の映画だと思いました。

あわらテリトリー 大地の恵みと女将ネットワークが未来をつくる

藤田彩加（小堀哲夫建築設計事務所）

べにやさんは1884年創業の重要文化財にも選ばれていた歴史ある旅館でしたが、2018年に全焼してしまいました。そこから新しい旅館をスタートしていきたいという思いで私たちの事務所に設計のオファーをしていただきました。私たちは、光や風、地熱を見直すことで新しいべにやさんの旅館の在り方を考えてきました。温泉熱を利用した全館床暖房や、全ての居室に光が入るような設計をしています。「光風湯園（ゆでん）」というコンセプトで始まっています。

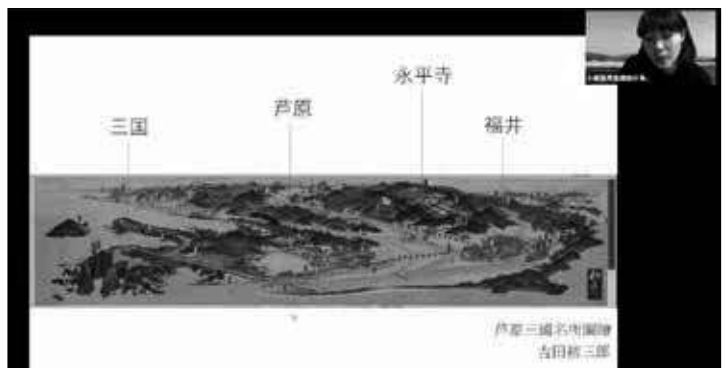
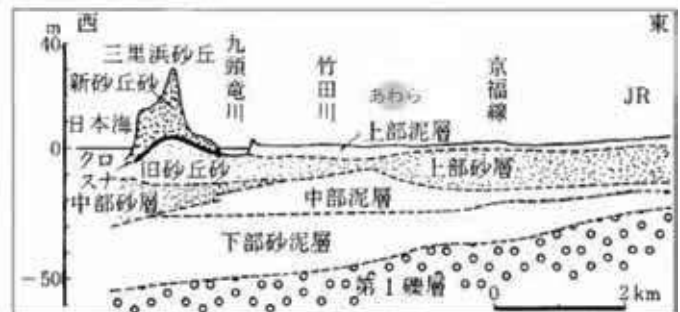
芦原温泉は田んぼのど真ん中にあるような温泉街です。こういう温泉街というのは他にはあまりなく、珍しい温泉街です。明治6年に田んぼの中に突然70本以上の源泉が湧き出るといところから芦原温泉の歴史が始まっています。

この田んぼの地帯がどうやってできていったかという、地図のように、平地になっている部分は6,000年ほど前はもともと海がありました。そこに堆積した土砂が蓄積されていき、稲作に適した肥沃（ひよく）な土地が河川の土砂によってできていきます。また、福井にはたくさんの古墳群があるのですが、堆積していた土地に人の営みが生まれていったことがわかります。

また、この地層図を見てみると、堆積した砂州があり、そこに平らな土地ができていることがわかります。また、断層があることで温泉が湧き上がっていったというのが、田んぼの中に突然温泉が湧き起こっていた理由になります。芦原の温泉地にはこのように長い長い歴史の中で生まれた恵みがあると考えます。

次に、地歴の上に重ねられた交通のネットワークについて。これは「芦原三國名所圖」という吉田初三郎が描いた絵巻図なんですけれども、この絵を見ると近代以降の都市の見方がわかります。面白いのは芦原がこの絵の中心にあるということで、鉄道網が敷かれた観光ブームが起こった大正時代の様子が見て取れるかと思えます。もともとべにや旅館を開いた奥村藤五郎という人は廻船問屋を営んでおり、海運のネットワークが三国を通じてあったということがわかります。その後、鉄道のネットワークが発展していき、芦原に旅館を始めることを決めていきます。

先ほどの絵をクローズアップしていくと、あわらと三国の関係が見て取れるかと思うんですけれども、あわらから三国というところは車で15分ぐらい、田んぼの中を抜けていくと突



然、港町が出てくるというのはとても新鮮な体験でした。この三国では三國港帯のまち流しという、あわらの女将さんたちも参加するお祭りが催されていたり、三国にもたくさんの町屋があり、こういう町屋を再生するような活動も始められているようです。

福井にはたくさんの観光資源があります。ただ、こういう時代を経て、来年には新幹線が通ることも決定していますが、コロナも後押しし、交通によって盛り上がっていたような時代はこれから終わっていつてしまうのではないかと考えていて、今、キーワードにもある「あわらテリトリーオ」というものを再考するチャンスなのではないかというのを私たちは考えています。

次に、あわらテリトリーオ再考について。今、べにや旅館さんの現場が始まって、どんどん進んでいるのですが、私は、もともと空き家だった現場事務所となっていて、毎週通いながら常駐しながら現場に携わっています。この現場事務所の壁なんですけれ



ども、はがしたままの壁に、べにや旅館の女将さんがカメラマンになって、この建物に関わっていく人たちの写真をいっぱい貼って、顔が見える関係の中で現場が進んでいるような状況です。

続いてあわらテリトリーオについて考えていきます。あわらに通う中で、あわらテリトリーオという言葉の大事さや、温泉、建材、食材など、さまざまなテリトリーオが感じました。これは瀬戸内に行ったときの動画なんですけれども、べにや旅館の女将さんや社長と一緒に、瀬戸内でも実際に行われている町づくりというのはどういうものなのかというのを勉強しながら、あわらでもテリトリーオについて考えていこうということで参加したテリトリーオのツアーです。

先ほどの発表の豊田さんの空き家のリノベーションの事例とかも見たり、陣内さんが町の人に話し掛けながら町についてどう考えていくかというのをみんなで学びました。

その中でまず、温泉テリトリーオについて考えたことがあります。陣内先生がエコ研で水辺の研究や水辺の神聖性について語られていると思うんですが、あわらには温泉から考える神話性や文化があり、そういう文化を町の人みんなで共有しているんじゃないかということを感じます。

1955年の写真なんですけれども、あわらの町にはたくさんの人たちが歩き、温泉街を楽しんでいるような写真があります。このような写真からも、あわらには温泉にある大地の恵みを作るテリトリーオがあったんだということが分かります。また、あわらでは年に1度、湯かけ祭りといって、各旅館や駅前ロータリーを巡行するおみこしにお湯をかけまくるようなお祭りもあります。



出典：あわら贅沢 <http://awara-zeitaku.jp/>

また、現場では、セントピアという温泉施設にも行きます。ここでは昼間はあまり町の人を見かけないんですが、夜はたくさんの方がいて、みんな知り

合いの関係の中で会話をしているような温泉コミュニティーが見て取れます。駅前の足湯でも地元の人たちが会話をしながら足を温めているような風景が見られます。デスク付きの足湯があるので、私もここで図面チェックをしながら、仕事をしながら足湯をしたりしています。また、建築においては、温泉熱を利用したローテ

クの床暖というのをに入れていて、建築においても温泉の力を生かすということを考えています。

さらに、ものづくりテリトリーオについて。休みなく毎日お客さんをお迎えするというのが旅館の仕事で、そういう旅館だからこそ、職人さんとの関係性がとても大事になるということを感じました。今回のべにやさんの建物では、廊下はRC造、客室部分を木造、一部鉄骨造とすることで、客室部分に木造だからこそできる可変性を持たせています。京都にある有名な旅館の俵屋さんもそうなのですが、ずっと作り替えていく、作り続けていく、それができるのが数寄屋という建築なんだというのが私たちの考えです。今まで100年以上残ってきたべにやさん。これから100年以上残していきたい建築だからこそ、時間の中で変化していけるような建築を考えています。

そういう建築を考えていく中で、「旅館というハコは美術館である」という話を女将さんから伺うことができました。その意味というのは、旅館にはたくさんの人が一日中滞在して、たくさんの人の技術や文化、歴史が積み重なっていく場所を体験できるという意味です。その中で私たちは、福井の職人さんや、たくさんの技術を持った人たちをリストアップし、こういう人たちにべにや旅館さんの建築を作ってもらいたい、これからも福井の技術を残していきたいということで、こういう人たちのリストを作るところから、まず建築を考えていきました。

これは、最近取材した錦古里漆器店というところで見つけた漆塗りのMDFという素材なんですけれども、こういうものをサインに使っていったり、杉原商店という福井の大きい和紙屋さんがあるんですけれども、漆塗りの和紙をメニューに使っていったり。福井には、大きい和紙を作る技術もあるので、今回、旅館のエントランスにあるトップライトにも、福井の和紙を使っていこうということで話は進んでいます。



錦古里漆器/漆塗りMDF

これは、杉原さんの蔵を改修した和紙のギャラリーで、こういうところでお打合せをしながら進めています。その他にも、家具は福井の家具屋さん、福井の畳屋さん、サインやホームページのデザインを考えていただいているのも福井の町づくりについて発信している Huge (ヒュージ) さんという方と協力しながら進めています。



Hugeさん写真提供

最後に食のテリトリーオについて。これは、先ほどのホームページを作っていただいている Huge さんが撮ってくれた写真なんですけれども、おけら牧場という牧場の山崎さん夫妻や、ワインのマークさん、あと、一番右にある、かきもちを作っているフジイさん。こうした顔の見えるつながりの大事さというのを食を通じて発信していくことが、あわらの農業を盛り上げていく。朝晩と食事をする旅館だからこそ、発信していけることなのだということで、こういう写真をホームページなどに載せながら旅館で発信していきたいというのが、べにやさんの思いとしてあります。

これは、現場に行く途中に偶然出会った三国から来るお魚カーなんですけれども、町の人々は、三国から来た新鮮なお魚を、こういう車で買ったりして、さらにそこで買ったようなお刺身とかを、夜、旅館で食べられるみたいなことが、食のテリトリーオにとって大事なことなのかなと思います。

次に、あわらの女将たちについて。こういったようなテリトリーオがあるということは分かったのですが、こういう活動を誰が伝え、広げ、変えていくのか。これまでの2回のワークショップを通じて、旅館の在り方

などを議論してきました。このワークショップを通じて見えてきたのが「あわら女将の会」の存在です。「ライバル同士でもあり、覚悟を決めた女将の仲間なんです」とべにやの女将さんも言っていたのですが、お互い、切磋琢磨(せつさたくま)していける仲間がいることが大きいと話してくれました。女将の会の活動としては、田植えをして、日本酒を作ったり、みんなで踊りを勉強しながら踊りを披露するような活動があり、この女将、人と活動と建築がある、建築をもつというのが、このあわらを支えていくときに、とても強い女将のネットワークに、人のネットワークになっていくのではないかと考えています。2回目のワークショップは、そのことが分かったので、たくさんの女将さんに集まってもらって、これからのあわらについて考えていくようなワークショップにしました。1回目のワークショップでも動画を作っていたんですが、2回目は、ワークショップを振り返るためのムービーを作って振り返るようなことをしています。

このように、話し合いの方法を学んでいくというのも、ワークショップの中では大事なことでと考えています。その2回目のワークショップの中で、自然や食やつながりについてのたくさんのキーワードが出てきました。そこで見えてきたのが、旅館をオープンにしていくことへの可能性。今までの旅館では考えられなかったような旅館の空間の貸し借りや、女将さんを一回トレードしてみたらどんなことが起こるんだろうとか、たくさんの活動のアイデアが生まれてきました。

そして、これからの旅館について考えます。ここからは、私たちの提案なのですが、あわらに通い、ワークショップをさせてもらう中で感じたことや、こうしたらもっとあわらが楽しい町になるかもしれない、というようなことを考えながら作っています。

今までの旅館像というのは、旅館の中で食事や温泉や庭が完結していたのですが、そういった旅館の使い方を少し変えてみたり、旅館の一部をシェアしてみることで、新しい旅館像というものを作っていけるのではないかなと思っています。例えば旅館で仕事ができたり、それぞれの旅館の得意な部分を生かし、場の貸し借りをしていったり。例えば、この地図を見て、いっぱい緑、大きい緑が見えると思うんですけども、これは旅館さんが持っている大きい庭で、もし庭の一部を町にオープンにしてみたら、歩いてみて、とても楽しい町になるのではないとか。例えば、温泉旅館がいっぱいあるので、年に数回、町の人が、旅館の温泉巡りをできる日があるとしたら、町の人自身があわら旅館のマスターになって町に来た観光の人たちにあわら温泉の魅力を語ってくれるんじゃないかとかいうようなことが、今までの旅館の在り方を変えることで可能になってくるのではと考えています。

最後に、あわらの妄想リノベーションについて。これから、こんな町になったらいいなという思いを込めて、リノベーションの絵を描いてみました。まず、その手法として私たちが注目しているものに、タクティカル・アーバニズムというものがあるんですが、「まずは市民(使い手)の手で小さなアクションを起こし、長期的なムーブメントにつなげていこう」というような考え方です。

ここで、タクティカル・アーバニズムで大事なことは、まずやってみるということから長期的なプロジェクトにしていくことなんですけど、そのためには、作り続ける場をつくることや、仕組みをつくる場をつくるのが大事だと考えています。場というのは、運営していく人や空間で、そのことを考えたときに、改めて女将の会のネットワークと、旅館という空間が大事になってくると考えています。女将の会が町づくりの発信者となり、行政と手を組みながら町を変えていくことができるのではないかと考えています。

実際に、町の中には空き家がたくさんあるので、小さい空き家をオンセン・ペーカーリーと名前を付けてパン屋さんにしてみたり、もともと傘屋さんだったところを、季節がころころ変わる北陸ならではのアンブレラカフェのような、町歩きをして少し疲れたら入れる場所を作ってみたり。こういった空き家の使われていない場所では、たくさんの物づくりの技術がある福井なので、そういった展示ができたり。セントピアの前には、大きい使われていない駐車場があるので、三国からのお魚カーや、たくさんの新鮮な野菜を運んでくる車、屋台などが並んで、温泉帰りの町の人が新鮮な食材を買ったりすることができるような場所になっていたり。足

湯の横、駅前にも大きい広場があるのですが、ここもほとんど使われていなく寂しい場所になってしまっているの、年に1回行われているあわら映画祭のようなことが毎週この広場を使って、ムービーFesのような形で、屋外で映画を見られたら楽しいんじゃないかなとか。この広場の隣には屋台村というところがあるんですけども、そこと連携して、こういったお祭りができるんじゃないかなということを考えています。



べにや旅館さんはこれからできていくんですが、こうした風景や人のネットワークを実現していけるように、できた後も、まだまだ一緒に盛り上げていければと思っています。

コメント&質疑

岩佐: もともと石原裕次郎さんも泊まるような有名な宿が、火事で焼けてしまうという大変な悲劇から始まっているんですけども、こういう新しい人が入ってくるということで、潜在的にいっぱいあったテリトリーオがうまく結び付いてくるという、そういう「回していく」みたいなことが、ひょっとすると建築やデザインの中でもできるんじゃないかと、非常に可能性を感じました。

陣内: 実は、あわら旅館の経営者のご夫妻、奥村さんが瀬戸内のテリトリーオツアーに参加して下さって知り合っ、素敵だなと思って、テリトリーオということで発表していただきましたけれども、このためにテリトリーオというのを作ってしゃべったんじゃなくて。だいたい前から、奥村さん、そして建築家の小堀さん、スタッフの皆さん、地元の方々、みんなでワークショップをやって、それがテリトリーオ的に「もう一回、地域の力を見直して魅力を高めていこう」と、もうずっとやっていたことなんです。それが、まさにテリトリーオの発想ということで、今日の発表にぴったりだということです。

そもそも、この奥村家というのが、三国の北前船の間屋さんをやっていて、紅を扱っていた。それで、べにやさんということになった。この福井というの、三国から少し上がったところの川沿いであって。あれは九頭竜川でしたっけ。そのさらに先には、一乗谷という中世の城下町もあって、この辺というのは、本当に歴史があって、今日、お話を伺うと古墳群があるということで、で、断層があって低地に地域ができたところに温泉が湧いたという。だから、縦軸と横軸と、僕らは言い始めているんですけども、テリトリーオを考えるのに、歴史軸と空間軸ね。空間軸のほうには、地形や地質や、いろんなものがあって、そこに歴史が重なってくるけれども、そういうものの中に、こういう所に、平坦な田んぼの中にできた温泉がある。この良さも、また皆さんのプロジェクトの中で生かされて、本当にすごいと思います。

ワークショップの中で、奥村さん、女将がおっしゃっていた、本当に周辺にある牧場とか農業を営んでいる方々にも非常にイノベーションというか、新しいことをやろうとしてる方々がいらっしゃって、そういう人たちと連動して、新しい食事を、地元の地産地消でやっていくというコンセプトがあります。また、伺っていて、インテリアなんか、いろんなデザインをやるのに、地元のたくさんの職人さんたちを発見して発掘してネットワークを作っていること、あるいは温泉街そのものの再生ということまで、女将中心に考えられていて。ライバルである他の旅館の女将もネットワーク化して一緒にやっていらっしゃる、まさにテリトリーオというものを考えていこうというのにぴったりの活動です。建築家である小堀さん、そして事務所が建築を通じて、本格的なテリトリーオに結び付くようなプロジェクトを実現しているというのは、本当に素晴らしく、なかなか海外にもないことだと思います。また、やはり北陸には底力があるんだなということも、つくづく思いました。

北山: 藤田さんのプレゼンテーションを聞いていて、建築というもののそのものが、実はテリトリーオのエンジ

ンなんだなということが分かりました。近代建築が、自由な流通で建築を組み立ててしまうということをはじめたことが、テリトリーを壊してきたんじゃないかと思うんです。だから、ひょっとすると、モダニズムという建築が、実はすごい犯罪者だったんじゃないかというのを、藤田さんの話を聞きながら、もともと近くにある木や土や石やわらを使いながら作ってきた、みんなが普請をすることが実はテリトリーのエンジンで、普請を続けることが、実はテリトリーをずっと作っていったんだと思うんです。僕たちは、ひょっとすると、これから建築の組み立て方を考え直したほうがいいんじゃないかな。今までモダニズム、近代が作ってきた建築の形式を変える必要が、本当にあるんだなと思いました。豊田さんの尾道の話も聞いて、僕、尾道の、あの「あなごのねどこ」って、偶然、昔行ったことがあったんで懐かしかったんですけども。大三島の伊藤豊雄さんのプロジェクトの帰りに、ずっと歩いていたら不思議な場所があって、中にどんどん勝手に入って行って見ました。そのときにも思ったんですが、やっぱり建築というのは地域を作っていくし、「あなごのねどこ」だけではなくて、学生のプロジェクトで、尾道というのは坂道だから、水平方向の移動でネットワークするというようなプロジェクトを、何回か見たことがあるんですけども。藤田さんの話もあったように、単体であることではなくてつながっていくこととかネットワークが、実は地域を作っていく。だから、一つのところで完結してしまうようなプロジェクトではなくて、プロジェクトがある種の未完成というか、完成されていない状態にしておくことが、いろいろなものを、握手していく関係を作れるものなんだろうなと思って。小堀事務所で、周辺とのネットワークというのを、イベントとして人の振る舞いとしてつなぐのもありますけれども、実は建築そのものをある種不完全性を作ることにつながっていくということもできるんだなということを思いました。特に、小堀事務所の取り組みが、すごくやっぱり地域とか、それからエネルギーとか、そういうものを大事にしながら作っていく建築事務所なので、とても楽しみです。

藤田：完成は4月の終わりです。ゴールデンウィーク頃、完成予定となっております。

岩佐：おそらく完成ではなくて、そこから、またいろいろ回っていくところというのも、まさにテリトリーのエンジンとして、どういうふうに機能していくかというのも非常に楽しみです。

「みなとまち新潟・進化する日和山（12.3m）物語」

野内隆裕（新潟日和山五合目館長）

新潟市に住んでおります。僕が住んでいる、だいたいうろろしているのは新潟市の中央区エリアです。河口に栄えたみなとまちが、この新潟の中央区かいわいの特性なんです。今日は、町づくりをやっている人間という意識は全くないんですけども、自分が面白いなと思っているものを発信していたら、例えばいろんな人に出会えたり、いろんな人が来てくれたり、それからいろんな人が手伝ってくれたという、そういう実践例を紹介させていただけたらと思っています。

新潟町は江戸時代の初期に移転しているわけなんですけれども、初期の頃の新潟町のエリアがおおよそこんなような感じになっているというわけなんです。去年、入手した江戸時代の地図があって。天保14年以降の地図らしいんです。実はこれ、僕のうちが書いてある、ということで買ったんですけども。この中にランドマーク的なものが描かれています。左の○のところには白山神社という神社があります。それから、右側の○は日和山。この白山神社も日和山も現存しているんですけど、この間に町ができています。信濃川の河口なもんですから、信濃川はこう蛇行しているんですけども、ここに合やすように町が作られているぞというのが、この江戸時代の地図から見ても分かるわけです。



川に並行に作られた道に「通り」という名前が付けられています。現在の古町通りとか本町通りという感じにです。で、川に直行する細かいたくさんの道を新潟では「小路」と呼んでいるんです。

たぶん港としての使いやすさということで掘割が掘られています。この掘は流れも悪くなっていたんで昭和39年の新潟国体のときまでに埋められちゃうんですけど、戦前の絵はがきとかを見ると、こんなように堀と柳と新潟美人とか、新潟の風景のアイコン的な感じに描かれているのですが、現在は通りの名前とか、あとは道路の脇に植わっている柳の木が当時の掘割がここにあったぞということを伝えています。

当時の町はずれに、お寺が一直線にずらっと、29の寺院が一直線に並んでいます。今や、町の中みたいですが、ここが新潟町の一番はずれだったのです。こうやって見ると白山神社から日和山までの間、非常に機能的に町が作られているなというのが分かるわけですが、結構面白い町だなというふうにあるときから気が付いていたんですけど、新潟の人って、どうしても、「新潟の町ってなんにもねえんです」って言う。やっぱり自信がないのか、何もないと言っている人がたくさんいて、なんかもったいないなと。一矢を報いてやりたいなという感じになりまして、その中で注目したのが、この日和山と、そ



れから、堀はもう埋まっちゃっているわけですが、それが残念だという方もたくさんいらっしゃるんですけども、それだけじゃなくて今残っている小路とか路地とか、こういうものの歴史的な背景とか風景の面白さ。今残っているものになんで目を向けないのかなと思っていたので、路地連新潟というまちあるきグループを、特にこの日和山とか新潟の小路を通した、路地の魅力を通して新潟の町を発信しようということで活動し始めたというわけなんです。

2002年、なくなったものばかりみんなが懐かしんだりしているので、そうじゃなくて、今、ここに残っている小路とか路地も歴史もあるし風景も面白いよねと、自分で案内板を作って、こういう目線で町を案内する人がいなかったんですけども、路地目線で町を案内したり。

日和山というのもあとでちょっと紹介するんですけども、新潟の日和山は、ぼろぼろで誰も登らないような場所だったんですけど、ここ面白いよということを、いろんなことで発信していたというわけなんです。そうしたら、新潟市役所に、なかなか面白い方がいらっちゃって、民間でこういう面白いことをやっているやつがいるんだったら、新潟市は応援してみようか、ということで、新潟市さんと路地連新潟でコラボする形になりました。私が作っていたこの小路めぐりの案内板を新潟市さんがアップデートしてくれて。本当に路地連新潟がやっていたことを新潟市さんが、行政が参加して手伝ってくれたという形になったんです。こういう形で、実際に2007年から小路めぐりの案内板というものができたり、小路を路地目線で町を歩こう、楽しもうということで、この小路めぐりの地図っていうのを作ってみたんですけども、これなんか、ほとんどもう、僕の好きな路地の風景これだ、みたいな、そういう路地めぐり、路地の風景コレクションみたいなのを



作っていたんです。よくもまあ、行政の方が好き勝手にやらせてもらえたなと思ったんですけども、こういうような地図を使ったり、案内板を作って、そしてこれを元に町を案内するということが続けていたんです。

そうしたら、ちょうどありがたいことに、全国路地サミットというのが各地でやっているということを知りまして。2008年に知って、長野だったんですけども、そこに行きまして、新潟も路地で結構頑張っているんで、ぜひ路地サミットに来てくれないかな、ということ言っていたら、2010年の誘致に成功しまして。路地目線で各地いろいろ町づくりをしている方が、新潟の路地の実力とやらを見せてもらおうか、という感じで新潟に来ていただくきっかけになったというわけなんです。

それまで、新潟市民でも、路地目線で歩いたりとかすることは全くなく、地元のガイドさんとかも、こんな路地見せていいのかしらとか、面白いのかなというふうに、はてなという感じでずっと案内していた中で、路地サミットが来るということで、それに向けて各自の路地の見方を自分の中で編み出して、路地を案内するようになってきたんです。

まずびっくりしたのは、新潟の地元の人です。ここ歩いて何か面白いの？みたいな感じなんですけど、やっぱり路地好きが集まると、新潟、なかなか面白いじゃないかという形になって、外から「いいね」と言われると、やっと新潟の人も、新潟の路地っていいのかもしれないというふうになってくるということで、本当に路地サミットを誘致できたというのはありがたいことだったと思います。

この路地サミット新潟の基調講演に誰がいいかという話をしていたときに、ちょうど『タモリ倶楽部』を見

ていたら、ちょっと面白い地形マニアの人が出てきて、この方々を呼んでみたいねということになりました。来ていただいたのが東京スリバチ学会の皆川さんという方なんですけれど、なんか同じような匂いがするというような方が来てくださって、面白いと言ってください。皆川さんとは、この2010年の路地サミットをきっかけに、毎年、新潟に来てくださったり、私が逆にお邪魔させていただいたりという交流が生まれるというわけなんです。昨年も来ていただく予定だったんですが、コロナでなくなっちゃったんですけれども、



ほぼ毎年、こういう交流が生まれると。路地が好きだということを言い続けていて、こういう出会いがあるものなんだなというので、自分としても、本当にうれしい出会いがここにあったというわけです。

路地で町が好きだということを言っているんだということがなんとなく浸透してきたので、新潟の支部もたくさん作っちゃおうということで、路地連新潟、路地連胎内、路地連新発田、路地連新津、路地連加茂というふうに支社がたくさんできてきて、お互いが自分たちの町を路地目線で、案内をしたり行き来するような形になってきました。

まちあるきを通して、新潟の町は面白いぞということを言っていたという話は、今、こんな感じなんですけれど、この中での新潟のランドマーク、白山神社と日和山と出ておりました。ぜひ、この2つの名所を通して、みなとまち新潟らしさをご案内できたらと思います。白山神社に行きますと、奉納されている大船絵馬という絵馬があるんです。この絵馬をちょっとご紹介したい。この絵馬の意味が分かると、みなとまち新潟の役割がよく分かるんです。歴史博物館にこの複製品があるんですけれども、何が描いてあるかというところ、手前が新潟の湊なんです。で、左上が大坂の湊です。こちらが江戸の湊が描かれている。各地の船が出入りする目印となった場所も描かれている。新潟ですと、湊稲荷神社が描かれている。大坂ですと天保山が描かれています。江戸ですと佃島の蔵とか鐵砲洲の稲荷神社とかが描かれていて、ここを目印に入っていくというものが描かれています。さらに、この新潟の湊の船をよく見て



みると、お米を積んでいるんです。いわゆる年貢米を新潟の湊で積んで、大坂で降ろして、江戸でも降ろしている。要は、この絵は、年貢米の輸送を請け負っていた方が自分の商売の安全を祈願して奉納したものだということです。

お米を運んでいく船というのは、帰りは空っぽになっちゃうんですけれども、じゃあ、何を運んでいたかというのが、またかいわいを見てみると分かるんですけれど。例えば、対岸の佐渡の宿根木とかに行ってみますと千石船がありますが、船底に御影石とかがあって、これをよく読んでみると、瀬戸内海地方の御影石が尾道で積まれ佐渡へ行きましたとか。やっぱり、お米を運んでいって、帰りに空っぽだと、ちょっと軽くなっちゃ

うので、なんらかの重いもの、手っ取り早い重いものを乗せてくるということで、新潟からお米が運ばれていて、なんらかの各地の重いものが新潟に来ると。これは、この北前船でここへ船の寄港地、各地にこういうものがあると思うんですけれど。例えばうちの近所。島根県の出雲石で作られた狐の像があったりするんです。

先ほどの白山神社の鳥居。これがよく見ると、尾道の石工、山城さん、惣八さんという方の作られたあれだよというのが出て、こういう目線で、意外と身近なところに北前船の痕跡があるんだなというのを思えるわけなんです。実は、2014年、路地サミット、尾道で、豊田さん、大変お世話になりました、お邪魔させていただいたんですけれども、新潟に尾道の石工の名前が彫られている鳥居があるぞというのを紹介したんです。尾道の住吉神社に行くと、新潟の方々の名前が彫られたりとかしていて、しっかり痕跡が残っていて、北前船というテーマで各地を見てみると、いろんつながりが見えて楽しいね、うちの鳥居もいいですけど、なんて話をしていたら、尾道の方、新潟へわざわざ見に来てくださったという。こういう感じで北前船を通して、お互い行き来させていただいている。ありがたいことです。

日和山の話をちょっとしてみたいと思うんですが。これは、江戸の絵師、長谷川雪旦さん、江戸名所図会とかの挿絵を描かれている、この方が新潟に来られて描いた山なんです。日和山というのは、帆船の行き交う時代に湊を見渡した小高い山の事だということで、私のこの日和山に出合うきっかけというのは、法政大学出版局さんから出ている南波松太郎先生の『日和山』の本に出合っちゃったのが運の尽きというか。

うちのすぐ近所にある日和山が載っているなというのがあって、なかなか、そういうものも楽



しいなというふうに思ってくると、各地も行ってみたいなくなっちゃうんです。で、全国に、まだ現在も80箇所近くの日和山があるということで、早速、家族を巻き込んで日和山めぐりを始めちゃうというわけです。能代の日和山へ行って、方角石の写真を撮ったり、にかほ市、酒田、酒田は、非常に新潟の町に似ているななんていうふうに見ています。それから石川県かほく市です。あと、三国湊も行きました。日和山に行きたくてお邪魔させていただきました。太平洋側も、石巻市、これは震災の直後です。ボランティアで行ったときによく見えた場所ですけども、この高台が日和山です。閑上（ゆりあげ）も行きました。もう10年もたっちゃいましたけれど。蒲生。それから宮城県塩竈の寒風沢島。ここもちょっと行ってみたいって行ったんです。ここは、やっぱり立派な方角石もありますし。あと、ここ、すばり地蔵というのがありますが、これは縛られているんですけども、なんでかという、地元の方々のこの湊は、船が出ていっちゃうと暇になっちゃうものですから、船に出られちゃうと困っちゃうというわけで、地元の方々が地蔵さんとか石仏を縛るとこの方が怒ると。怒っちゃうと嵐になって船が出られない。ということは町に来てくれるということで、こういうお話があるよというところが紹介されていたもんですから、ここにわざわざ行ってみたというわけなんです。

他にも、伊豆の子浦です。方角石もありましたけれど。これ、逆風祈願、ころばし地蔵。この崖の上にお地蔵さんがあるんですけども、ぼろぼろになっているんですけども、これもやっぱり、地元の方が、船が出ていっちゃうと暇になっちゃうから、このお地蔵さんをひっくり返していじめちゃって。そうするとこの方々が怒るから嵐が吹くというわけで、船が出られないから、また湊に飲みに来てくれるねという。このように、

北前船の寄港地って、同じように日和山があると同時に同じような民間信仰があるのです。

なんでこの話をしているかという、わが家のすぐ歩いて3分の神社にも、このような願懸け高麗犬（こまいぬ）というのがありまして。この高麗犬、回るんですけども、新潟の人は、回して西の方向に向けておくと西風が吹いて船が出られない。船が出られないから、また新潟の古い町に飲みにいこうという感じで、船が出ないように祈願している。こんなような共通するものがあるというわけなんです。

そんな新潟の日和山なんですけれども、こんな大事な場所なのに、地形の変化で、この日和山から海が見えなくなってしまったことで、忘れ去られちゃったんです。大正時代にもこうやって名所の絵はがきにもなっているような場所なんですけれども、今、町の中に埋もれるような形になっておりまして。南波さんの本を読んだときに、こんな全国各地にあって、本の中でもかなりのページが割かれて紹介していただいているこの日和山が、なんで、こうぼろぼろになっているのかなというのが残念に思っていたんです。



大正期の日和山 名所絵葉書

このすぐ近所にうちの実家があり、「日和山の家」なんて呼んでいたもんですから、ここにちょっと関心を持つようになったというわけです。山頂には住吉神社とかあったんですが、結構、荒れ果てていたんです。年にいっぺんだけお祭りがあって、このときだけ人が集まるんですけども、あとは登る人もいないような場所だったんです。これをなんとかしたいなということで、行政が何かしてくれることを待っていても全然してくれないんで、自分で、じゃあ、「日和山登山のしおり」でも、登山部でしたので、登山のしおりでも作って、ここまで歩くまちあるきとかやってみようかなということで、案内をしていたんです。

そうしたら、だんだん、変人が変なことをしているぞということで、いろんな方が集まってきてくれて、じゃあ、面白いねということで、この山、じゃあ、顕彰活動を一緒にやろうかということで。あんまり真面目にやるんじゃなくて、楽しさを前面に出していきたいという形で。

例えば、新潟はチューリップの球根の出荷する産地なんですけど、花は取って捨てちゃうんですけども、それがもったいないんでもらってきて、これでこの真ん中の下にある黄色と赤の、北前船をチューリップで作ってみたりしたんです。そうすると、なんか楽しそうだねということで、わざわざ人が見に来てくれるんです。

この絵はなんだ、という話になると、これは北前船ですよ、北前船ってなんなの、実はこの日和山は、こういう北前船の時代に湊の出入りを見ていた場所なんだよ、って説明になるわけで。まず、楽しさとか遊びから、その場所の価値に気付いてもらえればというようなスタンスで活動をし始めたというわけです。だんだん、地元の大学とか皆さんが手伝ってくれるようになってきたりしまして、ようやく地元の新聞とかも取り上げてくれるようになりました。

こういうふうになり盛りが上がってきたら、ようやく新潟市が、なんか民間でいろいろやっているね、と。これ、ちょっと応援しなきゃいけないんじゃない？ みたいな感じで、新潟市の方が、協力参加させてくださいという感じでやってきてくださいまして、ここで日和山委員会というのできるわけです。

この真ん中に、だから見たことがある顔の方がいらっしゃるんですけども、これは岩佐先生です。昔、新潟大学にいらっやったわけですけども、岩佐先生とは、この日和山、なんにも人が来ないときから、一緒に盛り上げるお手伝いをさせていただいていたんです。

行政のほうは、民間と行政と、それから学術的な部分のこの三者で何かしたい、誰かいい人いないかなって。当然、岩佐先生でしょう、という話になりまして、岩佐先生のご指導の下、この日和尚がどういう形になったら、どういう形で再生したらいいのかなというようなグループ、日和尚委員会が誕生したというわけなんです。

岩佐先生が、日和尚の良さ、歴史が感じられる場所、それから景観です。このとき、木がもっしょもっしょで全く周りが見えなかったものを、枝の1本1本を全部精査して。全部切っちゃって丸坊主にすればいいというものではなくて、これを切ったら町のこれが見られる、これを切ったらあっちが見られる。この木は残しておけば木陰になって人が休める場所になるという、まさに日和尚からの眺めをデザインしてくださったのが岩佐先生の皆さんだったというわけなんです。ようやく、先生の指導の下、新潟市とともに、2009年に日和尚の七合目というのを作っていただいて、そこに行くと日和尚の歴史が分かるアーカイブができて、山頂にある住吉神社、ぼろぼろになっていたんですけども、これは政教分離ですから新潟市が手を出すわけにはいかなかったんで、地元でなんとかしようということで。地元の有志がお金を集めて、800万だったかな、集めて再建して。だから各自が、官学民が、おのおのやれることを出し合って知恵をしぼってやったというのが、この日和尚になるというわけなんです。

2009年に日和尚の整備が、一応、これで完了するというわけなんです。ただ、ハードが完成しただけで、なかなか人がここに登ってくるのがないなというところがあったので、なんとかしたいなということで、翌年、新潟市さんと一緒に、さっきの小路めぐりシリーズの第3作目が、「新潟下町あるき 日和尚登山のしおり」です。以前、自分で「日和尚登山のしおり」というものを作っていたんですけども、その新潟市とのコラボ版を作って、ここを歩いて日和尚まで登ろうよという地図と案内板ができたというわけです。

私は、本業は不動産の仕事をしておりまして。この日和尚の脇が空き地になっていて、もうぼろぼろの空き地だったんですけど買う方もいなくて。新潟市さんが買ってこられてここを起点に整備してくれれば良かったんですけども、そういうこともなかったんです。実は、1年半、こう指くわえて眺めていたんですけども、誰も手を出す人がいなかったんで、やるかと思って、自分でここを買ってきちゃって。やはり、ここを買ったお陰で、新潟市さん、ここからブルドーザー上がって工事ができたりとか。いわゆる整備のきっかけになったというわけです。

この日和尚ですけれど、長谷川雪旦が来た頃とか、大正時代です。ぼろぼろだった日和尚だったんですけども、新潟市の整備が始まり、こんな感じになってこんな感じになって。で、ちょっと人が来る場所になってきたので、昔、茶屋があった場所だったらいいので、今風でいう茶屋、カフェでも作りたいなということで建てちゃったというわけです。で、うちのかみさんに、「きみ、ちょっとカフェの店長でもしてみない？」ということで、かみさんが喜んでここでやってくれたというわけです。

このような形で、官学民、三者でおのおの出し合って、やれることを出し合ってやってきたこの日和尚のプロジェクトというものが、2014年には、



グッドデザイン賞に選んでいただいたということで、非常にさらに注目をあびるようになりました。それまで

載っていなかったこういう旅の雑誌とか、こういうものに、名所として日和山が載るようになってきたわけです。

あと、新潟市民が認定する新潟市民文化遺産というものに、新潟の小路めぐりが、この日和山が認定していただけるようになって、少しずつ市民の目も向くようになってきたというわけです。なんとといっても、平成26年に、小学校5年生の理科の教科書に載りました。こんな感じですか。天候を見るという場所で、日和山というのが全国にありますよと。その中で、新潟の日和山が面白いぞということで教科書に載ったんです。

地元の小学校が、学校が統合して、日和山小学校という名前になったんですけども、その生徒、5年生が教科書を開くと、自分の近所の山が載っているわけです。そうすると、写生会で日和山に登ってくれるようになって、絵を描いてくれるというわけです。こんな感じで盛り上がってきているぞという感じです。

去年は、日本地図センターが「地図中心」日

和山特集でかなりのページで紹介していただいたりとか、新潟市民も少しずつ、他と並ぶような、負けなぐらいなところがあるんだな、ということを知って、ちょっと自信を取り戻しつつあるというわけです。

2017年に、新潟の町が日本遺産に選ばれたんです。いわゆる「北前船寄港地・船主集落」ということなんですけれど、これも、盛り上がってんだか盛り上がっていないんだかよく分からないですけども、本当にこれも、尾道とかも選ばれていますし良かったなと思うんですが。

最後に、この新潟市内の構成文化財をちょっと紹介して終わりたいと思うんですけども。北前船の模型です。こういう奉納和船模型とか、北前船が嵐で沈みそうだったのが助かったという逸話の彫られたケヤキの額です。とか、芸妓さんです。それから、いわゆる豪商の建物があるんですけども。湊の文化もそうなんですけれども、先ほどの大船絵馬も選ばれているというわけです。それから、先ほどの西に向けて船を出させないようにしていたという湊稲荷神社の願懸け高麗犬も選ばれました。何よりも、あのぼろぼろだった日和山が日本遺産の構成文化財に選ばれたということで、ようやく、なんとなく、地元の人も、今、ちょっと日和山に登ってみようかなという気になってきたというわけです。本当に、この岩佐先生のお陰で盛り上がってきている日和山なんですけれど、俺たちの進化はまだまだこれからだ！ ということで、岩佐先生、こういう形でお声掛けいただいたんですけども、本当に先生のお陰で新潟の一名所が復活したなということで、大変喜んでおります。ありがとうございました。

コメント&質疑

岩佐：どうもありがとうございました。ちょっと恥ずかしい写真がたくさんあって、大変懐かしくもありですけども。やはり、あれですよ。実は日本中どこにでもある湊の、というか山だったりとかリソースなんだけれども、こう組み立てると面白くなるとか、あとやっぱり、今日、1部のときに少しご紹介いただきましたが、すごい広大な平野があって、いろんな集落があって、いっぱい米が集まった実は一番集積された先という



のがこういう場所で、さらに、そこがダイナミックに日本中とつながるという。そういう、すごくダイナミックなつながりみたいなものも感じさせるようなお話だったんじゃないかと思います。どうでしょう。陣内先生、実際、日和山、登られたことがあるかどうかちょっと分かりませんが、いかがでしょうか。

陣内：野内さん、本当にありがとうございます。僕も呼んでいただいたときにお世話になりました。実はあのとき、皆川さんと、『ブラタモリ』のプロデューサーの尾関さんと行って。で、新潟って平らなところなのかなと思っていたら、スリバチ学会皆川さんから見てでもこぼこがあるんだ、と。微地形どころか、もちろん日和山が大変な凸状の空間だから。本当に楽しく歩かせていただいて。日和山も、もちろん、何回か登ったんですが。僕は、そもそも新潟というのは、水の都市として素晴らしかったわけだから、まさに日本のベニスみたいな感じだったわけですから。それを埋めちゃったというのは、東京と全く同じで、ちょうどオリンピックのちょっと前ぐらいですよ。だけど、本当に水の都市であり、みなとまちであり、新潟の最大の特徴は、城下町じゃなくてみなとまちで、こんなに大発展して立派な都市になったので、お城がない、武士がない。代官所はあったかもしれないけれども。要は町人の町衆の文化だということです。

これが都市の構造も決めているし、自由な精神とか文化の高さを生み出した元で、それで何が特徴かという、さっきご説明にあったように、日和山の下からずっと中心にかけて山側に、高いところに寺町が並んでいて。あんなに寺があるということは、みんなお金持ちだったということです。それから、芸者さんが、芸妓さんがいっぱいいる花街が町の真ん中にあるという。鍋茶屋もそういう料亭が有名だけれども、そういうものが、町のど真ん中にずっとあるということが、これは尾道とも共通するんです。尾道も、実は城下町じゃない。城がないので町衆の文化で、花街が真ん中にあるわけね。同じですよ。

そういう点で、僕は思うんですけれども、路地がいっぱいあるというのも、今日、なるほどと思って伺っていて、路地の中にも小さな料理屋とか小料理屋とか花街的な雰囲気がいっぱいあって。その路地って、だから住宅地の、東京の月島の路地なんかと違って、外来者も結構、入っていきやすい路地も多いんじゃないかなという。これもメリットだなと思います。そういう意味では、東京でいうと神楽坂なんかはちょっと似ている。そして、『日和山』、ありがとうございます。法政大学出版局の、僕は局長をやっていて、それがご縁で日和山研究が始まったというのを、今日初めて伺って。本当に今日は、岩佐さん、すごい仕掛け人だなと思いました。実は、僕は呼んでいただいたときに、あの方。行政の中の今日お話しになっていた。

野内：池田さんですね。

陣内：池田さんに呼んでもらったんだけど、岩佐さんもパネリストだったんですよ。そのときは、信濃川のほうの水辺でいろいろ学生諸君と一緒にやっていたプロジェクトの話をお伺いして、すごい人があるなと思って、ぜひ、法政に来てもらいたいなと本当に思っていたら、法政が新潟大学から引き抜いちゃったんです。そういう意味で知り合いなんです。本当に、今日のお話が北前船でつながっちゃったという。三国までつながっているから。そして尾道の人が行っているって信じられないです。こういう、だから、今日、テリトリーのお話、テリトリーって、いろんなスケールで考えられるんですけど、町の周辺、田園の農村部分で小さなテリトリーがあるけれど、それが、もうちょっと広域の、瀬戸内がテリトリーということ、さっきもちょっと出ていましたが、樋渡さんって僕の教え子が、広島でそれをやっているんですけど。それが、みなとまち同士でつながって行って、大きいテリトリーを作るといって、こういう物語が生まれるので。これが陸の時代になり、鉄道、飛行機になっちゃうと、全くそれができないんです。そういう意味で、人と物と情報に移り歩いていくということの面白さというか、テリトリー論の局地だと思うんですけど、こういうことが、今日のお話の中で、見事にプレゼンされて、すごいうれしかったです。どうもありがとうございます。

福井：新潟は結構、頻繁に行っているんですけども、町中あんまり行くことはなかったんですが、実は偶然、日和山にお邪魔して、その上の展望台までぐるっと歩いたりということもしておりました。新潟は、僕にとってびっくりしたのは、海に向かって登っていくという砂丘の高さを本当にびっくりして。関東の人間からすると、海に向かって下がっていくのが当たり前なんですけど、逆に上がって行って、高いところから海が見えるという、その地形の構造とか風景の作りが本当に違うなと思って、初めてのときには、本当にびっくりしたのをよく覚えています。この新潟のみなとまちも、細かい地形を見ると、なかなか難しい構造をしていて。砂丘列がたくさんあるので、単純な高さ関係じゃないんですね。だから、真ん中の中心街の部分はちょっと高いんだけど、砂丘との間は少し低くなったり、その寺町の部分も、普通は寺町は高いところに、上がったところにあたりするんですけども、それがちょっと中途半端なところにあるんで、地形上のポイントがあって、すごく面白いんです。そうやって、ものすごくたくさんの発見があるところで、私も、とても面白いというふうに思っていますので、また伺いたいと思っています。東北とつながっているというのは、みなとまちの本当に特徴だと思うので、これも、もうちょっと研究していきたいと思っています。

岩佐：今日、一個一個のテリトリーで考えていたんですけども、実は舟運で全てがつながっていくというのは、大変興味深い展開なんじゃないかと思います。

山の暮らしのアップデート

大滝ジュンコ（アーティスト、山熊田在住）

私は埼玉県に生まれまして、山形の東北芸術工科大学を出てから、グローバリゼーションのあおりを町中が受けてしまった長崎県の波佐見町で、廃工場ばかりになった焼物の町の跡地をうまく利用できないかというお話をいただきました。現代アートをやっている、作品を作るときに企画書を書くんですけども、それを「イベントの企画もできるやつ」みたいな勘違いがあったのか、そういう切り口で呼ばれたと思いますが、結局そこをリノベーションして、monne porte というオルタナティブスペースを作りました。運営するうちに、人がいっぱい来るようになって、企画自体も持ち込みが増えて、安心して友人に任せました。そのあとは、富山県氷見市の定置網の網元さんが大きい石蔵を持っておられて、さきほどの北前船のお話にもあるような感じで、他の地域からの持ち込まれた石で作られているその石蔵を拠点にして、アート NPO ヒミングというところで、アートを使って地域の魅力を再発見したりとか、地域の人たちの特技、魅力みたいなのを提示していくきっかけみたいなのをやるイベントをやっていました。近所に木造和船を作る船大工さんがおられまして、その大工さんに、伝馬船という、まあまあわりと小さめの船を2艘作ってもらって、それを遊覧イベントにするために、船頭の練習をしてお客さまを乗せたりしていました。その頃から、アーティストよりもアーティストらしい生き方をしている人たちが第一次産業にすごく多いなという感じがあったのと、東日本大震災があった後だったので、やっぱり価値観がどうしてもエネルギー問題とかを無視できなくなったり、そういう時期でもあったりしていて、自分自身が、とても生き物として、すごいひ弱な存在だなという感覚をごまかせないでいたところに、この村に訪れるきっかけがありまして来ました。友人の誘いと書いていますけれども、「マタギと飲み会しようぜ」というきっかけで来まして。そうしたら、すごいびっくりしたんです。いろいろ現代アートに関わる地域って、わりと当時は、荒廃した地域だとか見放されたような地域を生き返らせるために現代アートを使うという手法がすごく多くあったもので、私もどことなく日本の田舎みたいなのを知っていたつもりだったんですけども、そんな私が恥ずかしいと思うぐらいに、すごくプリミティブな暮らしぶりが今の日本でまだ残っているのかという、それこそ電気、ガス、水道がなくても生きていけそうな強さを持った生活をこの村の人たちがしていたのを見まして、すごい衝撃的だったので、そこから、ここに、休みのたびに通い始めました。引っ越しに至るまでは、通ってはいたんですけども、圧倒的な文化の違いと、いろんな物事が家単位で行われているというのに限界も感じまして、ご縁もあって、マタギの頭領と結婚しまして。今、ここにしな布の工房を立ち上げて、今に至っています。というような、結構、ジェットコースターみたいな人生を送ってきました。

この村はご覧のように、ほとんど一番上の一番山奥の、山形県との県境、山を1つ、2つ越えたら山形県なんですけれども、俗にいう限界集落と呼ばれている村で、43名しかいないし、高齢化率もなかなかなんです。海までそんなに遠くなくて、19キロ、車で30分かからないで行けるぐらいです。でも、海側と違って、すごく雪が吹きだまるところで、今でも1階が埋まっている感じに近いのかね。道の行き止まりでこの先は道がないので、行き来



も、かなり独特なやり方なんですけれども。隣の集落まで8キロと、なかなか不便な場所です。不便なところなんですけど、不便だからこそ残っていた文化というのが、私がほれ込んでしまった要素なんですけれども。

まず、マタギが現存しているということと、焼畑農法、山焼きをしています。越後平野で有名な新潟ですが、ここは平野が終わった先で山ばかりなので、そこで作物を育てるために山で焼畑をします。また、暖を取るのに、木を炊いてまきストーブで冬を越すんですけれども、その灰も上手に使ったりする文化が今でもやられています。その一つが、しな布という、日本三大古代布とか言われていますけれども、本当に原始的な布で、木の皮から布を織るという、そういう伝統が残っています。令和の時代でなぜ残っているかといったら、30年ちょっとぐらい前までは、あまりの雪の深さに、途中、往来する道が雪崩で埋まってしまって、冬は陸の孤島になるんです。そういう中でも耐え忍んで生き延びてきたからこそ、奇跡的に昔のままの営みが残っていたみたいなの、そういう村です。

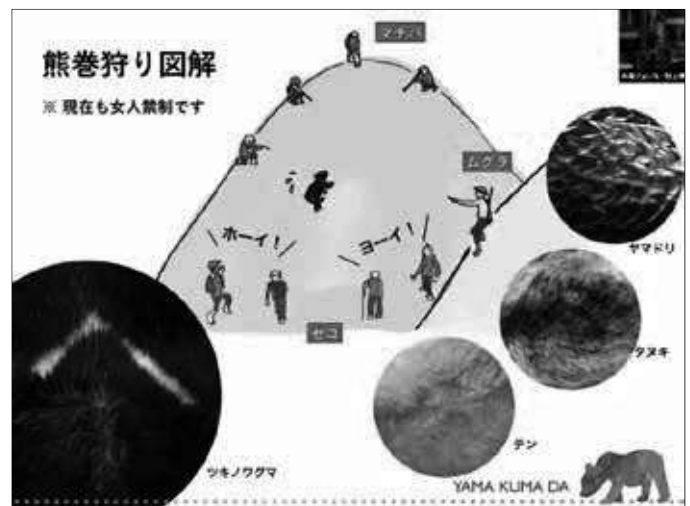
雪がすごいです。今までの皆さんのお話を聞いていて、すごい羨ましかったり、なるほどなと思うんですけれども、まず、この村に来た一番の理由が、15年後、下手したら、いや、20年後、村はないんじゃないかというのに気付いて、焦って通い出したというのが実のところなんですけど、でも、そこでも、人がいればなんとかなるって、今まで私が住んできた土地では、そういうふうな展開ができたんですけれども、この村には、人はもちろん少ないんですが、空き家がないんです。他の地域と違って。というのも、雪深すぎて管理が大変なんです。毎年、今年も雪下ろしを3回ほどしましたけれども、空き家になると、この村では古くからの慣習で家を残さないで他の地域に移り住むというしきたりがあるので、本当に空き家が極めて乏しいです。あと、山奥だということもあるし、人口がそもそも少ない地域だとか、産業そのものも他の地域に比べたら幅が全然なくて。なので、仕事は選ばなければあるかもしれないんですけれども、職種がものすごく、ない。新しい事業を起こすのにもかなり勇気がいる悪条件です。そのくらいに人がいないということは厳しいという。

山はあるし水もあるし、昔ながらの文化もあるんですけれども、かなり独特な文化が残っているということだとか。幸いなことに Wi-Fi 環境、Web ができる。光回線が通っているとか。あと、クロネコヤマトさんとか、物流をなさってくれている方々もちゃんと来てくださるので、全く閉鎖された村でもない。ここが救いだなと思っております。

その文化を、ざっと紹介しますと、マタギです。マタギはいろんな定義があるんですが、独特の山の神信仰とかももちろんあるんですけれども、一説によると奥羽山脈の金脈を探す民だったというのがルーツで。だから、先ほど出た北前船の文化の行き来というのと真逆で、日本の真ん中の山脈を渡り歩きたいな、そういう人たちがこの村のルーツなようです。

これは、ツキノワグマを狩っているところなんですけれども、実は私は見たことがなくて。というのも今でも厳しく女人禁制が守られているという。だいたい、こういうふうにくまを狩るようです。話を聞いて、それを絵に起こしただけなので、合っているかどうか分からないんですけれども。

猟期が始まる11月15日から、チームで山をぐるりと人で囲って人海戦術なんですけど、クマを追いたてるのに、大声で、「鳴る」というんですが、大声を上げて、それで嫌がるクマが山の上のほう



に逃げる習性を利用して上で鉄砲隊が待ち構えているという、こういうやり方なんだそうです。この狩り方も独特なんですけれども、この村はたぶん日本で唯一かもしれないですが、獲物の分配は徹底的に平等にしています。どんな手柄を立てようが、小さい子どもだろうが関係なく、男1人頭はこれだけ、というふうに平らにして、みんなが生き延びるような、持ちつ持たれつみたいなやり方をして分けています。お肉、骨などなど。

女たちは何をしているかという、わらび採りなんです。「村」の起源って「群れ」なんだなというぐらいに、山の中に人間が住まわせてもらっている感じです。村で何人かで組になってみんなで採りに行くんですけども、そうやってみんなで採って、年齢構わずにみんな頑張っ採ったのを、全部計量して、全部平らに分けます。平均に、みんな。そういう伝統が基本です。

また、ちょっとこれも独特なんですけれども、焼畑というのが。私も学校で習ったのは、確か南米とかアフリカの話じゃなかったかと思っていたんですけども、日本にもまだ残っているようで。ここの場合はちょっと面白いんです。林業と密接なんです。伐採した山肌ですぐ植林するわけではなく、その間の3~4年を休ませる意味なのか、それとも有効活用なのか、どっちもなんでしょうけれども、その間に冬の保存食であるあつみかぶ(赤かぶ)を植えるんです。昔は、そばとか大根とか小豆とか、さまざま育てていたんですけども、今は、ほとんどかぶを植えています。かぶを植えて2~3年したら今度また木の苗を植えて、50年後にまた同じ土地に、みたいなサイクルを続けています。

山焼きと書いていますけれども本当に山を焼くんです。刈ったあとの山肌って、やっぱり栄養がすごい、落ち葉とかでたっぷり蓄えられているので、どんどん草が生えるんです。日当たりが良く

なって。背丈の倍もあるような草を、焼く前の1週間前ぐらいに根っこのほうから全部手で刈り取って。これは、一番暑い時期じゃないと良くないんです。こうやって山を焼いていって、病気だとか虫類、害虫類だとかを退治するという意味と、あと、残った灰が肥料になるということで、こういうふうにして山を焼きます。上のほうから点火しないと、山火事になるので、超危険。まだくすぶっている、地面があったかいうちに種をバーンと、均一に手でバラバラバラとまいていきます。で、秋ぐらいになって収穫するんですけども、もうこういう斜面で収穫するので、片手に包丁を持っているんです。で、片手に腰の袋を付けて。転んだりすると危ないので、体験したいと言われても、ちょっと生命保険をかけてきてください、ぐらいのものです。

でも、地面の条件とか日当たり次第でみんな横並びで育たないので収穫期が長くて、だいたい雪が積もる頃まで、大きくなったものから採っていくみたい。で、これを冬の保存食、冬の貴重な野菜として食べます。たまにマクドナルドとか行きたいなと思うんですけども。だいたい定番のごはん類というか、山で採れるもの、川で採れるものなんかは、こんな感じで。クマとかも、もちろん食べますが、赤かぶは甘酢漬けにしたり、



鮎は川で採ったりとか、ヤマドリはマタギの人たちが秋のうちに採るとか。栃餅の栃の実も、山で採ってきて下ごしらえして作るんです。ちょっと異色なものでは「もらった鮎」というのが書いてあるんですが、これはどういうことかという、海まで19キロ、30分もかからないぐらいなので、海との物々交換がすごい大規模に行われる、かなり独特なものです。

マタギたちも、生きていくための、支え合う人たちのために山に入る、という感覚なのでしょう。お金に換金するのではなく、「鮎をあんなに頂いたから、今度はクマを返さねばね」

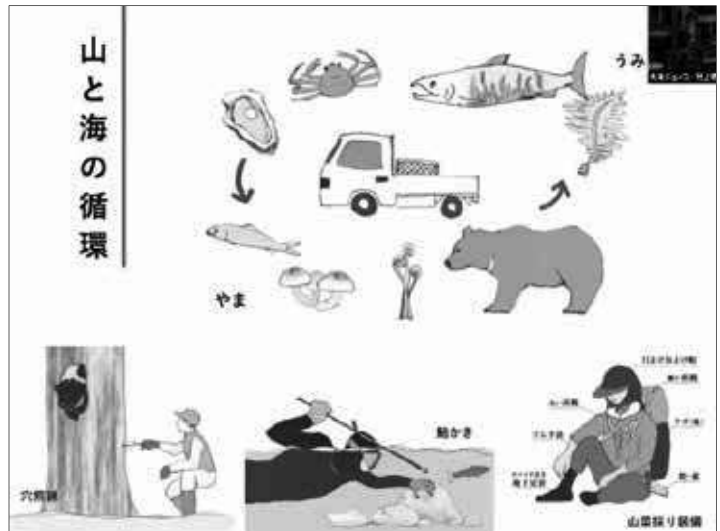
みたいな、そういう季節季節でのやり取りが、軽トラで運ばれてやってくるんですけども、すごい潤うんです。鮎とかも何十匹、ボンともらって、今度、クマをドンとあげたりとかみたいな。その鮎もここ村上市は塩引き鮎が有名なんです、山とはいえ塩引き鮎にして軒先にかけておいたりするんですけども、そうすると、冬は雪がすごい積もっちゃって2階の屋根まで上がってこられちゃうから、テンとかイタチとか、肉食小獣が鮎をねらって登ってきちゃうみたいな。だからそいつらに食べられないように、その前に引き上げなきゃいけないとか、そういう対野生との駆け引きというのは、すごく日頃、行われています。

穴熊猟というのは、冬眠しているクマを獲る猟で、たまにやるんですが、こういうことは雪のある今の時期が最盛期です。鮎も友釣りじゃなくて、潜ってそのまま引っかけた獲るとというのがスタンダードなやり方です。山菜採りも、全然かわいらしくない格好をして行くんですけども、本当になたとかを持っていきながら、やぶを刈り刈り、道なき道を行くみたいな。私には道には見えないんだけど、地元の人、「道がそこにあるだろう」と言うんですが、私はまだそこまで至れなかつたりします。でも、こういうふうな食物とか恵みの循環というのは、すごいありがたいし楽しい、暮らしの楽しさの一番の要因かもしれないです。

灰に関しては、かなり独特だと思うんですけども。灰って、今までは価値がないものだと思っていたら、ここでは、ものすごく大事なもので。歴史を調べると、灰を売る店がかつてあったぐらいに、いろんな暮らしに使われる、用途やニーズがあったものようで。この村はすごい灰を大事にするし、使い方もさまざまなので、広葉樹と針葉樹を分けて炊いたりします。広葉樹の灰汁はアルカリ性が高く効果が見込めて質も高いと。だから食品に使ったりとか。保存食などにも使うし、あと、この機織り、分かりますか、こういう布を織っているんですけども、これも灰で煮ます。いろいろ、衣食住、全部使っている感じです。

私が今織っているしな布というのが、本当に樹皮から、樹皮の長い繊維をそのまま糸の太さに割いて織り上げていくという、本当に原始的な織物なんです。文献によると縄文時代とかの縄文土器のあの縄はシナノキの皮だったんじゃないかというぐらいなことを聞いたことがあって。なるほどなと思うほど、シナノキの皮、樹皮というのはすごく強くて、漁網に使われたり、いろいろ暮らしの中では道具としてすごく頼もしいものだったけれど、今では日本でもこの村を含めて3集落、3つの小さい村でしか、織られていないものです。ものすごく効率が悪いので。

大まかですが、作り方を説明します。まず、山に自生しているシナノキを皮剥ぎといって皮を剥ぐんですが、ここはすごい斜面が急なので、切り倒してから剥ぐ場合もあるけれども、こういう斜面を利用して、上に登り



ながら木を剥いだりするんです。村で決められているのは、年に3日間だけ。サスティナブルというのをすごい昔から大事にしていたんです。自分の持っている山とかだとそんなに細かい決まりはないですが、村共有林というのがありまして、そこだと3日間、どんな嵐だろうが地震だろうがなんだろうがその3日間しか剥いじゃいけないという決まりを村のみんなで作ってそれが伝統です。

その皮を背負って担いで帰ってくるんですけども、この縄1本で担いで帰ってくるんです。道端の車が横づけできないいい場所だったらいいんですがそれでもなくて、結構、沢の絶壁を登っていったりした上の山の平とかにあたりするので、ここの人たちすごいなと思います。野生の人たちみたいな印象を初めて見たときは受けました。

その持って帰ってきたのを干したりなんだりした後には灰で煮るんですけども、灰の量が半端なくて、この樽全部使います。この樽もひと冬分ぐらい



ですかね。こうやってぐるぐるっと巻いて、ドラム缶でだぶっと煮る。それを、灰だけ、しかも広葉樹なら広葉樹、針葉樹なら針葉樹の廃材とか、もちろん薬品も使わないで、その灰だけで丸二日煮続けて余分な繊維以外のものを落とします。煮たら木の皮がちょっと昆布みたいになるんです。これは一層一層はがれるんですけども、これが大元の糸の材料です。この昆布状になったものはリグニンという成分が溶け出して茶色くなっているんですが、これをぬか漬けした後には川で洗ったり。「おばあさんは川へ洗濯に」です。まずこの時期はみんな川にいます。ザブザブ皮を洗って、それで糸の細さに割いて、割いた糸をひたすら長い1本の長い糸にねじりつけていく。それを糸車でよりをかけて強さを出して初めて織機にかけられるんです。

昔は編布とか、機織り機がない時代はお手製の簡易的な機織り機でやっていたんですけども、こういうかにも機織り機みたいなものは40年前ぐらいに入ってきたぐらいで、その前は本当に原始的な織り機という機織り機で織っていました。今、このしな布というのは何に使われているかという、高級志向の着物の帯がほとんどですかね。もともとは、栃餅に使う栃の実を担いできたりとか、山で焼畑をやったときに小豆を収穫して、その豆を担いで帰ってきたりとか、そういう道具としての袋だったり。あとは、冬寒いので、布団の下にこもつ布団と言って、わらをすぐった葉っぱの部分をハイジの布団みたいな感じにする、マットレスのような部分のカバーにしてみたりとか、蚊帳にしてみたりとか、今とはかなりかけ離れた使い方をしているんです。蒸し器とか。蒸し器のもち米を包んで蒸すときの袋なんかもよく使われていました。そういうものが年貢だとか借金のかたとかにも利用されるぐらいに、貨幣の代わりだった布でもありました。

今、高級志向とは言っていますけれども、私がここに移住してきた当初、一番若い従事者は70代でしたし、正直なところを言うと、仕事としては全く成り立っていないぐらいの金額で買ったたかかれていたということが起きていまして。結局、それが何を招いていたかといったら、文化の絶滅を、ほぼ首の皮1枚つながっている状態というんですか。今のばあちゃん方がやらなくなったら、もう本当に終わってしまうという。

また、最近では着物の帯ばかり織っていたので、着物業界が盛り上がっているかといったらそうでもないかもしれないけど、でもそこにもものすごく依存している状態だったので、共倒れが起きそうな。さらに生産量もないから認知も進まないんです。こういう布が存在していることも、私も移住してから知ったぐらいに知らなか

ったので。今はたぶん、この価値観を変換しなきゃいけないターニングポイントなんだろうなと思いつつ、この文化の継承に手を出したら大変だというおっかなさみたいなのもあって、初めの2年間、3年間ぐらいかな、技術はもちろん教えてもらうけれど、これを続けていく覚悟みたいなのには、なかなか至れなかったです。

工房は、空き家がちょうどできたので、そこを借り上げて改装していたら、ばあちゃんたちも、やるなら手伝うぞとってわらわら来てくれたりして。改装しながら道具を直しながら使えるようにして

いったんですけども、そもそも、物が面白くなかったり良くなければ、布がいくら良くて商品になる段階で魅力的じゃないものになってしまうのがまずいなと思っていたので、これは試作だったり商品化したものなんですけど、こういうことを、最近では、機を織りながら作ってみたりとか。

あと、これはアトリエ縁さんなんですけれども、建築とのコラボレーションを最近させてもらいまして。これは、建築部材、部材の代わりというんですかね。床の間の装飾として、銘木ではなくて木の布で装飾を試みたらどうかというお話を頂いたので、用途が、力いっぱい使うものでないのであれば、思い切り装飾ができるという。私も、こういう機会がなかなか今までなかったもので、今まで見たこともないような織り方をしてみたい。これは、もう間もなく納入なんですけれども、こういうことをさせてもらったりしています。



コメント&質疑

岩佐: 最初にお会いしたときは、まだ確か氷見でアーティストをされていた頃だったので、その後マタギと結婚したらしいという風のうわさを聞いていました。まさかこんなことになっていようとは。今日はどちらかというと海側の話が多かったけれども、実は山側にも脈々とした人のつながりや文化があるということや、そこで、令和の時代にこんなことが起きているんだという驚きもありますが、それがすごく実はうまく更新される可能性がまだあるという、大変興味深い話です。

陣内: 全然知らない世界で、こんなに重要な、生きている世界があるんだなというのを初めて知って、感動しました。いろいろなことをもっと伺いたいと思うんですけども。マタギの方々が獲物をみんな分かち合うということで、共同体としての結束、すごいんだろうなと思うんです。山林もあるだろうし、狩りをするのにいろいろそういう山に入っていくんだろうけれども。それと焼畑、共有林というお話もありました。Google Earth で見てみたら、とんでもないですね。どこに集落があるのかなと思って。なかなか出てこなくて、家なんかじゃないじゃないなんて思ったら、神社、あれ、せんげん神社っていうんですか。あさま神社っていうんですか。

大滝: 浅間（せんげん）神社です。

陣内: 浅間神社。それを入力したらグーッと出てきて、集落が何十軒かありそうな。他、全部森じゃない。びっくりしまして。そういう条件の中で営みがあって、マタギの狩猟と、それから焼畑農業ということなんだけれども、土地の所有というのがどうなっているのかなと思って。例えば、よく最近、もう近代になって、みんな私有制になって、土地所有でがんじがらめになって。だけれどもう一回、コモンの良さを取り戻そうとか、

共有地、入会地とか。そんな議論をずっと都会の人たちはやっているわけだけれど、この人たちの土地の所有ってどうなっているんですか。

それと、こういう世界では、一部の有力者がいたりして、お金持ちだったり、あるいは庄屋みたいなのがいて、まわりにその他の人がいるのかとか、社会の階層とか階級が、一体どんな感じで営みがあるのかなと、まず聞きたいです。

あとは、海と山の交流という話が、ものすごく面白かったんだけど、それは、今は軽トラとかで動けるから可能かもしれないけれども、かつては本当に孤立しちゃっていたのか、やっぱり海と山の間になんらかの方法で交流があったのか。ここの経済って外部とつながりを本当に持っていた、持ってやっていたのか、それとも、クローズドだったのが、近代に少しは開けるようになってきたのか。さっきの帯を織るというのも、外部とつながっているからできるわけですけども、その辺をちょっと伺いたいなど。

大滝：まず、海と山の間からつながりからですが。今は道ができたのでなくなりましたが、道がなかった時代は川を使っていました。川をせき止めてダム状にして、そこに、山から切ったまき材とか木材をためておいて、それを一気に、せき止めているのを切って流して、また切って流してというのを海まで続けて。で、その木で何をするかといったら、海で塩炊きをするんです。なので塩の木と書いて、このあたりではしょっき、塩木流しというんですけれども、そういうふうにして木を海側で塩に変えて、それをお金に変えてという、そういう川を使った流通があったんです。

陣内：へえ。それは感動します。それは素晴らしい。もっと詳しく、また教えてね。ベネチアのキンターランド、奥のほうで、やっぱり木材、いかに流しをやってたんだけど、その上流域はダムを作って、今おっしゃったとおり、ためておいて一気に放流して遠くまで流していたんです。

大滝：同じですね。当時は一番楽だったんでしょうね。それから、土地の所有なんですけれども、40年ぐらい前までは、ここのかいわい全部が村の共有林だったのを山分けをしまして。各家でくじ引きで所有林、所有山を決めて分けたんですけれども。でも、今おっしゃってくださったのですごい違和感というか、ここ独特だと思ったのが、ここの村では、今でも山は大切な財産なんです。なので、どここの木からどここの沢までが自分の土地なんだというのを、みんなが、まだちゃんと分かっています。

そういう意味では、逆に意識が強過ぎるので、下手に開いて、観光客なんか寄せた日には、もう財産が脅かされるのと同じ意味だから、観光には向いていない村とか地域だなと思います。それは、逆に山がまだ生きて使われている証拠でもあるんですけれども。また、分けた山とは別に、村の共有林というのが存在していて、それはみんなで手入れをしながら、シナノキを育てたりとかワラビを育てたりとかしています。

あと、社会の階層は、ほぼないです。もうコミュニティーを見ているというよりも、みんな、おのおのが山を見て育っているから。暮らしもそうだし。なので、自分たちは山と比較して弱いというのを、全員、みんなが身に染みて分かっていることだと思うので。だからその分おおらかですし、そこら辺のヒエラルキーみたいなのをわざわざ作るのも、あんまり意味がないという感じを受けます。

陣内：神社のお祭りとか祭礼のときは、神主さんをどこから呼ぶの？

大滝：呼びます。だけど、海側に神主さんがいっぱい住んでいる村があって、そこから来てくれたりとか。あと、男衆のマタギのクマ祭りなんていうのは、完全に内々の神事なので、神主さんも呼ばないで男たちだけでパフォーマンスをしています。

岩佐：もう、いちいち驚きしかないですね。本当にここは令和なのかという感じです。

福井：いや、本当にすごいショッキングでした。面白かったんですけども。集落の人口が43名と伺ったん

ですが、今の神主さんじゃありませんけれども、何かテンポラリーに集落の営みをしたときに、外から人がやってくるという、そういう外との関係性というのがあるんじゃないかと思うんですが、神主さん以外に、そういうのってあるんですか。

大滝：あります。例えば、病院の送迎をしてもらったりとか、移動販売車も週に1回、2回、来てくれたりします。土地の性格上、視察だとかそういう、いつか、観光化しようとするムーブメントがあったようなんですけども、体力があってこそその観光化なわけで。たぶん、そこら辺では、私も観光化しないほうがいい向いていないと思うのは、それぐらいに結構大変、みんな、おばあちゃん、おじいちゃんばかり大変みたいなどころと。あと、どこまで開くのかという。というのは、私1人では、もちろん決められないですし、というデリケートな部分。だけど、閉じ切っても生きていけないので。なので、本当に顔が割れているやり取りがほとんどですかね。

福井：少し田んぼがあるようなんですけども、それは集落で全部やっていらっしゃるんですか。

大滝：いえ。個人の土地でやっています。だけど、手伝い合ったりしますけれども。でも、田んぼもわずかです。

福井：でも、この周辺でいうと土地は多いほうですよ。この地形を見ると。

大滝：そうですね。昔は、もっと人数がいたので。もう村の外から、飢饉なんかが起きれば、本当に山を越えてお米を買いにいかなきゃいけなかったという、そういう山道も今、残っていますけれども。なので、一見サステイナブルのためなのかもしれないけれども、山開きって、シナノキでもそうだし、ジネンジョとかヤマユリとか、そういう食べ物にまつわる山開きというの他にもあって。たぶん、それは、みんなで生き延びなきゃいけない目標があったからなんだと思います。

福井：なるほど。ありがとうございます。ちょっと行ってみたいくなりました。

中橋：すみません。一つ。すごい衝撃的だったんで、一言だけ。イタリアナポリから拝聴しています。今、お話を聞いて、鳥肌がずっと立ちっぱなしで。すごいところが日本にもあるんだなというのを感じたのと、もう一つ、実は私はここ数年、南イタリアのカラブリア州の、すごい山が険しい地域があって。1960年代まで道路がなくて、コモンスみたいな村の生活が残っている地域があって、そこをずっと、調査というか興味本位で子どもたちも犠牲にせずと通っていたんですが。そこも、草を織って布にしたり、放牧をするんですけども、海側のほうはすごい海賊が来て生命の危機があったので山奥に逃げて、山奥にいるもんで平地がないから、ヤギとか斜面を20匹ぐらいしか飼えないような土地でみんな自給自足の生活をして、本当に、まさに話を聞いていて、ずっとカラブリアの村の人たちのことばかり思い浮かべていたんですけども。

あと、また、道路ができていなくて近代化の影響を受けていないからこそ、そういう文化や共同で生きていく精神みたいなのが村の人たちに残っていて、イタリアと日本、すごい遠いんですけどもよく似ているなど思いました。質問ではなく感想ですすみません。あまりに衝撃的だったんで、ちょっと一言、感想を言わせていただきました。

私は、陣内研究室の出身で、陣内先生が南イタリアを調査し始めてちょっと後ぐらいの、レッツェの調査辺りから南イタリアの調査をしたりして、そのまま留学してそのまま現地で結婚して。マタギのような人とは結婚しなかったんで、今ちょっと聞いていて、悔しいなとちょっと思ったりしたんですが。普通のイタリア人と結婚したのでそういう素晴らしい体験ができていないんですが、今、それを求めて、山奥に通っているんですけども。そのままイタリアに住んで、いろいろな過疎地を調べたり、今年に入って、初めて論文を書いてみようかなと思ったりして進めています。

陣内：日本で、各地で空き家再生で、分散するホテルという、アルベルゴ・ディフーズってイタリア語なんだけれども、それが日本でも紹介されて、あちこちで話題になっているけれども、中橋さんはその日本への紹介者なんです。新潮社から、そういう内容の本を森まゆみさんと一緒に出版しています。

中橋：そこに、ぜひ行ってみたいと思います。本を持って行きますので。

大滝：ぜひ。お待ちしております。

中橋：はい。お持ちします。どうもありがとうございました。

岩佐：やっぱり、あれですね。オンラインの、今日はいいところですよ。こんなこともなければ、大滝さんと、なかなかこういうお話をするチャンスもなかったし、それと、イタリアがつながっちゃうとかっていうの、本当にオンラインのすばらしいところですね。

陣内：あと、氷見で伝馬船のことをやっていたと言ったけれども、中村政人さんって、藝大の先生とはつながっているんですか。

大滝：はい。一緒にやっていました。

陣内：実は、彼、東京ビエンナーレを一所懸命、今やっていて、僕らも引っ張り込まれて。氷見でやった伝馬船の小さいやつを神田川で流そうということで。エコ研の高村先生とか高道さんとか、みんなで応援してやっているの。今、東京でやるのが大変で。水上のいろいろの管轄とか、屋形船の人たちが文句を言うとか。やっぱり中村政人さんと関係されていたんですね。

ディスカッション

岩佐: 今日の話は、それぞれ個別にテリトリーオについて語ってもらつつもりが、実はつながっていたりとか、共通点がたくさんみつかりました。われわれはどうしても理論的に、リソースが重なったとかレイヤーとか言っているんだけど、そこでどういう人が生活をして、いかにそのリソースを集めながら魅力的な生活、特徴的なものを作り出しているかというところが聞けて、非常に興味深かったと思います。

陣内: 今、岩佐先生が言ってくださったとおり、頭から考える理論じゃ駄目なので。各地で自ら汗を流しながらいろいろな人たちと一緒に面白い試みをやっているところから、一点突破でいろんなものが見えてきて。しかもそれが普遍性をもっているから、横へつながっていくという。北山さんがさっきコメントで、土地とかネットワークというのを全く切り離してやってきた近代建築の在り方が全然駄目で、そうじゃない建築の在り方、という話をされていたけれども、こういう活動がもう一回地域の可能性とか力を掘り起こして横へつながっていく力を持っているんで、こうやって話題が通じていくというのは本当にうれしいですし、この路線は間違っていないなと確認できてうれしいです。ありがとうございます。

岩佐: どうもありがとうございました。福井さん、いかがでしょうか。

福井: 本当に今日はそれぞれ全て刺激的で、いろんなことの発想が生まれました。テリトリーオを考える視点というので、先生方あるいは発表者の方からいろんなキーワードを頂いたんですが、まず陣内先生から、歴史軸と空間軸というお話がありました。それを踏まえた上で、今日の話の共通項を考えていくと、エネルギーと資源と文化みたいなことがあるんじゃないかと思っていまして。エネルギーは、最初の玉川上水の水のエネルギーとか、あるいはあわらの熱エネルギーとか、そういう地域を回していくための基本的なものをどうやって効率的にあるいは活用していくかということがあるんじゃないかと。それから資源については、木材のこともありますし、それから水産業とかそういうもの全部含めてなんですけど、そういうものを工業とか技術とかでどうやって回していくかという、その独自性が地域ごとに違うんじゃないかということは感じました。それを文化として、建築も含みますけれども、工芸とか食とか漆器とか和紙とか木工とかしな布とか、そういうのを全部含めて、文化として独自性が高まっていくところにテリトリーオの全体像がつかめるんじゃないかなという感じがしています。

それを回すエンジンとして、建築も含む普請とか産業とか人の交流とか、最近では環境というものを、どうやってそこに位置付けるかということだと思んですが、そんな形でテリトリーオを考えるいろんな視点が、今日出てきたのは非常に面白かったと思っています。さらには山熊田のような小さいスケールでの回し方がどんどん展開して行って、日本全国あるいは日本を飛び越えて海外ともつながっていくという、テリトリーオのスケラブルな感じというのは、今日本当によく見えたので非常に面白かったと思って、これを元にもう少しテリトリーオに関する思考を広げていけばと思っています。本当にありがとうございました。非常に面白かったです。

岩佐: どうもありがとうございました。本当はもっと時間をかけていろいろディスカッションできたら良かったんですけど、そろそろおしまい時間になってしまいます。やっぱりこの1年間、どこにも行けなくて、すごくあちこち行きたいという気持ちで、今日のお話を聞いてますます高まったというか、ぜひ、コロナが明ければ、こういった多くの実践の方と学びながら、今日、われわれがやっているテリトリーオの話を展開できていったらいいなと感じました。

さっき福井先生もおっしゃいましたけれども、いくつか共通のキーワードというのがじわっと見えてきたと

いがあるもので、特にこのエネルギー、資源、文化。特に僕はエネルギーの観点が今まであんまり気付いていなかったのですごく新しい気付きがあったと思いました。どうもありがとうございました。

時間なので、全体を締めなきゃいけない感じなんですけど、何かもし言い残したこととか、一言だけ、絶対これは言っておきたいとかということがございましたらいかがですか。本当は、いろいろ当ててお話を伺いたかったんですけども、ちょっとこんな時間になってしまいましたので。よろしいですか。

小島：一言だけ。今日のこういった小さな実践って、とっても大切で、陣内先生がおっしゃっていた歴史軸って、実は未来にも延長できるわけであって。シューマッハーが『スモール・イズ・ビューティフル』という本を書いていますけれども、スモール イズ チャレンジングなんで、たぶんこのテリトリー研究をやっていくときに、こういったさまざまな地域のテリトリーに関わる地域視線の情報を集積していくというんでしょうか、データベースなのか分かりませんが。そうやって蓄積していくことがとても重要で、そういったスモール・イズ・チャレンジングのモデルの中から、いろんな新しい社会像なんかも見えてくるので、たぶん、この地域情報の集積というのは、テリトリー研究として続けていったほうがいいかなと思います。それをデータとして残していったほうがいいかなと。岩佐先生がおっしゃったように、いろんな関係性みたいなもの、概念みたいなものがおのずと浮き上がってくるのかなと思いました。

岩佐：そうですね。単純に言いつばなしにするのではなくて、われわれのこういうアチーブメントをまとめていく作業は必要になるかと思います。ありがとうございました。いよいよ定刻になってしまいましたので、最後、締めの言葉というか、閉会の辞を、昨年までセンター長をお務めいただきました福井先生にお願いしたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

福井：今日は本当に長い時間でしたけれども、第1部の6名のご発表と、それから第2部の4名の方の日本全国からのご参加、本当にありがとうございました。小島先生からもお話がありましたけれども、こういうディスカッションとまとめをこれから進めていきたいと思っていますので、ぜひこれからもよろしく願いいたします。今日ご発言なかった先生方も、学生の皆さんも、それぞれ関わっていらっしゃるプロジェクトとかフィールドについてこういった形でどんどん共有していただくと、皆さんにとっても意味が広がりますし、われわれにとってもいい財産になると思いますので、これからもぜひ交流を続けていきたいと思っています。今日は本当にありがとうございました。

4 講演記録

「今、真の都市再生とは？－自然・歴史・コモンズの視点から」
第 46 回法政大学大学院まちづくり都市政策セミナー基調講演

「今、真の都市再生とは？－自然・歴史・コモنزの視点から」

第46回法政大学大学院まちづくり都市政策セミナー（エコ地域デザイン研究センター共催）

「コロナ、都市の危機と再生を問う」基調講演（2021年12月18日）

陣内秀信*1 小島聡*2

皆さん、お早うございます。久しぶりにリアルでこういうセミナーが開催できること、本当にうれしく思います。私も4年前まではデザイン工学部にいたのですが、その前は小金井の工学部にいて、その頃、全学の横断的なセミナーとして大学院まちづくり都市政策セミナー、途中で名前が1回変わったと思いますが、それに参加していました。学部代表で、よく参加して文系の先生方と熱く議論したのを懐かしく思い出します。これが継続して、法政の一つの大きな柱、顔になっていて、こうしてお呼びいただけること、大変うれしく思います。

テーマが非常に大きいので、基調講演を依頼された時に、果たしてどんな話ができるかと思ったのですが、振り返ってみれば、こういうパンデミックになる前から、もう現代都市、巨大都市文明にさまざまな陰りがあり、矛盾がたくさんあり、これをどうやって乗り越えるかという議論がいろいろ行われたと思います。しかし、それを社会的な動きにして新しい方向へ踏み出すのは、日本においては容易ではありませんでした。でも、こういう事態になった今、逆転の発想でこれを機会に、思いっきりそういう発想で皆さんと議論していければと思います。

私も長く生きていますと本当にいろいろな時代の変化を自ら体験してきました。学生時代の60年代末には社会の矛盾に対し若い世代が問題提起をし、世界中で変革への動きが起こったわけです。しかし、日本の社会はなかなか変わらない状況もありました。その中で留学の道を選んだのですが、私はイタリアという国を選んだのは、近代化とか産業化とか、そういう世界を大きく変えていったヨーロッパ、アメリカの動きとはいささか違う、歴史があり、コミュニティがあり、魅力的な生活空間があり、自然が生きている、そういう国で、どのように次の時代を考えているのかを勉強しにいきたいと思い、イタリアを選びました。

図らずも、イタリアと日本は結果的には非常によく似た面がある。石の文化と木の文化で全然違うように見えますが、国土の大きさやあり方、自然が変

化に富んでいる。そして文化も厚い、人々の関係も密度が高い。美しいものへの憧れ、おいしいものへの貪欲な追求が非常に似ていて、これは日本がこれから進むべき道を手探りでいろいろ検討していく時に映し鏡にして見ていくとヒントになることも多いのです。逆に、日本からイタリアが学ぶこともたくさんあります。そういう関係でずっと並行してイタリアと日本を比較しながら勉強してきました。

では、早速いきたいと思います。まず、いろいろキーワードを並べてみたのです。今日登場するキーワードがたくさんあり、何となく話の方向性を想像していただけたらと思います。タイトルは少し大きめに「今、真の都市再生とは？－自然・歴史・コモنزから」として、それに関係し今日、話をしたいと思っているものがアトランダムに並んでいる。こんな感じでいきたいなということを察していただければと思います。

2020年春、パンデミックになったニューヨークに関するメッセージの画像が私の手元に届きました。中国から広がったCOVID-19のパンデミックはイタリアを襲い、それがだんだんヨーロッパ全体に、そしてアメリカにわたり、最大の悲劇的な状態になった頃のニューヨークですね。象徴的でした。早速、その2020年の4月か5月に、アメリカの友人の都市計画の先生からこれが送られてきて、衝撃を受けたのです。

ニューヨーク・タイムズに発表された記事についていた二つの画像なのですが、その一枚が、オランダ人が入植する前の、1600年代の初めの頃を想定したマンハッタンの復元図です。都市が生まれる前の一面森で覆われた原風景です。もう一枚は現代のマンハッタン。これだけ高層ビルが並び、ぎゅうぎゅう詰めに都市が開発され、人間が自然を改編して都市文明をつくってきたことを示しています。まさに世界のグローバリゼーションを牽引してきた巨大都市。いろいろな矛盾があることは分かっていたわけですが、この際、原点に立ち戻って、都市文明とは一体何だったのだろうか、メガシティというのはど

うなんだろうということを根本的なところから問い直そうとした記事です。非常に感銘を受けました。

新自由主義の過度な競争。これが都市空間を貧しくしたり、市民が集える自由な空間がなかなかなくなってきてしまう、そういう矛盾がたくさん出てくる。また、公益性や公共性にどうしても力が及ばなくなってくる。パンデミックの渦中では、そうした反省が生まれ、過去には19世紀末から20世紀初めに公衆衛生が重視され、都市に緑地を生み出そうとか、田園都市を作ることが試みられたたことを再評価する動きが専門家の間でも出てきました。

槇文彦さんという偉大な建築家がいらして、「アナザー・ユートピア」という論文を建築の雑誌に発表したのですね。非常に感銘をみんなに与えました。彼はニューヨークに長くいたのですが、都市の中で思い出す、自分にとって意味のある空間は公園や広場だったということです。そこに時代を越えて安定性があり、自分の思い出がある。そこにこそ人が集う、賑わう、交流する、遊びが与えられるということで、オープンスペースが非常に重要であることを訴えました。こうした彼の問題提起に基づき、異なる世代のいろいろな専門分野の人たちがまた論考を投稿して本が出たのですね。こうした動きは、時代をまさに先取りしていたと思います。その後、パンデミックの間にニューヨークでも緑地、公園、水辺の空間などが再評価されるようになったからです。

パリの事例が有名です。もう20年以上前から歩行者中心に変えていかなければだめだ。車を制限しようということで、このCOVID-19のパンデミックになる直前に、第2期の段階に至るイダルゴ市長、今の市長ですね。この間、東京オリンピックの閉会式にきました。彼女が非常に熱心な環境派で、「15分都市構想」を打ち上げ、その後パンデミックになるなかで、その考え方が、今後の都市づくりのモデルになると大きな注目を浴びています。

バルセロナ市ももう10年以上前から車を制限して、市民のためのオープンスペースを取り戻そうということを積極的にやっているそうです。最近、都市づくりの分野でも、オンラインでいろいろこういう講演とかレクチャーが多くあり、新たな情報が次々に紹介されています。

そもそも「都市再生」という言葉ですが、私が自負しているのは、この言葉を割と早い段階で使った1人ではないかということです。自分はそう思っています。実際、『イタリア都市再生の論理』は1978

年11月に鹿島出版会から出したのですが、これは実は羽仁五郎の『都市の論理』からインスパイアされて付けた書名です。彼もフィレンツェ、イタリアを扱ったわけです。この『イタリア都市再生の論理』の前に『都市のルネサンス』（中公新書、1978年5月）も出していました。イタリアに留学し学ぶなかで、まさに当時のイタリアが「都市再生」を目指していると自分自身、認識していました。

都市再生は日本でも非常によく使われるようになったのですが、完全に違う文脈で使われるようになりました。これは皆さん、よくご存じのとおり、内閣に都市再生本部ができた2000年代に入り、都市再生特別措置法もでき、特区という制度もでき、とりわけ都心の業務空間、あるいは商業空間の容積をよりアップして活性化させ、アジアの他の都市に対抗していくということです。これはだから、全然違う文脈に使われていて、自分自身で考えていたような本当の意味での都市再生が、日本でなかなか大きく展開していかないというもどかしさがありました。

そもそもなぜ私がイタリアのヴェネツィアに留学したかということですが、60年代、我々の若い頃、高校生、大学に入る頃、日本は高度成長の時代にありました。近代化・西欧化・工業化が夢を与え、あまり疑いもなしに進歩を信じ、突き進めた時代でした。しかし、60年代の終わり頃には矛盾がたくさん出てきたわけです。とりわけ公害問題が大きいですが、アメリカやヨーロッパでは、建築や都市の理論の分野でも、近代建築、近代化一辺倒でいいのかという疑いが強まり、60年代にすでに相当議論されていたわけです。日本は少し遅れましたが、そういう価値観が動く時期に、我々は建築を勉強していました。後から振り返ると、都市の近代化で失ったものとして、自然との対話、歴史との対話、人の関係（コミュニティ）。この三つがあるのではと思います。今日の私の講演のサブタイトルにもなっているわけです。それを探しにヴェネツィアに行ったのではないかと後から思いました。

ヴェネツィアに行ってみると、日本で受けていた教育とだいぶ違う。つまり、都市というのは、歴史的ないろいろな時代を経験して積み上がってできている、と考えるのです。今日、すてきなポスターをつくっていただいたのですが、これもヴェネツィアの中世のイメージです。そういうものを近代都市計画はあまり評価しないで、機能的で合理的で経済の発展のために新しい形につくり替える。そこに連続

性や個性をというの、なかなか出てこないわけです。しかし、それはおかしいのではないかとヨーロッパの人は早く気がついたわけですよ。60年代に、さまざまなアクションがあった。ヴェネツィアもそうした動きを生んだ都市の1つで、私はここを留学先に選びました。ヴェネツィアは水上に自然条件を活かし複雑に成り立っている面白さがあり、詳細な古地図を使いながらこの都市空間を読み解くという作業は非常にスリリングでした。



ヴェネツィアの古地図 1847年

小さなイタリアの町とも出会ったのは、後に自分自身にとって非常に大きな意味を持つことになりました。75年にちっちゃな、南イタリアのプーリアのチステルニーノという町と出会ったのです。丘の上にある素朴で、石灰で白く塗られた雪のような造形をもつ、本当に面白い町です。外階段が立ち上がり、袋小路も多い変化に富んだ空間は、建築を学ぶものには、一つずつ家を全部実測してみたくなるような魅力にあふれる町でした。しかし、当時は、近代の開発から取り残され、みんな若者は都会に出てしまい、残った中高年の人たちは高齢化している。田園



1970年代中頃のチステルニーノ

も肥沃ではあるけれど停滞した感じで寂しい。でも

ここには魅力があるなど感じていました。

そして、都市文明が大転換していく時期が当然くるわけです。都市は誕生から成長、発展、成熟、衰退へと推移し、滅亡してしまうものもありました。そして再生の段階を迎えます。右肩上がりにどんどん成長していく段階は、日本でももうとっくに終わり、こういう成熟、衰退。だから、次は再生が来なければいけませんよね。これをどうするかという議論があまりにもまだまだ不十分です。ここで重要なのは近代化、産業革命以前は、都市とその周辺の田園、つまり農地、山林なども含む。牧草地などもあるかもしれない。それが非常に一体となり、均衡のある発展をしていたということです。それをイタリアでは「テリトリー」というのです。それが経済的にも文化的にも共通のアイデンティティを持った一体感のあるエリアを形づくってきました。それが近代の論理、工業化の論理、資本の論理でどんどん壊されていく。そのスピードもどんどん大きくなった。

しかし、先ほどから言っているように、ヨーロッパやアメリカでは1960年代に転換点が訪れます。そして、70年代、80年代は日本もイタリアも、面白い動きを見せました。反省の時代であり、ポスト工業、さらにポスト・モダンといわれました。この70年代、80年代のイタリア、日本を比較しながら論じていきたいと思います。

日本は、ただ80年代中頃のバブルに入る頃から、また大きな経済発展の段階を迎え、そのバブルが崩れた後もグローバリゼーション・新自由主義に身を任せてきているわけですが、その限界が見えてきて、今、他の道をどうやって探したらいいかということが問われていると思います。ポストコロナでいろいろ反省も起こっている。

こうした流れの中で、大きな動きを生んだのが70年代前半のポローニャです。日本でも大いに注目されました。実は横浜市は革新系の飛鳥田市長の下で、田村明さんという後に法政でも教えてくださった都市プランナーが頑張っていました。横浜の人たちもポローニャに視察に行って、市民参加の都市づくりを学びました。当時のポローニャは市民のための都市政策を目指し、歴史と現代をつないでコンパクトシティにしていく。100万都市を目指そうと思えば目指せたにもかかわらず、それを意識的にそうしないで、適切な規模を保つことを考えた。そして資

本がどんどん展開して変容しつつあったヒストリック・センター、旧市街を市民のために取り戻そう、というかなり強烈なスローガンを掲げました。つまり、最初にお見せしたマンハッタンの高層ビルが建ち並ぶ競争社会の状況とは違う方向に行きたいというメッセージを70年代に提起したのですね。

この旧市街、市壁の内側のすべての建物が建築類型学の視点から見てどんなタイプなのか、どんな用途にふさわしいかを分析図示しました。



ポローニャのチェントロ・ストリコ 建築類型分布図

そして特に庶民、低所得者層が住んでいる地区に注目しました。取り残されて住環境が悪化し、スラム化も見られました。一方、中心部は派手にお金をどんどん投資して立派になっていく。同時に、郊外に拡大発展する。それを反省しました。郊外の発展のためのニュータウン建設の予算を旧市街の庶民地区へ振り向け、ここを再生していく。歴史的に形成された庶民の住宅地の再生にお金を投資したのですね。それが大成功しました。これこそが真の都市再生だと思います。



甦った古い町並みとコミュニティ

70年代は、本当にヨーロッパが人間のために都市を取り戻していく方向に舵を切った時代だと思います。私がヴェネツィアに留学してすぐに起きた73年

のオイルショックが大きかったのです。イタリアの大都市でも車を締め出す社会実験がしょっちゅう行われました。ローマでも、有名なナヴォナ広場でさえ車があふれていました。これでは魅力ある広場はできません。それを追い出し、居心地の良い素敵な公共空間になっていったのです。



車が溢れていたローマのナヴォナ広場
(提供：Prof.M.Vittorini)

70年代は都市文明の見直しの時期でした。ローマクラブの有名なレポート『成長の限界』が72年に発表されました。それから、シューマッハーの『スモールイズビューティフル』という本が73年。幸い私の建築史の指導教授、稲垣栄三先生がこうした新たな学問的な潮流に強い関心を持ち、ゼミで紹介してくれました。玉野井芳郎、清成忠男といった方々を中心に、「地域主義」という考え方が唱えられ、横浜では飛鳥田市長のもと、田村明氏が牽引するアーバンデザインの活動が展開しました。60年代からの公害問題はまだ解決していない面がありますが、開発追求型の発想から、環境の質を求める方向への大きな変化が見られ、今日のまちづくりへ繋がるテーマがどんどん掘り起こされました。

70年代から80年代前半にかけては、知的刺激に溢れる時期でした。様々なジャンルで興味深い著作が次々に発表されました。奥野健男さんの『文学における原風景—原っぱ・洞窟の幻想』(1972年)が大きなインパクトを与えました。この「原風景」という言葉がすぐれて日本的な近代化とか工業化への抵抗の論理だったのではないかと私は思います。そこから触発され、川添登の『東京の原風景』(1979年)、芦原義信の『街並みの美学』(1979年)、楨文彦の『見え隠れする都市』(1980年)といった、建築の分野での素晴らしい著作が生まれました。どれも日本の独自の文化、歴史、空間の特質を深く理解しながら次の時代を切り開く、そういう論考だったと思いま

す。「場所論」がそこから出てきます。イーファー・トゥアンの「空間」ではなく「場所」という言い方とか、シュルツの「ゲニウスロキ」(地霊)もそうです。そして、景観という問題が非常に重視されてくる。これが70年代です。

80年代はそういう70年代の試行錯誤が大いに身を結び開花した時期で、日本とイタリアが両方同時に、面白い都市の状況を見せました。私はイタリアで学んだことを活かし、法政で教え、東京のことも調べ始めていましたので、それを実感していました。多分80年代前半が、近代日本の都市の歴史の中で、昭和初期のモダン東京の時期と並び、人々が一番生き生きしていた時期ではないか。つまり、経済は横ばいが故に、大規模な開発が影を潜めていたのですね。だから知的に想像力を働かせいろいろなことを考案、提案し、実践する。規模は小さいが創造的である、そういう時代ですね。

イタリアもまさにそうだったのですね。70年代、政治社会的に不安定で、テロや経済破綻やストライキばかりだったのが、だんだん上向きになってきた。この時期に、大規模工業、大都市中心を抜け出し、家族経営の中小企業が頑張り、クリエイティブなデザイン、ファッションなどの分野が成長し、そして「第三のイタリア」と呼ばれるようになる中北部イタリアの中規模な地方都市が元気になった。量から質へ、地域の資産が活かされ、創造性、美意識・感性といったイタリアらしさが発揮される。こうした動きが全面的に開花したのが80年代でした。70年代はそこへ至る生みの苦しみの時期でした。中でもトレヴィーゾというヴェネト地方の町が本当に魅力的に輝きました。



トレヴィーゾのシニョーリ広場

もう一つ、当時有名になったのがコモという町です。ヴェルサーチというデザイナーが登場したりし

て、かつての養蚕、絹織物の伝統を生かし、新しいクリエイティブなセンス、技術によってファッション、アパレルの世界のトップを行きました。古い町並みも素敵なショップを演出するのに活かされる。いろいろな生産の場は都市周辺に散らばってネットワーク化され、distretto industrial (産地)という言葉が使われるようになり、まさにテリトリーをもう一回つくり直したと言えます。法政大学の岡本義行氏や稲垣京輔氏が、こういう研究をずっとなさいました。

一方、80年代の東京に目を向けると、やはり文化力を大いに発信しました。特に、渋谷を舞台にバルコという西武の文化戦略が登場し、若い人々がオシャレをしてはつらつと街路を歩き、町を回遊する面白さを生み出し、都市空間が楽しくなりました。程よい規模のよく考えられた質の高い開発が成功の秘密で、大規模開発ではないのですね。

原宿もそれに連動して動き始め、若者の町として世界から注目を浴びました。実は、オリビエロ・トスカニーニというベネトンのキャンペーンの広告を担った写真家が、原宿が大好きになり、若者たちが本当に奇抜な自由な服装をしていることに注目しました。



原宿・竹下通り 1980年代前半

ところが、ヒアリング、インタビューを何百人にもしてみると、誰も政治のことを知らない。あまりの関心のなさに驚いたようです。これが近未来の世界を先取りしているのではないかという警鐘も鳴らしました。とはいえファッション、ビヘイビアからすれば日本の若者のあり方は一つのインパクトがあるものでした。都市は舞台としての魅力を発信し、私も原宿の、こういう回遊性のある町は大好きで、いいなと思っていました。

80年代には、代官山のような山の手の緑あふれる

エレガントな都市空間が人気を集め、一方、芝浦のようなウォーターフロントも話題を呼びました。



話題を呼んだ芝浦の水辺空間 1980年代前半

こうして緑や水を取り込んだ新感覚の都市空間が生まれたのです。もう一つ、歴史的環境の発見・再評価も東京の中でも起こった。森まゆみさんたちの谷中・根津・千駄木、いわゆる「谷根千」の活動です。これは画期的でした。

私は欧米の都市計画からの呪縛から解かれるというか、東京を解説する調査研究を法政大学の学生達とやり始め、イタリアで学んだ方法を東京に応用しました。東京は凸凹地形で、自然条件が実に面白い。これは欧米の都市にはないことです。それを我々日本人がすっかり忘れていて、近代的な大規模な画一的な開発ばかりに目を向けていた。しかし、この個性的な条件、資産を活かさない手はないと考え、古地図を重ねながら町の成り立ちを理解し、そして歩いて体感する。このような町歩きは、かなりの人たちに面白い、価値があるということを確認していただくことになったわけです。後の「ブラタモリ」もそういうことで生まれてきたと思います。



古地図を活用した町歩き

ところが、80年代中頃に江戸東京ブームが来たのですが、同時にバブル経済に突入する。そうすると出版界の状況も大きく変わりました。あの PARCO も『「東京」の侵略』という本を出す。早稲田大学の尾島俊雄先生の『東京大改造』。こういう方向に行ったわけです。横浜や千葉が先にウォーターフロント開発に取り組んだのに対し、東京都は臨海副都心計画を慌ててつくりました。



臨海副都心開発基本計画の図 1989年（作成：東京都企画調整室）

でもこれはバブルがはじけて結果的には頓挫してしまっただけで、それ以来、実は東京都は大きい計画とかビジョンを描かなくなりました。自信を失い、描けなくなってしまったと思います。残念です。これは最初にして最後の立体的な都市のビジョン、図として示したのではないかと、今からすれば思います。バブルに突入して、再び経済最優先となり、せっかく芽生えたロフト文化なども蹴散らされ、高層ビル街になってしまった。ここで80年代後半にイタリアと日本、特に東京のいき方がだいぶ乖離してしまったと思います。

イタリアはどうなったかということ、80年代にヒストリック・センター（イタリア語ではチェントロ・ストリコ）、すなわち旧市街の再生を成功させ、それと同時に都市の周辺に広がる田園、農村、山林、海浜、すべてを含めたテリトリーへ関心を広げます。その風景の価値を大切に方向へ舵を切ります。ポーロニャで活躍していたチェルヴェッラーティという都市計画家が州のトップになり、そういうキャンペーンを張っていきます。

田園が高度成長期に犠牲になっていたのは、イタリアも日本も全く同じです。近代の流通革命、グローバルゼーションにより崩れた地産地消のマーケットを取り戻す必要がありました。80年代、「パエツジョ」、景観という言葉が重要なキーワードとなり

ます。日本でも景観法ができ農村も扱えますが、主には町、都市を対象としています。イタリアやフランスは、意図的に田園を対象としたのですね。歴史的な都市はもう十分に評価され、いい感じで再生できているという判断があったと思います。「文化的景観」の保全はユネスコが重要な課題に掲げていて、日本でも熱心に取り組まれています。

実は私の法政の研究室で退職する前、何年間かオルチャ渓谷というトスカーナ州の素晴らしい景観を持っている地域の調査を、現地の方々に協力してもらってやりました。ここは 2004 年に世界遺産に登録されたのですね。何でもない農村風景、田園風景が世界遺産になった。



オルチャ渓谷の田園風景

これはやはり人類の長い歴史の中で、画期的だったのではないかと思います。都市化することがいいことだ。都市文明が人間を幸せにするとみんな思ってきた。世界中、都市人口がどんどん増えているので、まだその動きは強いわけですが、成熟社会に入った国々では、そういう農村風景、田園の豊かさを評価する感性が生まれてきている。日本も本来、成熟社会に入っているのだから、共同歩調をとっていいはず。イタリアでは 70 年代はチェントロ・ストリコ、旧市街の保存再生だったのが、80 年代にはそれを達成し、次のステップでテリトリーオ、田園へと意識を向ける。景観法もアグリトウリズム法も同じ 85 年に成立し、86 年には重要な役割を持つスローフード運動が始まります。

トスカーナ州のオルチャ渓谷は、五つのコムーネ、自治体、基礎自治体からなっていて、いずれも小さな規模です。最大のモンタルチャーノでも人口は 6 千人未満です。連携しているからこそ意味がある。日本は市町村合併がどんどん進んでしまったこともあるけど、自治体同士が横につながり、ある広がりを持

ったエリアで、共同歩調でアクションを起こすのは、なかなか少ないですね。イタリアを見ていると、小さい自治体が連携して個性を発揮して、みんなで頑張り、イメージアップしていくというストラテジーを持とうとしているのを感じます。

同時に、地産地消を掲げるスローフード運動に象徴されるように、イタリアでは都市と農村の結び付きを甦らす動きが強まっています。テリトリーオの考え方ですね。オルチャ渓谷の町は、小さな村のように見えているものでも、かつて中世は独立した自治都市で、都市条例、statuto というのですが、これをみんな持っていたのですね。町の開発、建設活動を誘導し、制御し、同時に農村、農業の営みまで誘導していたのですね。耕作地に動物や泥棒が入って損害を生んだときのペナルティをどうするかとか、細かく自治の精神で規定をつくってきました。美に関するものから農業生産まで条例が定めているのはすごいと思います。実は日本の農村にも、その営みを方向づける様々な史料が残されているようです。

飯田市が歴史研究所をつくっていて、大変熱心に文書の解読などやっていますが、この間もシンポジウムがあり、日本の農村にも史料がしっかり残っていて、研究すればするほど、それなりの自治があったのが分かってくる。要は、そういうことをみんな忘れてしまい、都市化、さらには大都市への一極集中に走ってきましたが、そろそろ変えていかなければいけないのではないかと、ということです。

マックス・ヴェーバーはイタリアの都市を南欧型都市と見ていました。アルプスの北のドイツとかベルギーに理想的な商業都市が発達し、市民自治が育まれたのに対し、南欧では都市の中に地主が住んでいて、封建的要素がぬぐいされなかったという感じなのですね。そして近代化、工業化以後は農村的なものを残らせているのは遅れた形態と見られがちだった。ところが、いま 2000 年代に入ると農業的な性格、ルーラルな性格が身の回りにある、農村と都市がつながっているのは最大のアドバンテージになってきている感じがします。

スローフード運動、それをさらに発展させ、まちづくりを持っていったのがチッタ・スローの運動です。地産地消をベースとし、本物の歴史、文化を大切に。規模を大きくしない。すでに見たように 80 年代にイタリアでは中小規模の都市が魅力を発信し始めたのですが、そうなるとその周りに今度、田園が見えてくるわけです。大都市の周りでは田園

は見えにくいですが、中小都市の周りにはすぐ美しい田園が広がっている。そこへ関心が広がった。ファッション、デザインを中心にメイド・イン・イタリアの力は今も続いています、それに次いで今は農業生産物、畜産品がイタリア経済にとって大きな役割を演じています。そういうものがブランド化して経済発展、輸出の産品としても非常に重要になってくる。

こうなると小さな町が経済的にも元気になってきます。もともと田園と町の中が繋がっていて、城壁の中に農民がたくさん住んでいた。これが過疎化に伴い空っぽになってしまっていたのを、リノベーションして新たな用途に使う動きが広がっている。カステリオーネ・ドルチャの町で、ローマの建築家の夫婦が農家を取得し、セカンドハウスとしてリノベーションして使っている例を見ました。不動産の資料で、1階が馬小屋だったことが分かりますが、そこが台所と食堂に見事に転じている。



馬小屋を改修した台所と食堂

こういう古い建物をリノベーションして格好いい空間に蘇らせる動きは日本にも広がりつつあります。アグリトゥリズム（農場観光）の中には、優雅な空間を生み出し、ゆっくり田園生活を楽しめる場



優雅なアグリトゥリズム ビエンツァ郊外
(撮影：福留由莉子)

所が多い。

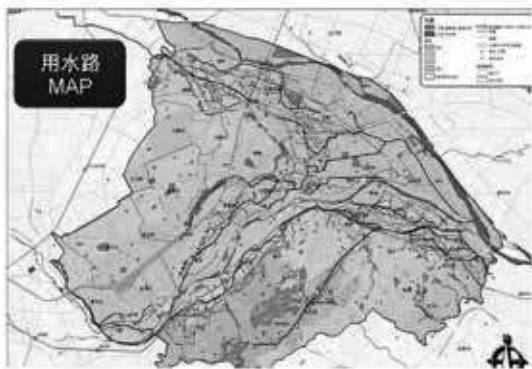
結果的には経済産業構造も少しずつ広がっている。デザイン、ファッションも相変わらず重要ですが、それにプラスしてワインやチーズ・生ハムの畜産品、そういう農産加工品がどんどん広がっている。中小都市と田園がその舞台で、伝統の技、人材、経験が生かされており、食文化というのは、実は都市と田園を結ぶ重要な鍵となるものなのです。食文化といえば日本のお家芸のはずなので、テリトリーオの一体感を生む上で、日本でもこれからもっと意識化して追求すべきものです。イタリアの人たちと話をしていると、キロメトロ・ゼロというキーワードがしょっちゅう出てきます。つまり、生産者と消費者が、ゼロキロメートルが理想である。新鮮な食材をたっぷり取り入れ、地元の郷土料理を美味しく食べるという、そういう文明的な転換の意識が、いま非常に盛り上がってきているのですね。

エノガストロミアという言葉が重要なキーワードになっています。イタリアのワイン文化は実に多様で、ブドウの木が少なくとも 2000 種はあるとのこと。それがフランスと全然違う。それぞれの地域に地のブドウの木がありますが、これがギリシア起源とかエトルリアからつながっているとか、そういう歴史的なイメージを膨らませてくれるのです。気候風土、風向き、地質などの自然条件、テロワールに加え、歴史、文化、伝統技術、共同体のありかた、風景の魅力など、まさに自分の地域、テリトリーオならではの特徴を熱心に研究し、個性豊かなワインづくりに取り組んでいるのです。ワインと食文化が結びつき、ルーラルツーリズムの大きな魅力にもなり、これがポストコロナには一番期待されるものだと言われているわけです。

東京の郊外の見直しも、だいぶ前から起こっているのです。次々に本を出す、友人の三浦展さんが『コロナが加速する格差消費』（2020年）という最近の本の中で、コロナ・パンデミックが都心から郊外への流出を促進するだろうと書いているわけですが、2000年代から郊外の価値の再発見は進んできたと思います。法政大学には、私達がつくったエコ地域デザイン研究センターという組織があり郊外研究も行ってきました。そこで、日野をテーマに法政大学と日野市が連携事業としてオフィシャルに3年間取り組み、長野浩子さんという、法政で頑張っていた研究者が日野の人たちと仲良くなり、様々な活動を推進してくれました。法政市ヶ谷キャンパスのす

ぐ近くに KADOKAWA 本社がありました。所沢に本体をだいぶ移し、武蔵野ミュージアムというのもつくりましたよね。『武蔵野樹林』という素晴らしい雑誌を創刊して、これからは都心ではなく武蔵野だというメッセージを彼らも発しているのですね。

日野は環境の意識がものすごく高い自治都市で、条例をつくったり、市民も熱心でした。しかし、水の環境だけに限定されていて、自分たちのテリトリー、地域全体の特徴を見ることがなかなかできていなかったのです。我々がそれをやりました。地形、湧水、古道、江戸時代の街道、そして神社やお寺、それからもう一つ、遺跡ですね。遺跡の分布も非常に重要です。それを重ねると縄文時代から人がどう進んできたのかも分かる。近世に、多摩川と浅川から水を引き、用水路がネットワーク状にでき、それまであまり農地になっていなかった沖積平野が豊かな穀倉地帯になるのですよね。水田が多い。これは日野の特徴でした。



日野の用水路網（提供：法政大学宮下清栄研究室）

農業政策が日本では弱かったため、市街化区域は宅地化せざるを得ない状況になり、東京都内の農地がどんどん減っているのが残念です。仮に水田が減ったとしても、こういう用水路は、環境用水として景観的な価値を持ち、人に憩いの場、あるいは環境教育を生むなど、あらゆる面で重要なわけですから、仮に元の役割を失っても、それが次の時代に大いに財産になるという、そういう志向性が必要です。もちろんポストコロナ社会においても、最も求められる貴重なオープンスペースでしょう。

法政大学エコ地域デザイン研究センターでは行政と市民と一体となり、日野塾というワークショップの活動を行い、学生も頑張り、みんなと一緒にリサーチして、用水路のマップをつくりました。

「せせらぎ農園」という市民農園の活動も注目されます。生ゴミ回収から始め、都市農業を守ると同



日野の用水路マップ

時に、コミュニティ活動の拠点となっていて、いま全国でもモデルケースになっています。ただ、なかなか今の制度、政策ではこういう活動を十分にサポートできていなくて、結局ここも区画整理で撤退せざるを得ないような状況にあるようです。幸いまた別のところに引っ越して活動すると聞いています。



日野市新井地区のせせらぎ農園

一方、イタリアではキロメトロ・ゼロの思想が定着してきました。私が留学時代の70年代前半に訪

見た
チステルニーノ旧市街



ねたチステルニーノには、その後も何回も行っていきますが、行くたびによくなるのですね。元気になっている。旧市街の家々も修復再生されてきれいになりました。

農村、田園が豊かになった感じが本当にひしひしとします。風景にも、何か活気が出てきた。実際、放置されていたトゥルツリという三角屋根の農家がリノベーションされているケースが増え、セカンドハウスなどに使われている。

マッセリアという農場が修復再生され、新たな機能を付加されるケースも増えています。新たなビジネスも生まれます。町の中に肉屋が何軒もあり、田園の畜産農家と提携を結び、肉を取り寄せるわけです。店先のショーケースをお客さんが見て肉を選び、注文すると厨房に持っていき、出来上がったものを屋外で食べる。実に面白いアイデアです。こうして町と田園がより密接につながる。

完全に放棄された農村集落が見事に甦った例には驚かされました。中部イタリアの建築学部で学んだ地元の若手建築家が、グローバルなセンスも身につけ、保存・再生・活用ということの魅力に取りつかれ、故郷で頑張っている。チステルニーノ郊外のトゥルツリ集落全体を再生し、高級宿泊施設として甦らせたのです。このように、地元どんな素材があるか、どんな固有性があるか。若い世代の建築家は、新たな課題にチャレンジしています。



甦ったトゥルツリ集落

チステルニーノのある Valle d'Itria (ヴァッレ・デイトリア) という地域では、四つ、五つの自治体が連携して、この由緒ある名前を前面に押し出し、美しい丘上都市と田園の風景を売り物に、アイデンティティを大いにアピールしています。複数の自治体が連携してテリトリー戦略を展開しているのです。

チステルニーノの隣町、オストゥーニも知る人ぞ知

るいい町です。斜面都市の段差のあるところを生き、屋外にテーブルを並べ、気持ちのいいレストランが生まれています。サービスはさぞかし大変ですが、しかし、ここで食事をした体験は忘れられません。地元食材を活かした料理も最高でした。

オストゥーニの屋外レストラン



そういう食文化の豊かさを支えているのはマーケットなのですね。ウィークリー・マーケットが町はずれの屋外駐車場を使って開催されます。車がたくさん集まってきて、屋根の下に仕込んでいるテントを自動的に開いてお店になります。実用的なテクノロジーは見事です。かばんや衣類も売っていますが、新鮮なあらゆる食材が、まさにキロメートル・ゼロの思想で、エノガストロノミアを支える。実はローマのような大都市でも屋外マーケットが活発で、こういうセンスが感じられるといいます。大都市の内側にルーラルなもの、農村とのつながりが入っていることは、これからの都市にとって最大の魅力になるのではないのでしょうか。ポストコロナの視点からも重要だし、そういう余裕あるライフスタイルを目指し、このように変えていかなければいけないのではないかと思います。

東京の中のキロメートル・ゼロの動きも結構あります。最も有名なものの一つは国立にあります。国立というと、日本のデベロッパーの先駆け、箱根土地株式会社が関東大震災直後に、一橋学園を開発したことに始まります。西欧風のモダンな町づくりでここだけ有名になりましたが、実はこの地域の本来の中心は南の谷保だったのです。その高台に甲州街道があり、崖線があり、その斜面の下に湧水がたくさんあり、多摩川などの水系から水を引き、用水路を巡らせて近世に穀倉地帯ができた。

国立という名前は、国分寺と立川が合成してできた新しい近代の言葉にすぎず、この地域ではそもそ

も谷保というエリアに人々が住んでいました。湧水を利用して平安時代に誕生した谷保天満宮の裏手には、今もコンコンと水が湧いています。

谷保の農地に若い人たちが結構入り、いろいろなアクションを起こし、一橋大学のゼミでも応援しているところがあると前から聞いています。都市と田園の交流の新たな現代的なスタイルですね。「くにたちはたけんぼ」という農園では婚活の場としても企業研修でも使われ、新しい経験と交流の場になっています。エノガストロノミアにもつながる。言ってみればスローシティではないかと思います。自然、歴史、文化、人間の蓄積を生かしたサステイナブルのまちづくり、これこそポストコロナの重要なあり方です。



都市農業を担う「くにたちはたけんぼ」

都内では昔から都市農業で有名なのは世田谷区と練馬区です。そのための部局が区役所にちゃんとできていて、練馬では最近、都市農業の国際シンポジウムもやりました。

実は遅れていたように見えた私の住む杉並区も、今の区長はこの点では熱心らしく、「すぎのこ農園」という名の農福連携農園を井草にオープンしました。農地は市民農園として区が借りてやっていたのですが、それを買い上げた。そして、農家の家屋そのものを地主から寄贈されたのです。それを解体して部材を生かし再建。しかもハンディを持っている方々がそこで活躍できる場となっている。そういう農地保全、環境、景観、防災、生物多様性、健康、この辺り全てを交え、まさにコモンズとしての役割をここに生み出した。これは画期的なことです。大都市の中にスロースシティが生まれたという感じ。確かに井草とかこの辺、西武線沿線は農地がたくさんあり、中野区にも広がっています。法政の海外から来られる客員の先生方が泊まるゲスト

ハウスが上鷲宮にありますよね。あの周りも結構、駅に行く途中に農地が多くてびっくりしました。だから東京はまだそういう意味で可能性は大いにある。

次に、水都の比較をしたいと思います。つまり水の都市、ウォーターフロントはオープンエアだし、パンデミックにもいいはずですよ。といってもヴェネツィアは最初に、大規模に COVID-19 の感染が広がり、カーニバルも中止になったというぐらいで、まさに観光客がゼロになってしまった。逆に水が透き通ったとか、魚が戻ったという報道もあり、あるいはきれいな町並みが戻ったという言い方もありますが、観光客が来なくなったのは深刻です。経済事情は大変ですが、最近、大型クルーズ船がこのような歴史都市の中心にまで入っていたわけです。オーバーツーリズムの問題を一番象徴していたのはヴェネツィアです。このパンデミックをきっかけにまたクオリティの高い文化観光、創造文化都市にしていきたいというのが、今のヴェネツィアの考え方です。

そもそもエコシティを目指すという考え方がヴェネツィアでは、もうずっと前から語られていました。1966年に大水害があり、地下水のくみ上げをやめたり、あるいはアドリア海からの3ヶ所の入り口に可動水門をつける問題でも、いろいろ議論して結局、それを実現しましたが、ラグーナ全体の自然をよみがえらせることに力を随分入れてきました。

そういう中で、観光を有名なヴェネツィアの本島だけに集中するのではなく、もっと分散してゆっくり過ごそう。そういうスタイルのツーリズム、滞在というものが人気になり、じわじわ広がっていたのです。ポートでアプローチできる水上レストランでの食事最高です。



ラグーナの水上レストラン

実はパンデミックになる直前、2020年の1月13、14日にヴェネツィアのカ・フォスカリ大学で国際シンポジウムがあり、当時の田中優子総長はじめ法政大学から10人ぐらいで行き、イタリアの研究者たちとヴェネツィア・東京の水都比較の研究交流を行いました。そこである女性の研究者が発表してくれたのが本当に感動的でした。ヴェネツィアのラグーナの中で、最近、ワインとオリーブ・オイルを生産しているというのです。かつて生産が行われ、それが途切れていたのをもう1回復権させたとのこと。これが話題になっていて、ヴェネツィアでつくられたワインとしてブランド化されている。それとオリーブ・オイル。実は、負のイメージを持っていた島の隔離病院をリノベーションして超高級ホテルになっているのですが、庭にオリーブ畑がつくられ、泊まった人たちはその恩恵にあずかれるということです。これも見事な発想の転換と言えます。

ヴェネツィアが水都としての関心をラグーナへと広げているのと同様、私も水都東京を広げて考えつつあります。長らく、中心部の日本橋、隅田川、ベイエリア、深川あたりを中心に水都と言ってきたのですけれど、それだけでは少し物足りない。もっと東京ならではの水都概念があっていいのではないかと、だんだん思うようになってきました。

例えば、幕末近くの江戸近郊を描いた古地図を見ると、下のほうに江戸城があり、そして外濠があり、多摩川、そして隅田川、荒川、利根川とありますが、あとは渋谷川とか神田川とか中小河川が細かく描かれています。



東京近郊図1830年 (国立国会図書館所蔵)

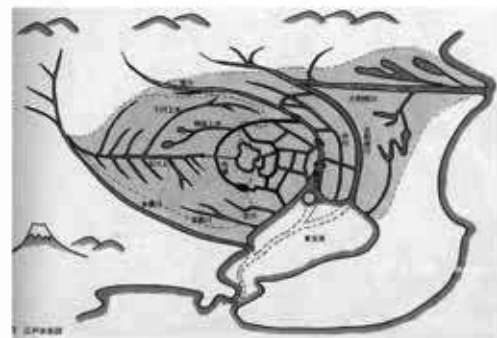
こうして武蔵野・多摩まで全部ひっくるめて水のネットワークが巡って、この江戸と周辺のエリアに、水のテリトリーができていくということを地図が

物語ってくれているわけです。こういう意識を我々は失ってしまった。郊外にどんどんベッドタウン化して市街地が広がり、それはそれで一つの方向だったわけですが、みんなベッドタウンに寝に帰るだけ。その地域、武蔵野・多摩地域の歴史とか環境とか文化的価値はあまり認識しない。

ところが、そうではない。本当は江戸よりもそちらが古いのです。府中・国分寺は元より、八王子だってそうだし、日野だって古い歴史がある。東京都心よりも古いのですよね。縄文遺跡もあちらからたくさん出ています。そうやって発想を転換し、それと水の都市を絡めると、このテリトリーの空間がもっと面白く見えてくる。

実際、東京を新たな視点で捉え直すべく、我々はいろいろなアクションを起こしてきました。エコ研では外濠にずっと取り組んでいて、大日本印刷とか理科大の人たちも加わり、学生諸君、先生たちが一緒に頑張り、そこに企業連合も入ってきて、社会的な関心がずいぶん高まってきました。ところが、まだ肝心の水が汚れているわけです。

水が本当は循環していたのです。それに目を向ける必要が出てきました。江戸時代の玉川上水建設の事業は大変なもので、多摩川で、羽村から取水した玉川上水が尾根を通って分水して農地を育てた。都心では外濠、内濠に水を供給し、水が循環していたのです。もちろん、飲料用水と庭園などに供給するのがメインですが、それ以外の環境用水として、外濠をきれいにしてくれていました。内濠も外濠も水が循環するように設計されていたのです。四谷、そして半蔵門が高いわけです。だんだん順繰りに下りていき、海に行く。多摩川、玉川上水、外濠、神田川、日本橋川、東京湾、こういう水の循環を持っていた。それをもう一回、取り戻そうという大きな

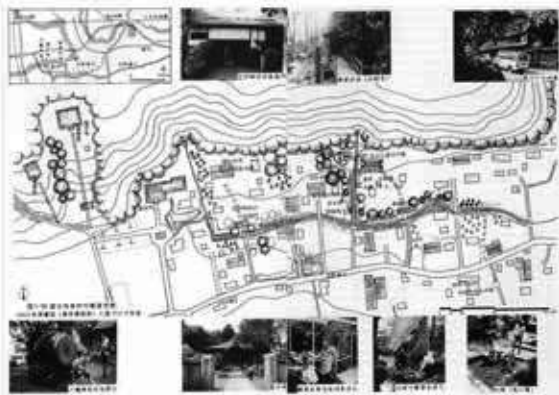


江戸水系図 (作成：神谷博氏)

プロジェクトが、いま大学連合で動いています。中央大学の河川工学の第一人者、山田正先生らが中心で、我々も一緒にやっています。

東京の山の手を見ても神田川沿いの目白の斜面緑地あたり、湧水の池と川が生むまさに水の都市ですよ。細川家の屋敷跡に当たる肥後細川庭園の池があり、椿山荘にも池を持つ庭園があります。

さらに西へ行くと、武蔵野・多摩は湧水が多いので、今でも心洗われるようないい空間に出会えます。国分寺市本村の有名なお鷹の道はその典型です。庄屋クラスの立派な豪邸、文化財級の建物があり、中世に引っ越してきた国分寺がありますが、この辺、どこも水が湧きます。



「お鷹の道」周辺 崖線と湧水群

崖線の下のお鷹の道。だから、上の台地で開発してマンションがどんどん立ち、舗装で覆われてしまうと、地下水が涵養されなくなり、脇水が途絶えるのですが、その開発をストップさせた場所でもあるのです。

ポストコロナに向けたランドスケープの専門家たちのセミナーで知ったのですが、「国分寺ぶんぶんウォーク」という活動があり、分散とネットワークを掲げ、お鷹の道だけではなく、国分寺のいろいろなところにある緑地を巡って歩き続け、今年で10年目だそうです。どこにも歴史があり、農業もやっているわけです。こうして都心から少し郊外に出ると、素敵な活動があるのです。

湧水をプロットしてみると、本当にたくさんあります。殿ヶ谷戸庭園とか、東経大の構内にもいい湧水があるし、それから国分寺駅に近い日立の研究所が有名です。その湧水の池から野川が出ていく。このように恵まれた共通の特徴を持つこの辺が自治体を超えて連携して、一つのテリトリーオとしてアピールすることがこれから重要になるのではないかと

思います。今のようにバラバラなのでは力にならない。

ここから今日のメインテーマ、究極まで突き進んだ都市文明からいかに脱却するか、を考えてみたいと思います。冒頭に自然との対話、歴史との対話、そして人間の関係（コミュニティ）という、3つの復権させたい重要なテーマをあげました。

その中から都市と田園のつながり、あるいは小さな都市が連携して、一つのポテンシャルの高い農地や緑地も含んだ、人間にとって、これからの居住にふさわしい、そういうものを意識的につくっていくテリトリーオの考え方を述べました。そこにはシビックプライドではないですが、「テリトリアルプライド」があっている。つまり、ベッドタウンに住んでいるだけではだめで、そこに歴史があり、文化があり、いろいろ面白い仕掛けがある。そういう認識で、それと連動する形で、パリのイダルゴ市長が言っている15分コミュニティ論、15分都市論というのがあることを去年、ある本で見つけました。

我々仲間内では、この考え方がしばしば話題になりますが、それは私が言っている大都市の中のスローシティ化というのともつながっているのではないかと。スローシティ化はイタリアでのあるシンポジウムで、大都市の中にもスローシティがあるのではないかと南米の参加者が言っていて、面白いと思いました。それには歩行者空間化が重要だし、ウォーターフロントの再生も有効です。実はコロナ・パンデミックの前に東京都が、船での通勤を目指す舟運の復活のための社会実験をしていました。ぜひ、実現したいものです。それから水辺カフェなどなど。

私に関心をもったパリの15分コミュニティ論については、この間、オンライン講座で岡井有佳さんという方のパリの報告を視聴しました。市長がそのイメージスケッチを示しています。15分都市で、要はゾーニングをして機能を分けてしまうという近代都市計画ではなく、あるエリアに何でもそろっている。願わくは15分で徒歩あるいは自転車で行ける。カフェも、学校も、病院も、スポーツクラブも、映画館も、図書館も、何でもそろっている。商店街も。さらにテレワークが前提ですが、そこに職場もつくられる。実際問題としてはパリでも職住近接で職場を新たにつくるのはそう簡単ではないらしいのですが、本格的に考えているのです。特に車を排除、少なくしていく。速度を落とす。これはCO₂の問題もありますが、実際に進んでいるようです。自転車を活

用し、従来の駐車スペースは公園や緑地や農地にしようという発想です。

実はミラノもパンデミックになった2020年3月に自転車都市構想を発表し、驚きました。ミラノに住んでいる日本人の友人に聞いたら、そんなにきれいにやっているわけではないとは言いますが、少なくともこういう計画を自治体が真っ向から提案する、取り組む姿勢が素晴らしいと思います。

ニューヨークのハイライン。パンデミックの時期には、入れないこともあったようですが、今は多分、人気になっていると思います。公共空間の上に通っていた物流のための貨物用高架鉄道を壊そうという計画を、市民が反対して保存しよう、活用しようということでコンペをやり、見事にいまニューヨークで一番人気のスポットになっているわけです。周りの不動産価値もどんどん上がっている。これはポストコロナに一番向いている公共空間、まさにアナザー・ユートピアの榎さんがおっしゃるオープンスペースの一番いい例だと思います。

東京でも少しずつ進んできました。自治体と民間企業、財界、市民、そしてNPO、専門家が連携して頑張り、ウォーターフロントがどんどん再生しているのが大阪です。東京はバラバラです。何とかしたいという思いで、水都東京・未来会議という組織もでき、私も加わっているのですが、なかなかダイナミックには進まない。その中で幸い、寺田倉庫が中心になり、天王洲では成果を上げています。

ようやく竹芝棧橋で水辺再生プロジェクトが実現し、色々な施設がオープンしました。見事に干潟までつくっています。従来、民間デベロッパーが政府の後押しで都市再生特区の制度を使って行っている再開発事業は、公園、緑地をつくったりしますが、本当に公共性をもって市民が親しめるという状態になかなか行っていない。幸い、竹芝棧橋のJRによる再開発、浅草と押上を結ぶ東武鉄道が実現した「東京ミズまち」と「すみだリバーウォーク」など、近年ようやく鉄道会社が頑張っ、都市の水辺再生にいくつも成果を上げています。ようやくそういう時代になりつつあります。

東京都による舟運の社会実験については先ほど述べましたが、晴海のオリンピックの選手村の後が住宅になるなど、晴海、豊洲から海上副都心まで、住宅が広がっているわけです。島に住んでいる人が本当に増えた。そういうこともあり、通勤に船を使うのはあってもいいわけですね。ニューヨーク、ロ

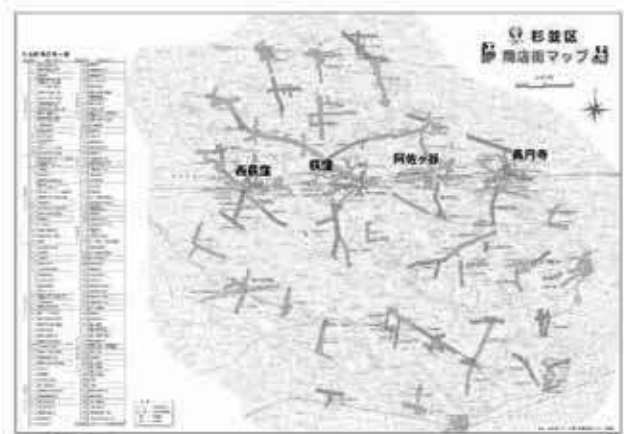
ンドン、ハンブルク、メルボルンでもイスタンブール、上海でも積極的にやっています。そういう中で、東京でやれないはずがないというわけで期待していたのですが、コロナになってしまったので途切れています。これからでしょう。

それから、伊藤滋さん、吉見俊哉さんたちを中心とする東京文化資源区構想があり、私も応援しているのですが、LRTをしかるべきところに走らそう。路面電車ですね。つまり、ゆっくり行こう。歴史的ストックを生かしながら、質の高い、その場にふさわしい開発を、そこにお金をいい形で導いてやっていこうという、そういう提案で、これもまさに大都会の中のスローシティとして可能性があるなと思います。

ヨーロッパはイタリアも含め、今や路面電車が旧市街の魅力向上に大きく貢献しています。ヴェネツィアでも、本土のメストレと結んで島の西端まで実現しています。パドヴァにもフィレンツェにも新しく敷設された。東京にも期待したいところです。

パリの発想を応用して、東京ではどういうことが考えられるか。北山恒先生が中心になりEToS（法政大学江戸東京研究センター）で考えた面白い提案があります。東京には、実はすごい数の商店街があるわけです。ほとんどの地域、どこからでも15分で自転車、徒歩でアクセスできるところに商店街が必ずあります。そこで、この商店街を日本版15分コミュニティとして再生させる可能性があるのではないかという提案です。2021年の3月にシンポジウムが実現し冊子をつくったのですが、雑誌『東京人』が興味を持ってくれて、大々的に特集で発表しました。

自分が住んでいる杉並にも商店街が数多くあります。JR、西武線、井の頭線など私鉄沿線の駅前がも



杉並区商店街マップ

ちろん多いです。ただ、それ以外のところにも結構あります。確かに、15分も行かないでも本当に行けるわけです。

実は東京都内、杉並区あたりの商店街はまだ恵まれているほうかもしれない。都内でも商店街の空き店舗が増え、シャッター街が生まれていると思います。全国的には悲惨な状態ですよ。しかし、日本が培ったこの財産は本当にすごいと思います。そもそも町家というタイプ、建築のタイプは世界にないのでですね。職住一体でコミュニティをつくっている。一体感のある町並みもできている。地域に根を下ろし、責任を持ち、政治家まで商店街は出したりしますよね。というわけで、職住一体を活かし、若い世代の人が引き継いでイノベーションをやってくれば相当面白い空間になるはずですよ。そこには共同性がある、コミュニティがある、道はコモンズです。そういうものを復活できないかということです。

東京で成功している事例の1つが、深川の清澄白河です。ここはコロナ禍になる前から、東京で一番面白い旬な地域の一つだと私は言ってきました。ある時期、交通至便の地域で、地価も安い、家賃も安いので、マンションがどんどん立っていたのです。本来、深川、江東は神社やお寺もある。花街はある。木場はある。いろいろな産業、文化、歴史があり、複合空間としての面白さがあり、観光の対象でもあった。それがどんどんマンション街になってしまったら、これはもうつまらなくなると心配したのですが、幸いそういう方向に行かないで済んだのですよね。

というのは、木場の跡地の公園の一角にできていた東京都現代美術館と、新しい地下鉄の敷設で誕生した清澄白河駅の間が結ばれ、面白い動きが出てきたのです。本来、木場が活発だった頃、ここに「深川資料館通り」という商店街があり、ものすごく繁盛したのですが、木場が引っ越してしまってから、もう閑古鳥が鳴いていた。そこに江東区の商業振興で、コミュニティ・カフェがオープンしたのです。ギャラリーでもあり、ここがアート発信基地の一つにもなりました。

もともとここは倉庫群、流通・物流の基地だったので、食糧ビルディングというところに、武蔵野美術大学の小池一子さんという人がプロデュースして、エキジビット・スペースというのができました。そこが現代アートの発信基地になった。そういう遺伝子がどんどん広がり、文房具屋さんの分部登志弘さ

んという方がリーダーで、かかしコンクールを20年もやっている。北川フラム氏と友達で、大地の芸術祭の棚田にかかしを出展しているのです。この通りに面したお寺の境内でアーティストと組んでインスタレーションを彼が仕掛けました。

この界限には諸々の活動を担った大きな施設がたくさんあるので、天井が高い。つまり、住居だけ並んでいる地域だと、こうはいかないのですが、産業の地域だった。印刷所もできた。というわけで、器が大きい。それを使い、ギャラリーができる。そして、コーヒー店ができる。つまり、焙煎のために天井が高くなければいけません。それを狙ってブルーボトルが出てくるというわけで、いま若い人の間でイメージの上がっている地域です。住みたいという人が多い。



倉庫を転用したコーヒーショップ

さらにいいのは、現代美術館が近くにあり、これがオリンピックの前に改装工事のため3年ぐらい休館したのですが、その間にやる気のあるキュレーターの方々が地元に入り、先ほどの分部さんなども協力してもらい、アーティストがいろいろなところ、倉庫、材木屋、印刷所、お寺の境内というところにアート作品を埋め込んでいくイベントを実現しました。大成功して3回もやり、大きなインパクトがありました。

それが刺激になり、今度は町の中に点在している職人、ものづくりの人たちが連携するような動きが出てきたのです。これは本当にすてきなことで、震災に遭っているのに古い建物は限られているのですが、人の営み、コミュニティ、人間関係はまだまだ持続しているのです。それをもう一回、現代のセンスでつくり上げる。

そこまで言ってきた後で、真の都市再生の成功例を少し紹介したいと思います。まず、都市計画のあ

るシンポジウムで一緒になった市来広一郎さんが中心となった温泉町・熱海のサクセスストーリーです。熱海は高度成長期からずっと会社の宴会などに対応する大規模開発ばかりやりってきました。本当は、温泉まちは町を歩く、その面白さがあった。ところが、大きなホテルや旅館の内部で楽しんで帰ってしまう。時代のニーズが変化し、それが全部だめになり、廃虚になってしまったわけです。そこを見るに見かねて、衰退した故郷に戻り、新しい発想で温泉まちなちの再発見から市来さんは始めたそうです。レトロな建物、歩く楽しさ、女性たちがそういうのを大好きなので、見学会、ワークショップ、まちづくり、リノベーション、いろいろやり、熱海が元気になってきたという話です。移住してお店を開く人も次々に出てきたそうです。これこそが日本版の都市再生の一つのタイプではないかと思えます。

もう少し小さい動きは、全国で面白いことがいろいろ起こっています。アルベルゴ・ディフーズ（分散型ホテル）というイタリア語の言葉が、ちょっとアンテナを張っている日本人の方々の間で知られるキーワードになりつつあります。つまりイタリアでも、小さな村、山間部の町は空き家だらけなわけです。それを何とかしたいということから、空き家を活用して分散型のホテルを生み出す試みがなされ、各地で大きな成功をおさめているのです。そういう動きがもう 40 年あるのですね。私の法政での教子でナポリに長く住んでいる中橋恵さんが森まゆみさんと一緒に、イタリアのアルベルゴ・ディフーズを紹介する本を出版しました（『イタリアの小さな村へ』新潮社、2018 年）。

その動きとは別個に、宮崎晃吉さんという若手の建築家が谷中で似たような動きをやっていたのですね。イタリアのこういう動きをキャッチして、中橋さんが向こうのアルベルゴ・ディフーズ協会の会長を日本に連れてきたときに、宮崎晃吉さんが講演会をアレンジしてくれました。日本にこの動きがだんだん伝わっていったけど、そのパイオニアが宮崎さんです。谷中にアルベルゴ・ディフーズを自らつくってきた。

つまり拠点となったのが、彼が学生時代に住んでいた木造の下宿屋です。これをリノベーションして複合施設になった。さらに周りの空き家を取得して分散するホテル、つまりレセプション、泊まるどころ、食事どころが別です。食事どころは周りにたくさんありますし、銭湯も飲み屋もある。

そういう動きがいま全国に広がっています。コロナ禍でも驚いたことに、頑張って 20 ぐらいの団体と連携して「日本まちやど協会」がつくられ、素敵な雑誌が創刊されました。その中でも真鶴に生まれた真鶴出版は有名です。

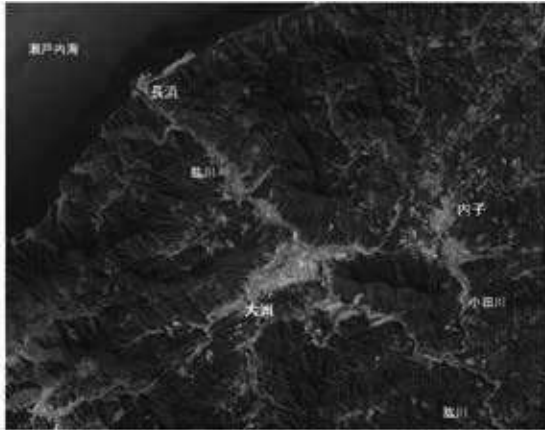
LOCAL REPUBLIC AWARD という賞が数年前に誕生し、私もその審査に参加しています。個人主義が強まった今、自分のことしか考えないわけです。住宅も一家族一住宅、マンションもありますが隣人との付き合いは薄い。本来は町家でも農家でも、経済活動が家の中で行われていました。経済活動があり、コミュニティにつながる、まちづくりにつながるような、そういう形を実現している事例を表彰する賞としてこれが生まれ、その中で最優秀を 2019 年に取ったのが真鶴出版でした。ここは地元の方々が東京の若手建築家と組み、古い木造の家をリノベーションし、出版社だけど、泊まれるし、町の案内もする。こういう動きがメディアでも紹介され、真鶴に引っ越したいという人たちがたくさん出て、開業する人も増えているそうです。



真鶴出版

最後に少し日本版テリトリーオの話をしたと思います。瀬戸内は本来、舟運でつながる大きなテリトリーオだったと言えます。その周りに、小さな単位のテリトリーオがいくつも形成されていました。その 1 つ、愛媛県の肱川の流域に注目します。瀬戸内海に面した長浜という港町から川を遡ると、大洲という城下町があります。支流の小田川を遡ると内子という産業経済の中心地があります。これらが川の舟運でつながり、原材料、製品を船で運ぶ。これで違う性格を持った都市が連携し、大洲藩という加藤家の殿様の下で、一体感のあるテリトリーオを形づくっていました。

それは鉄道が開通するまで続いて、この地域の繁



肱川と小田川の舟運が生んだテリトリー

栄を生んでいました。こうした舟運のおかげで内陸部に位置する内子が繁栄できました。木蠟で稼ぎ、その財で立派な町並みを作り上げたのです。大正時代の内子座でも知られます。町並み保存のパイオニアでもありますね。そして今、新しいリノベーションもどんどん起こっている。「村並み」という言葉も編み出し、農家民宿を手がけ、周辺の農村の棚田や屋根付き木造橋を保存し、水車を復元する動きを先駆的に行ってきました。

この内子と港町、長浜の中間あたりに城下町・大洲があります。美しい風景で、肱川から上がって行くと、戦略上重要な川に面する突端に天守閣が聳えます。実は戦後の再建の木造のようですが、天守閣に泊まれるのですね。2人、カップルで1泊100万円。でも、アイデアとして面白いですよ。そして古い町並みがよく残っている。ここでも空き家が多いのですが、今、その再生がどんどん進んでいる。これは NIPPONIA という空き家を再生する事業を展開している組織が担い、やはり日本版分散型ホテ



空き家再生で生まれた大洲の分散型ホテル

ルを展開しています。再生された町家でフランス料理の美味しいのも食べられるのも醍醐味です。実は

明日行ってシンポジウムをここでやります。

そのシンポジウムは何をやるかというと、臥龍山荘という明治中期にできた素晴らしい、地元の財界の人、河内寅次郎という人がつくった本格的な数寄屋の建築（重要文化財）と庭（国の史跡）があり、それを活用しながら、文化的な町づくりに広げるための方法を議論しようとしています。世界にも誇れる素晴らしい建築と庭で、遊び心に満ち、元は船でアプローチしていたようなのです。大洲の経済も文化も肱川と密接に結びついていたのです。こういう地域の財産を現代的にどう活かすかが問われています。



臥龍山荘の不老庵

ところが、肱川が生み出したテリトリーの意識、都市間の密接なつながりが今や全く見えません。トラック、鉄道になり、内子と大洲の関係も行政的にも経済的にも観光的にも全くないのです。サイクリングでつなごうという動きはあります。民間レベルから始めるしかないのかもしれない。舟運がなくなったとしても、かつて連携して地域が繁栄していた姿を想起し、お互いもう一度、現代のセンスでつながっていけば、まさにテリトリー再生が実現できるのではないかと。

最後にもう一つ考えてみたいことですが、テリトリーと見ると我々、特に日本では工業、産業の地域はみんな海沿いだなと思っていますよね。国土全体をもう一回見直したほうがいいのではないかと。初期の工業化の時代は世界中で日本も含め、内陸部に立地していたのです。エネルギーは水車です。エネルギーも地産地消だったのです。北イタリアのトレヴィーゾという町も水路が何本も流れ、水車を使った産業都市で、シーレ川の舟運を通じてラグーナに浮かぶヴェネツィアの都市生活を支える役割を果たしました。ポローニャはもっと内陸に位置する

典型的な水車を活かした産業都市でした。ところが、現代はみんな海沿いに工業地帯があると思っている。それがポスト工業化の今、役割を終えているわけですよ。

そうすると、意外に内陸部にいい町があるなどみんな気が付いてきた。ポーロニャは井上ひさしさんが『ポーロニャ紀行』で絶賛しています。産業都市の記憶を展示する産業博物館では、水車で回して燃糸工程を担い、織物の最先端をいていたこの町の歴史を見事に解説しています。

その進んだ技術がいろいろな経緯でイギリスに渡り、産業革命が生まれる1つの要因になったと言われています。この歴史的なクリエイティブな産業都市としての経験、遺伝子が受け継がれ、ポーロニャは超人気のスーパーカーとかバイクを生産する都市となっているのです。そういう歴史の経験、記憶が内陸部の都市に受け継がれているのです。

日本をそういう目でもう一回評価すべきだということで、実はこの間も越前、福井県の越前市不老町に行きました。和紙の産地で、これも川が上っていく。この辺、産業が多いのです。眼鏡で有名な鯖江の町もあります。越前市不老町の和紙の工房では千住博という有名なアーティストが使う和紙を特別に作ったりもしています。

群馬県の桐生も内陸部に位置し、水路で水車を回して絹織物をつくっていました。私達のエコ地域デザイン研究センターと共同研究を始めた千葉県香取市の佐原は、産業といっても流通経済ですが、小野川での舟運で内陸部にありながら経済的にも文化的にも大いに繁栄しました。こういう地域をあらためて、テリトリーオの視点で再評価する必要があります。

最後、宣伝ですが、法政経営学部のマーケティング専門の木村純子先生、フランスの農業政策を研究している農林水産省の須田文明氏、そして建築、都市計画、歴史の私が集まり、イタリアの研究者たちと一緒に研究し、さらにはイタリア料理研究家とソムリエの方にも寄稿してもらい、『イタリアのテリトリーオ戦略』（白桃書房）という本を刊行します（2022年3月）。「甦る都市と農村の交流」がサブタイトルでして、まさにこうした新しいパラダイムをいま必要としているのではないかと。それから、70年代にあれだけ議論されていた地域主義に、もう一回命を与え、新しいフェーズで、つまり成熟社会、人口減少時代に入った今日、あの時代とはまた違う、新たな地域主義について考える必要があるのではないかと

いかと思います。どうもありがとうございました。

解題

小島 聡（第46回法政大学大学院まちづくり都市政策セミナー運営委員長）

陣内先生は、今回の基調講演で、今後の都市再生を展望し、また現代の都市文明を再考するために、自然との対話、歴史との対話、人間の関係（コミュニティ）という3つの復権させるべきテーマを掲げ、そこから「新たな地域主義」を提唱されました。講演を振り返りながら、その趣旨を確認すると、近代は都市と田園（農山漁村）の二項対立の構図を世界中に広めていったということでしょう。それは具体的にいえば、都市の際限なき開発と成長、都市による田園の浸食、都市と田園の格差の近現代史であったといえます。

ところが、日本がオイルショックと高度経済成長の終焉を迎えた1970年代に、イタリアは都市再生と田園再生をつなぐ方向へと舵を切り始めました。たしかに日本も大平政権で田園都市国家構想を提唱したものの、それは机上の空論に終わり、20世紀から21世紀前半にかけて、2つの国は異なる道を歩んでいったといえます。

イタリアの都市再生と田園再生をつなぐキーワードとして、陣内先生が強調するのが、テリトリーオ、すなわち地域の地形と自然生態系、気象といった地域環境を基盤としながら経済、食、文化、共同体、建築など、人間社会の営みを総体的に捉える考え方です。それに対して、日本の近代化は、おおよそ地域の履歴の総体であるテリトリーオを解体しながら、都市と田園の二項対立の関係性とその象徴ともいえる東京一極集中が21世紀に入っても続いてきたといえるでしょう。

その結果、2040年には日本の基礎自治体の半分ぐらいで、消滅可能性が現実味を帯びるかもしれないとまで言われるようになったのです。そういう状況の中で、2020年、COVID-19のパンデミックが始まり、東京一極集中も一時的に沈静化しました。

そこで、本セミナーのタイトルにもかかわりますが、私たちはパンデミックの終息後、再び東京一極集中に回帰すればよいのか、それとも今度こそ別の道を模索すべきなのか、この問いへの解答は、陣内先生ご自身の研究者としての歩みと現代史を重ねた

二つの国を舞台とする比較地域論からも明らかでしょう。20世紀的な開発成長政策の延長線上にある都市再生ではなく、陣内先生が1970年代後半にすでに当時のイタリアを手がかりとして提示した都市再生の21世紀におけるあるべき姿とは、テリトリーオに、内発的な地域づくりへ可能性を見いだしながら、都市と田園（農山漁村）が自立しつつもつながっていくという、新たな地域主義のシナリオであり戦略でしょう。

またこのことから、僭越ながら、陣内先生の都市再生の思想は、21世紀前半の今日、テリトリーオをキーコンセプトとする新たな地域主義の思想へと展開し、この基調講演は、受講者はもちろん社会に対して実践課題を含めたメッセージを発する機会になったともいえるでしょう。

本セミナーは、パンデミックの第5波と第6波の幕間の時期になんとか対面で開催することができま

した。いずれにしても、やがてCOVID-19は終息するでしょう。しかし、次のパンデミックが遠からずまたやって来るかもしれません。もっと重要なことは、やがて首都直下型地震や南海トラフ三連動地震、さらに甚大な気候災害が来るかもしれません。そうなれば多くの地域が物理的に破壊されるでしょう。

そしてその時、地域のレジリエンスを左右するのも、新たな地域主義を体現した人々による、再生への希望を紡ぎ出す多様な営みでしょう。その意味でも、東日本大震災後から10年がたった東北で今なお挑戦を続ける人々から、私達は学ぶ必要があるはずです。都市の危機とともに再生を問うことは、次の危機に備えることであり、同時に長期的な時間軸で持続可能性を問うことでもあるといえるでしょう。

法政大学特任教授*1
法政大学人間環境学部教授*2

5 研究業績

Research Achievements

研究業績

2021年1月以降

刊行書籍



[EToS 叢書 3] 水都としての東京とヴェネツィア

法政大学江戸東京研究センター編

監修：ローザ・カーロリ，小林ふみ子，陣内秀信，高村雅彦

法政大学出版局

2022年1月

【序】

二つの水都を比較する意味（陣内秀信）

【イントロダクション】

江戸における水辺の文化（田中優子）

ヴェネツィアと海——コスモポリタンな商業都市（ドナテッラ・カラビ）

【第一部 場所の記憶、水の記憶】

地誌と絵本挿絵のなかの江戸（小林ふみ子）

都市の娯楽と記憶——『むだ砂子』考（マスキオ・パオラ）

水辺の記憶——神田川周辺の失われた水流空間の痕跡（ローザ・カーロリ）

視覚的記憶と水面——ヴェネツィアを見つめた写真家のまなざし（アンジェロ・マッジ）

【第二部 地図学と地理学における水都】

現代に継承された江戸東京の庭園——水系と地形の多様性が生み出すユニークさ（畠山望美）

絵地図における首都東京の風景表象——江戸から明治へ（米家志乃布）

【第三部 建築遺産と未来】

効果をあげないヴェネツィア保全のツール——その理由は？（ジョルジョ・ジャニギアン）

“地域の生態系”の維持や継承——東京の「銭湯」の例（栗生はるか）

ヴェネツィアと東京の比較研究の意義——歴史の継承と保存問題（マテオ・ダリオ・パオルッチ）

【第四部 水都をとりまく環境】

ヴェネツィア——水のテリトリーオ（フランコ・マンクーゾ）

水に映しみる墨東の変貌（ポール・ウェイリー）

江戸東京の聖地から浮かび上がる都市と環境の領域（高村雅彦）

ラグーナのブドウ・オリーブ栽培——伝統とリキッド・モダニティ（フェデリカ・レティツィア・カヴァッロ／ダヴィデ・マストロヴィト）

【第五部 グローバル都市の住民——経済・文化・ガバナンス】

水都東京の再生プロセスと今後への展望（陣内秀信）

「大都市圏ヴェネツィア」に関する議論における水とウォーターフロント、もしくは欠けている論点（ステファノ・ソリアーニ／アレッサンドロ・カルザヴァーラ）

団地とタワーマンション：周縁と中心、内陸とウォーターフロント——東京圏の集住の起源と現況を概観する（渡辺真理／木下庸子）

【結び】

水都の再発見、回復、レジリエンス（ローザ・カーロリ）

著書



標題：都市の記憶から創造する

書名：『Bulletin286 2021 冬号』所収

著者名：栗生はるか

発行：公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

発行年月：2020 年 12 月



書名：『日本の風土と景観』

著者名：朴賛弼

標題：EAST ZONE

発行：技文堂（海外出版：韓国）

発行年月：2021 年 1 月

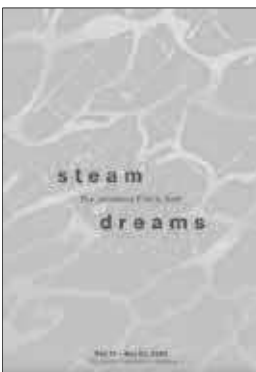


書名：『景観用語事典増補改訂第二版』

著者名：篠原修編，福井恒明

発行：彰国社

発行年月：2021 年 2 月



標題：the preservation of Sento,an urban communication hub

書名：『steam dreams-The Japanese public bath』所収

著者名：栗生はるか

発行：国際交流基金 シドニー

発行年月：2021 年 3 月



書名：『都市のルネサンス-イタリア社会の底力』

著者名：陣内秀信

発行：古小鳥舎

発行年月：2021年7月



書名：『地域をデザインする Vol.1』

著者名：陣内秀信（分担執筆） 日本建築美術工芸協会編

標題：豊かな生活空間、美しい景観を生み出すために

発行：建築画報社

発行年月：2021年10月



標題：セッジャーノ・オリーブオイル PDO/アミアータ・テリトリーオ

書名：『ブランド戦略・ケースブック 2.0』田中洋編著 所収

著者名：木村純子

発行：同文館

発行年月：2021年11月



書名：建築ジャーナル No.1323 「銭湯のある風景」

著者名：栗生はるか（寄稿）

標題：銭湯とまちの関係性

発行：建築ジャーナル

発行年月：2021年11月1日



標題：地域の生態系を維持する銭湯

書名：『a+u』2021年11月臨時増刊号"

Infraordinary Tokyo: The Right to the City"所収

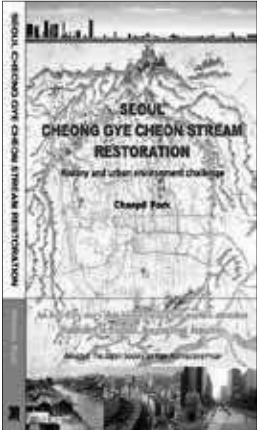
著者名：栗生はるか

発行：新建築社

発行年月：2021年11月8日



書名：『よみがえる清溪川』 電子版
著者名：朴賛弼
発行：NABISORI 出版社（海外出版：韓国）
発行年月：2021 年 12 月



書名：『SEOUL CHEONG GYE CHEON STREAM RESTORATION』 電子版
著者名：朴賛弼
標題：History and urban environment challenge
発行：NABISORI 出版社（海外出版：韓国）
発行年月：2021 年 12 月



書名：『韓屋と伝統集落』
著者名：朴賛弼
標題：韓国の暮らしの原風景
発行：法政大学出版社
発行年月：2022 年 3 月 10 日



書名：『イタリアのテリトリー戦略：甦る都市と農村の交流』
著者名：木村純子・陣内秀信編著
発行：白桃書房
発行年月：2022 年 3 月

論文（査読付き）

論文標題：明治初期に始まる東京旧武家屋敷の牧場転用による都市空間の変容について-飯田町・番町への牧場移転集中を例として-

著者名：金谷匡高

雑誌名：日本建築学会計画系論文集

発行年月：2021年3月

論文標題：『蘇聯工人住宅区設計』の北京紡績第二工場に対する影響-中国第一次五カ年計画期の労働者住宅地計画に関する研究

著者名：邵帥、高村雅彦

雑誌名：日本建築学会計画系論文集 第86巻 第787号, 2378-2387

発行年月：2021年9月

論文

論文標題：サルデーニャで出会った水の聖地

著者名：陣内秀信

雑誌名：NICHE 07(工学院大学建築学部)

発行年月：2020年12月

論文標題：水辺のソーシャルデザインとその未来

著者名：陣内秀信

雑誌名：河川 No.896

発行年月：2021年3月

論文標題：夏における置屋根と土居葺屋根遮熱効果の比較考察

著者名：出口清孝・金田正夫

雑誌名：民俗建築第159号（一般社団法人日本民俗建築学会）

発行年月：2021年05月30日

論文標題：沖縄県の伝統的民家に施されたパッシブ技術が室内風環境に及ぼす影響

著者名：出口清孝・北田文也・川久保 俊

雑誌名：日本建築学会大会学術講演梗概集 環境系

発行年月：2021年9月

論文標題：日本の気候風土に適した伝統民家におけるパッシブデザインの把握 その2：伝統民家の分類項目拡充に基づく伝統民家と気候風土の関係

著者名：出口清孝・川久保 俊・砂田和輝

雑誌名：日本建築学会大会学術講演梗概集 環境系

発行年月：2021年9月

論文標題：韓屋の空間構成の特徴に関する研究-日本・中国の伝統民家との比較を通じて-

著者名：朴賛弼

雑誌名：民俗建築』第160号

発行年月：2021年11月

論文標題：水害被災地における市街化の経緯と要因-千曲市の農地転用に着目して-

著者名：渡邊真由、福井恒明

雑誌名：第64回土木計画学研究・講演集（CD-ROM）

発行年月：2021年12月

論文標題：最上川舟運と河川工学的特性の関係

著者名：堀越義人、福井恒明

雑誌名：景観・デザイン研究講演集 17

発行年月：2021年12月

論文標題：明治以降戦前の名所案内本にみる東京の神社に対する関心の変遷

著者名：志村遥奈、福井恒明

雑誌名：景観・デザイン研究講演集 17

発行年月：2021年12月

論文標題：千代田区を対象とした橋詰空間の変遷

著者名：藤田景、福井恒明

雑誌名：景観・デザイン研究講演集 17

発行年月：2021年12月

論文標題：江戸・明治期の越後平野西部テリトリーオに関する研究

著者名：齋藤浩志郎，福井恒明
雑誌名：景観・デザイン研究講演集 17
発行年月：2021年12月

論文標題：水害被災地における市街地拡大過程－千
曲市杭瀬下地区を対象に－
著者名：萩原隆太，福井恒明
雑誌名：景観・デザイン研究講演集 17
発行年月：2021年12月

論文標題：『名所江戸百景』に描かれた江戸の周縁
領域
著者名：相澤航平，福井恒明
雑誌名：景観・デザイン研究講演集 17
発行年月：2021年12月

論文標題：日本におけるエコミュージアム的な取り
組みについて考察－東京都墨田区「小さな博物館」
事業の場合－
著者名：馬場憲一
雑誌名：日本エコミュージアム研究 No.27
発行年月：2022年3月

論文標題：文化財政策におけるエコミュージアム的
な取り組みとその課題－ウェルビーイング社会の文化
享受の視点から－
著者名：馬場憲一
雑誌名：現代福祉研究 第22号
発行年月：2022年3月

学会発表（招待講演・国際学会）

発表標題：イタリアが生んだ都市とテリトリーオを
読み解く方法の日本への応用
発表者名：陣内秀信
学会等名：異文化から何を学ぶか？/19・20世
紀のイタリアと日本の交流から考える
発表場所：鹿児島大学（オンライン）
発表年月：2021年2月

発表標題：地中海地域と西アジアとの比較都市論－
空間人類学の視点から

発表者名：陣内秀信
学会等名：(科研研究会) 都市文明の本質：古代西
アジアにおける都市の発生と変容の学際研究
発表場所：オンライン
発表年月：2021年3月15日

発表標題：文京区本郷における銭湯・旅館・喫茶店
等での具体的な取り組みについて
発表者名：栗生はるか，三文字昌也
学会等名：デジタルアーカイブ学会
発表場所：オンライン
発表年月：2021年4月

発表標題：都市と人間－水辺のコスモロジー
発表者名：陣内秀信
学会等名：世界運河会議
発表場所：名古屋市中京テレビ・ホール
発表年月：2021年5月21日

発表標題：Reading the Urban Landscape of Tokyo:
Topography and History
発表者名：Hidenobu Jinnai
学会等名：DOCOMOMO 国際学生ワークショップ
発表場所：東京（オンライン）
発表年月：2021年7月28日

発表標題：近代期の東京における搾乳業と都市空間
発表者名：金谷匡高
学会等名：東アジア都市史学会
発表場所：オンライン
発表年月：2021年9月

発表標題：テリトリーオの営みが生んだ景観－その
再評価と継承の方法－
発表者名：陣内秀信
学会等名：飯田市地域史研究集会
発表場所：オンライン

発表年月：2021年9月11日

発表標題：Japanese Architects` Devising of Healthy Housing in Manchuria

発表者名：BAO Muping, TAKAMURA Masahiko

学会等名：4th International Conference of the East-Asian Society for Urban History

発表場所：オンライン

発表年月：2021年9月11日

発表標題：Learning from architecture

発表者名：栗生はるか 他多数

学会等名：日本建築学会建築文化事業委員会

発表場所：オンライン

発表年月：2021年10月

発表標題：Nuove tendenze nella ricerca sulla storia urbana in Giappone

発表者名：Hidenobu Jinnai

学会等名：Aisu International

発表場所：オンライン

発表年月：2021年11月20日

発表標題：三鷹まるごと博物館の沿革と今後の課題

発表者名：馬場憲一

学会等名：日本エコミュージアム研究会

発表場所：三鷹ネットワーク大学

発表年月：2021年11月

学会発表

発表標題：サーモグラフィーからみる夏における温熱環境の研究-伝統民家及び現代風建物の測定-

発表者名：朴賛弼

学会等名：日本民俗建築学会

発表場所：日本出版倶楽部、リモート併用開催

発表年月：2021年5月

発表標題：江戸川乱歩邸の空間変遷と暮らし-江戸川乱歩邸の実測調査報告 その1-

発表者名：石樽督和、金谷匡高、砂川晴彦

学会等名：日本建築学会近畿支部研究発表会

発表場所：オンライン

発表年月：2021年6月

発表標題：江戸川乱歩が構想・増築した洋館・玄関廻りについて-江戸川乱歩邸の実測調査報告 その2-

発表者名：金谷匡高、石樽督和、砂川晴彦

学会等名：日本建築学会近畿支部研究発表会

発表場所：オンライン

発表年月：2021年6月

発表標題：風水思想からみた韓国の伝統集落

発表者名：朴賛弼

学会等名：日本建築学会

発表場所：リモート開催

発表年月：2021年9月

発表標題：日本におけるエコミュージアム的な取り組みについて考察-東京都墨田区「小さな博物館」事業の場合-

発表者名：馬場憲一

学会等名：日本エコミュージアム研究会

発表場所：Zoomでの開催

発表年月：2021年11月

著作について書かれた書評

評者名：『日本の風土と景観』出版紹介

媒体名：東洋経済日報

書評掲載年月：2021年7月

対象著書（著者）：朴賛弼

評者名：後藤和子

媒体名：文化経済学 第18巻2号

書評掲載年月：2021年9月

対象著書（著者）：『水都東京-地形と歴史で読みとく下町・山の手・郊外』（陣内秀信）

評者名：大井実

媒体名：西日本新聞
書評掲載年月：2021年9月11日
対象著書（著者）：『都市のルネサンスイタリア社会の底力』（陣内秀信）

評者名：松田法子
媒体名：都市史研究 8
書評掲載年月：2021年10月
対象著書（著者）：『水都東京－地形と歴史で読みとく下町・山の手・郊外』（陣内秀信）

評者名：藤村龍至
媒体名：週刊読書人
書評掲載年月：2021年10月29日
対象著書（著者）：『都市のルネサンスイタリア社会の底力』（陣内秀信）

評者名：『建築環境工学、建築設備』専門教科書出版および環境工学研究の紹介
媒体名：東洋経済日報
書評掲載年月：2021年11月
対象著書（著者）：朴賛弼

評者名：『韓屋と伝統集落』出版紹介
媒体名：東洋経済日報
書評掲載年月：2022年3月
対象著書（著者）：朴賛弼

作品

作品名：銭湯山車
著者名：文京建築会ユース+銭湯山車巡行部（栗生はるか、三文字昌也、内海皓平、村田勇氣）
賞・媒体名：国際芸術祭「東京ビエンナーレ2020/2021」出展作品
掲載媒体：東京新聞 他"
発表日：2021年7月

作品名：ハルミ集落南湖家屋扉絵
著者名：朴賛弼

賞・媒体名：『民俗建築』第160号
発表日：2021年11月

作品名：『日本の風土と景観 WEST ZONE』、『日本の風土と景観 EAST ZONE』
著者名：朴賛弼
賞・媒体名：長尾重武賞・武蔵野美術大学建築学科
発表日：2022年1月

その他

標題：水都・江戸東京のグリーンインフラ
著者名：神谷 博
雑誌名：国づくりと研修 vol.146
発行年月：2021年10月30日

標題：なぜ今銭湯か 銭湯が持つ多様な価値とまちとのつながり（鼎談）
著者名：（鼎談）江口晋太郎、栗生はるか、サム・ホールデン、牧野 徹
雑誌名：建築ジャーナル No.1323 「銭湯のある風景」
発行年月：2021年11月

標題：新しい仕掛けをどうつくっていくか
著者名：（鼎談）小野裕之、栗生はるか、中川寛子
雑誌名：東京人 2021年12月号 特集「商店街に新風」
発行年月：2021年11月

標題：近世初期八王子町建設時の洪水対策－「武蔵名勝図会稿本」より－
著者名：馬場憲一
雑誌名：多摩のあゆみ 第185号

標題：三鷹まるごと博物館の沿革と今後の課題
著者名：馬場憲一
雑誌名：三鷹市文化財年報・研究紀要
発行年月：2022年3月

書評

評者名：栗生はるか

雑誌名：コンフォルト 179号

発表年月：2021年6月

対象書籍：写真集『東京銭湯』

6 活動報告

Activity Report

活動報告

(2021年1月～2022年3月までの活動)

○第二回 気候変動と雨水活用シンポジウム

【日時】2021年5月13日

【会場】オンライン配信

【主催】雨水基準制度研究会、法政大学エコ地域デザイン研究センター、一般社団法人日本建築学会あまみず活用の評価を考える小委員会、公益社団法人雨水貯留浸透技術協会、特定非営利活動法人雨水まちづくりサポート

【プログラム】

第一部：事前配信

「気候変動を踏まえた都市浸水対策と雨水の活用」
古米弘明（東京大学教授）

「ドイツにおける気候変動適応策とSDGsの動向」
パスカル・グールドルフ（ECOS JAPAN 西日本事務所代表）

「欧州における雨水活用規格の動向」小川幸正
（NPO 雨水まちづくりサポート 副理事長）

第二部：ライブ配信

「雨水活用の計画と設計」向山雅之（竹中工務店）

「雨水活用の水量と水質」岡田誠之（東北文化学園大学名誉教授）

「雨水活用の製品技術」岡田誠之（雨水貯留浸透技術協会常務理事）

パネルディスカッション「雨水基準・制度の目指す方向性」



○第12回外濠市民塾オンラインレクチャー「“濠”で囲まれた日本の都市」

【日時】2021年5月21日

【会場】オンライン配信

【主催】外濠市民塾実行委員、法政大学エコ地域デザイン研究センター

【講演】伊藤裕久（東京理科大学教授）



○シンポジウム「異域から国土へ」

【日時】2021年8月4日

【会場】オンライン配信

【主催】江戸東京研究センター、国際日本学研究所、エコ地域デザイン研究センター

【講演】「近世蝦夷地の地域情報／日本北方地図史再考」米家志乃布（文学部教授）



○シンポジウム「玉川をめぐる名水と歴史と景観」

【日時】2021年8月28日

【会場】オンライン配信

【主催】法政大学江戸東京研究センター，法政大学エコ地域デザイン研究センター，国分寺名水と歴史的景観を守る会

【プログラム】

第一部：事前配信

「中世武蔵国絵図」の解説（神谷博特別講義続編）

第二部：ライブ配信

パネルディスカッション「中世武蔵国における玉川と国府・国分寺」～歴史的景観と伝承をめぐって～
話題提供

「古代と中世／多摩川と玉川」小野 一之（大東文化大学非常勤講師）

「恋ヶ窪の中世遺跡と畠山重忠伝承」依田 亮一（国分寺市教育委員会）

「武蔵野景観考」神谷 博（法政大学江戸東京研究センター／エコ地域デザイン研究センター 客員研究員）



○2021 年度第 3 回テリトリーオ研究会

【日時】2021年7月5日

【会場】法政大学市ヶ谷田町校舎 T205 教室（オンライン配信併用）

【主催】法政大学エコ地域デザイン研究センター

【講演】「建築・都市・テリトリーオの空間構造を読む—価値の発見とその再生に向けて—」陣内秀信 特任教授

○第 13 回外濠市民塾「外濠 150 年—未完の都市計画公園としての外濠変遷—」

【日時】2021年7月21日

【会場】オンライン配信

【主催】外濠市民塾実行委員，法政大学エコ地域デザイン研究センター

【講師】小藤田正夫（元千代田区役所職員・NPO 法人神田学会理事）



○第 14 回外濠市民塾:オンラインレクチャー「タイムトリップ・江戸から東京へ—千代田と江戸城外堀の風景」

【日時】2021年10月27日

【会場】オンライン配信

【主催】外濠市民塾実行委員，法政大学エコ地域デザイン研究センター

【講師】後藤宏樹（元千代田区立日比谷図書文化館学芸員・早稲田大学人間総合研究センター研究員）



〇コロナ、都市の危機と再生を問う—第 46 回法政大学大学院まちづくり都市政策セミナー

【日時】2021年12月18日

【会場】法政大学市ヶ谷キャンパス富士見ゲート4階G403教室ほか

【主催】法政大学大学院, エコ地域デザイン研究センター

【プログラム】

基調講演「今、真の都市再生とは？」陣内秀信特任教授

分科会1「都市におけるインクルーシブなオープンスペースの可能性」

分科会2「社会的包摂と市民社会-次世代を展望する」

〇国際シンポジウム「テリトリーオが実現する持続可能な地域づくり—『イタリアのテリトリーオ戦略—甦る都市と農村の交流—』発刊記念—」

【日時】2022年1月30日

【会場】オンライン配信

【主催】法政大学イノベーション・マネジメント研究センター, エコ地域デザイン研究センター

【プログラム】

「チェントロ・ストロコからテリトリーオへ」陣内秀信特任教授

「テリトリーオの内発的発展」木村純子(法政大学経営学部教授, エコ地域デザイン研究センター研究員)ほか

第46回 法政大学大学院まちづくり都市政策セミナー

コロナ、都市の危機と再生を問う

COVID-19は、世界や地域の社会・経済的状況を大きく変え、同時に、すでに顕在化している環境などの問題がより深刻になりました。多岐に都市に引き起こす、社会と経済に持続可能性の危機をもたらすことにはあきらめず、都市で、アフターコロナの都市再生をめぐり議論を加えています。そのなかでも、イタリアで起こったパンデミックは、文化財や環境を保護しながら、持続可能な都市の再構築の道筋を示しています。そこで、2021年12月のまちづくり都市政策セミナーでは、「社会的包摂」と「都市再生」という2つのテーマから、持続可能な都市を再構築する「都市再生」のありかたについて、日本社会への思いを話し合いたいと思います。

2021年12月18日(土)

法政大学市ヶ谷キャンパス 入場無料(定員150名)

10:00 開会の挨拶 廣瀬史哉(法政大学校長)

10:10~11:30 基調講演 富士見ゲート403

陣内秀信 (法政大学特任教授)
[所属]法政大学エコ地域デザイン研究センター

今、真の都市再生とは？—自然・歴史・ commonsの視点から

新型コロナウイルスのパンデミックに世界が置かれる以前から、「行先不明な現代都市文明からの脱却」を求めざるを得ない状況がすでに長年続きました。ここでは、私自身が30年近くは研究に取り組んで来た、似た条件をもつイタリアと日本の都市を対照的に、「都市再生とは何か」を考えてみます。

成長の限界が明確になった1970年代の頃から、イタリアでは「都市再生」への動きが定着し、地方分権のもと、歴史都市の保存再生、中心都市での創造的な産業の創出が進み、さらに自らの状況からは、旧版商業ゾーンの再評価、スローシティ運動の展開など、アトモエオク(地域)の能力を振り起こすことで都市・地域づくりの新たな動きを強めています。

日本の現状では、これと強弱を有するスマートシティ型の高度な動きが各地に見られるものの、社会全体では、大規模開発による経済活性化をめざす「都市再生」の考え方が根拠からず弱まっています。注目の注目を、「真の都市再生」のありかたを今こそ、考え直さなければならないと思います。(廣瀬史哉コメント)

法政大学イノベーション・マネジメント研究センター 主催 法政大学エコ地域デザイン研究センター 協賛

テリトリーオが実現する持続可能な地域づくり

『イタリアのテリトリーオ戦略—甦る都市と農村の交流—』発刊記念国際シンポジウム

イタリアの農村は、自然の恵みを受けながら、スローライフの生活を送り、環境を大切にし、エカスタットニアの精神が、イタリアの文化の根幹を成している。テリトリーオの精神から学ぶことが、これからの持続可能な社会の構築に重要な役割を果たす。持続可能な社会の構築に、イタリアの経験から学ぶことが、これからの持続可能な社会の構築に重要な役割を果たす。

この際、テリトリーオの精神から、イタリアの農村が実現している「スローライフ」の精神と、都市部と農村の交流—『持続可能な社会』をテーマに、パネルディスカッションを行います。本日は、真の都市再生を問うまちづくりセミナーを開催し、イタリアの経験から学ぶことが、これからの持続可能な社会の構築に重要な役割を果たす。また、持続可能な社会の構築に、イタリアの経験から学ぶことが、これからの持続可能な社会の構築に重要な役割を果たす。

2022年1月30日(日) 13:00~17:35

YouTube Live
https://www.youtube.com/watch?v=...

法政大学イノベーション・マネジメント研究センター 〒104-8601 東京都中央区新富1-10-1
TEL: 03-3244-9419 / E-mail: info@innovation.jp / URL: http://innovation.jp

法政大学エコ地域デザイン研究センター メンバー

2022年3月現在

【センター長】

岩佐 明彦 法政大学デザイン工学部建築学科 / 教授

【兼担研究員】

出口 清孝 法政大学デザイン工学部建築学科 / 教授
高村 雅彦 法政大学デザイン工学部建築学科 / 教授
網野 禎昭 法政大学デザイン工学部建築学科 / 教授
川久保 俊 法政大学デザイン工学部建築学科 / 教授
朴 賛弼 法政大学デザイン工学部建築学科 / 助手
道奥 康治 法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科 / 教授
高見 公雄 法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科 / 教授
福井 恒明 法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科 / 教授
鈴木 善晴 法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科 / 教授
今井 龍一 法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科 / 教授
根崎 光男 法政大学人間環境学部 / 教授
小島 聡 法政大学人間環境学部 / 教授
木村 純子 法政大学経営学部 / 教授

【特任研究員】

陣内 秀信 法政大学 / 特任教授

【客員研究員】

石神 隆 法政大学 / 名誉教授
高橋 賢一 法政大学 / 名誉教授
西谷 隆巨 法政大学 / 名誉教授
永井 進 法政大学 / 名誉教授
森田 喬 法政大学 / 名誉教授
馬場 憲一 法政大学 / 名誉教授
宮下 清栄 元法政大学デザイン工学部教授
北山 恒 元法政大学デザイン工学部教授, architecture WORKSHOP 主宰
横浜国立大学 / 名誉教授
金谷 匡高 世田谷区教育委員会 / 学芸員
神谷 博 アトリエ水系デザイン主宰
岡本 哲志 岡本哲志都市建築研究所 / 代表
浅井 義泰 (株)エキープ・エスパス / 取締役
阿部 彰 一般社団法人 まちふねみらい塾 / 専務理事
猪野 忍 (有)猪野建築設計 / 代表取締役
大隈 哲 建築家・(株)イーソーコ総合研究所 / 特任研究員
小松 妙子 マヌ都市建築研究所

酒井 哲 TownFactory 一級建築士事務所 / 代表
 佐々木 政雄 (株)アトリエ74 建築都市計画研究所 / 代表取締役
 清水 淳 北川かっぱの会代表
 菅原 圭子 大成建設(株)
 鈴木 知之 写真家
 高松 巖 一般社団法人 まちふねみらい塾代表理事
 鳥越 けい子 青山学院大学総合文化政策学部 / 教授
 難波 匡甫 Lueur 場所と空間の研究所 / 所長
 堀川 洋子 筑波大学生命環境系 / 研究員
 水田 恒樹 社会福祉法人 小茂根の郷 / 監事
 横内 憲久 日本大学理工学部まちづくり工学科 / 教授
 恩田 重直
 長野 浩子 株式会社 UR リンケージ九州支社
 石渡 雄士 国立研究開発法人 建築研究所 戦略的研究推進室 / 専任研究員
 稲益 祐太 久留米工業大学工学部建築設備工学科 / 特任講師,
 法政大学デザイン工学部 / 兼任講師
 樋渡 彩 近畿大学工学部建築学科 / 講師
 高道 昌志 東京都立大学都市環境学部都市政策科学科 / 助教
 ディエゴ・コサ・フェルナンデス 一般社団法人キタ・マネジメント・建築文化研究所 / 所長
 森屋 雅幸 江戸川区教育委員会 / 学芸員
 栗生 はるか 一般社団法人せんとうとまち / 共同代表
 金子 俊之 株式会社福山コンサルタント

【客員研究員（海外）】

神田 駿 マサチューセッツ工科大学建築+都市計画学科 / 教授
 阮 儀三 同済大学国家歴史文化名城研究センター / 所長
 Richard Bender カリフォルニア大学バークレー校 / 名誉教授
 Rinio Bruttomesso ヴェネツィア水都国際研究センター / 元所長
 Donatella Calabi ヴェネツィア建築大学建築史学科 / 名誉教授
 Paola Falini ローマ大学建築学部都市計画学科 / 教授
 Giuseppe Gargano アマルフィ歴史文化研究所 / 歴史家
 Ekhart Hahn ドルトムント工科大学客員 / 名誉教授
 Milan Konecny マサリェク大学地理情報学科 / 教授
 Matteo Dario Paolucci ヴェネツィア建築大学 / 講師
 Suwattana Thadaniti チュラロンコン大学社会科学研究所 / アドバイザー・准教授
 Paul Waley リーズ大学環境学部地理学科 / 教授
 Roderick Wilson イリノイ大学 / 助教授

以上

法政大学エコ地域デザイン研究センター

本研究センターは、「環境の時代」を切り開く真の「都市と地域の再生」のための方法を研究することを目的とし、2004年4月にエコ地域デザイン研究所が設立、2016年4月にエコ地域デザイン研究センターと改名しました。とくに、長い歴史の中で豊かな環境を育みながら、近代化の中でないがしろにされてきた地域資源を再生し、21世紀の都市・地域づくりの大きな柱にすることを目指しています。環境のバランスと文化的アイデンティティを失った日本の都市や地域を持続可能で個性豊かに蘇らせるために、〈エコロジー〉と〈歴史〉を結びつける独自のアプローチをとるところに大きな特徴があります。

国内外の専門家とネットワークを形成し、多角的な理念と手法を探求することにより問題解決に取り組んでいます。他の国や地域と比較しながら都市とテリトリー（地域）の水辺空間や自然環境を歴史的な視点を取り入れつつ深く研究し、その再生の具体的な方法を積極的に提言していきます。

法政大学エコ地域デザインセンター

2021年度報告書

発行日 2022年6月
発行 法政大学エコ地域デザイン研究センター
〒102-8160
東京都千代田区富士見 2-17-1（市ヶ谷キャンパス）
新見附校舎1階 研究開発センター内
<http://eco-historiy.ws.hosei.ac.jp/wp/>
印刷 藤原印刷株式会社
協賛 総合資格学院